

アーバン・デザイン・センター 柏の葉アーバン・デザイン・ブランディング 4クン

柏の葉
アーバン
デザイン
センター

UDCK

Urban Design Center Kashiwa-no-ha

IEDP環境デザイン統合教育プログラム・都市デザインスタジオ2009

東京大学COE『都市空間の持続的再生学の創出』 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学系

都市環境デザインスタジオ 2009 Urban Space Design

新しい田園都市をデザインする

はじめに

人口縮小社会においては、いわゆる郊外、高度成長期に急拡大した大都市周辺地域は多くの問題が起こると予想されます。しかし同時に、豊かに残る自然や多様な人的資源など、環境共生型、生活重視型の地域づくりに可能性があります。当スタジオは、東京大学柏キャンパス周辺、つくばエクスプレス（TX）沿線『柏の葉地域』を取り上げ、魅力的なまちづくりのプロジェクトを企画、それを起点に地域の将来像を描いていく、新しい時代に向けたアーバンデザイン演習です。市民、自治体、企業と交流し、沿線の複数大学も参加します。大学と地域による公私連携まちづくり組織『柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）』と共同します。こうしたオープンな検討によって、研究の幅を広げるとともに、提案の実現をめざします。

1 都市デザインスタジオ 2009 の目的

- 都市の未来を構想し現実を変えていく戦略を練る力を磨きます。
- 空間を計画デザインする力、あるいは政策を立案し制度を設計する力を磨きます。
- 分かりやすく相手に伝える力、そして議論し説得する力を磨きます。

2 都市環境デザインスタジオ 2009 のテーマ

柏の葉地域のアーバンデザイン「新しい田園都市をデザインする」1898年英国の社会事業家エベネザー・ハワードが提案した『明日の田園都市』は、都市の急速な拡大に対し、都市と自然の共生を描いたものです。ガーデン・サバーブやニュータウンなどその波及は言を待ちません。しかし今日は人口減少や環境政策により都市が縮減に向かっています。都市と自然のあり方が改めて問われています。都市環境デザインスタジオでは2008年度に「新しい田園都市を構想する」として柏なか地区を対象に課題に取

り組みました。今年度は、さらに発展させ、具体的ないいくつかの拠点を対象に提案を求めます。受講生それぞれが新しい発想でオリジナリティ溢れる提案をすることを期待しています。グループでの議論や作業、充実したスタッフの個別指導、地域の関係者のアドバイスもあります。ステップ・バイ・ステップで進みますので、これまで計画やデザインにあまり触れたことがない人も参加できます。

3 都市環境デザインスタジオの進行

【全てグループ作業】

ケーススタディ対象地区＝柏なか地区

対象地区はTX柏なか駅の周辺地区です。東口地区と西口地区に二分され、いずれも鉄道一体型区画整理の事業区域です。東口地区には農地や農家が多く残っています。これが柏なかの原風景です。一方、西口地区は基盤整備が進行中ですが、集落や樹林地の一部は保全され、建築整備は本格化前です。両地区とも、利根川に沿った北寄り部分に従前の空間や風景が残っています。

◇構想以下の5つのテーマとし、各グループいずれかを選択することとします。（各構想を補足するために、2008年度の課題で議論したキーワードを併記しています。）

1：モビリティ／ツーリズム

新しい田園都市の交通システムや都心や他地域を対象としたツーリズムの可能性についての構想など・つくばエクスプレス線沿線と常磐線沿線地区的交通、既存バス交通、自動車交通の新しいあり方・豊かな街路空間をつくる・都心や他の地域から人を呼び地域を活性化する構想

2：農地／緑地

新しい田園都市における農地や緑地についての構想など・農業者

の高齢化問題、耕作放棄問題、区画整理による農地の減少など・農地の借地利用、農業法人、農業工場など・現在ある農村集落の持続可能性、保全のためのアイディア・共同農園やクラインガルテン、産直販売所「かしわで」、JAの新しい展開、新しい農産物の流通方法など・緑地のネットワーク、既存地形の活用

3：環境技術（供給・処理）

新しい田園都市における環境技術についての構想など・複合エネルギーとしての地下水や風力、太陽エネルギーの利用など・排水処理と土質沼などの汚染問題、ゴミ処理問題やバイオマス活用など

4：教育／コミュニティ

新しい田園都市における教育やコミュニティについての構想など・古くからの住民と新規開発地区の住民の交流・大学などと共同で行う新しい教育、県立柏北高校跡地の利用、住宅地につくる地域に開かれた学校など・高齢者と学童保育の組み合わせ、農業技術学校、職業訓練学校など・コミュニティ・ビジネスの可能性

5：田園住宅／集落空間

新しい田園都市における田園住宅のあり方や既存の集落との関係性、住宅地というまとまりについての構想など・適切な住宅の密度や地区によって密度差をつけた計画など・地域の歴史性をいかした集落空間のあり方・良好な自然環境を生かした住宅地計画

◇計画対象地

上記の構想について、計画対象地を以下の5地区とし、各グループいずれかを対象とすることとします。

A：区画整理が既に行われた地区的新しい住宅地

B：旧県立柏北高校跡地

C：つくばエクスプレス線柏なか駅および駅前商業地域

D：整備をまだ行っていない農村集落地区

E：柏ビレジ地区

◇拠点計画のネットワークと都市スケールでの展開

AからEまでの計画対象地ともう1地域以上（AからEまでの地域、あるいはそれ以外の地域でも良い）を選び、拠点計画を結ぶネットワークや都市的なスケールでの展開についての構想を行います。

＜第1段階＞ 新しい田園都市のデザインのコンセプト提案

構想についての事例調査や対象地区的調査、図面化、模型化の作業を行う。その構想によって生まれる21世紀の田園都市に期待される新しいライフスタイルを提案する。中間公表会のための成果物：計画図・模型リサーチの報告 コンセプト、スケッチ、ダイアグラム（概念図、模式図）を効果的に組み合わせる

＜第2段階＞ 新しい田園都市の具体的な空間デザイン提案

第1段階で提案したラフ提案をさらに詳細に検討し、対象地区への適用を前提とした実現性や社会的経済的仕組みを提案する。コミュニティ形態、税制度、不動産ビジネスなど広く柔軟に考える。中間公表会のための成果物：計画図・模型（各グループでフォーマットをそろえる）A1パネルプレゼンテーションコンセプト、スケッチ、ダイアグラム（概念図、模式図）を効果的に組み合わせるパワーポイントを使ったプレゼンテーションを行う

＜第3段階＞ 新しい田園都市の具体的な空間デザインのプレゼンテーション

第2段階で提案した社会システムに対応した建築や空間を設計する。ライフスタイルと社会システムを最も効果的に表現できる場所を対象地区から選び、そこにデザイン提案を行なう。計画図・模型（各グループでフォーマットをそろえる）A1パネルプレゼンテーションコンセプト、スケッチ、ダイアグラム（概念図、模式図）を効果的に組み合わせるパワーポイントを使ったプレゼンテーションを行う。



<第4段階> 成果の公開

展示：UDCK のギャラリー 公開シンポジウム：成果の報告とディスカッション 都市スタジオブック：成果を編集し、冊子化、頒布する。

4 受講生

東京大学、千葉大学、東京理科大学、筑波大学大学院生。行政や企業も参加する場合もあります。空間をベースに議論や提案、計画、設計を行いますが、人文社会学系の学生も習得が可能なプログラムです。狭義のデザインすなわち都市や建築、外部空間の空間設計能力だけを問うものではありません。無論、基本的なデザインスキルを身に付けることやスキルアップを図ることは可能です。指導スタッフは幅広く充実しています。

5 単位の認定

東京大学の場合、新領域創成科学研究科以外、工学系研究科学生も単位取得ができます。

- ・4 単位：新領域創成科学研究科（共通科目：環境デザイン統合教育プログラム）
- ・4 単位：工学系研究科（都市工学専攻『都市プロジェクト演習 第3と第4』各2単位。前半のみ取得も可能）

千葉大学工学研究科建築・都市科学専攻（建築学コース）建築システムデザインⅡ：2単位

東京理科大学理工学部建築学科都市デザイン演習：2単位

[関連情報]

- 2008 年度受講生によるスタジオブログ
<http://uds2008.exblog.jp/>
- 2007 年度受講生によるスタジオブログ
<http://udstudio.exblog.jp/i6>

■ 2006 年度受講生によるスタジオブログ

<http://udstudio.exblog.jp/>

■「柏の葉アーバンデザイン・アイデアップ」当スタジオの成果をまとめた冊子。受講生が編集しました。

■環境デザイン統合教育プログラム

<http://www.k.u-tokyo.ac.jp/j/syllabus/emp/iedp.html>

■柏の葉アーバンデザインセンター

<http://www.udck.jp/>

北沢猛
(社会文化環境学専攻教授 /UDCK 柏の葉アーバンデザインセンター長)
清家剛

(社会文化環境学専攻准教授 /UDCK 柏の葉アーバンデザインセンター長代理)

スケジュール

全体：水曜 4限 5限 1500-1810:UDCK

グループ別：金曜 1限 2限 0830-1155

<第1段階>

10月07日 (水) 16:00-

柏キャンパス環境棟 6階講義室 ガイダンス

1. 課題書説明

2. 柏田中の状況と昨年成果

3. 区画整理事業について

4. 柏市(北部整備課松本様、高野山様、農政課出元様)やJA田中(米村専務理事、飯田経済部長)も交えて、学生と意見交換

10月14日 (水) 第1回全体指導(グループ分け) @ UDCK

10月21日 (水) 第2回全体指導@ UDCK

10月28日 (水) 中間講評会(ライフスタイルの提案:アイデアカード集+パワポ) @ UDCK

<第2段階>

11月04日 (水) 第1回全体指導@ UDCK

11月11日 (水) 第2回全体指導@ UDCK

11月18日 (水) 第3回全体指導@ UDCK

11月25日 (水) 中間講評会@ UDCK

<第3段階>

12月02日 (水) 第1回全体指導@ UDCK

12月09日 (水) 第2回全体指導@ UDCK

12月16日 (水) 第3回全体指導@ UDCK

12月25日 (金) 午前 9:00-12:15 最終講評会@ UDCK

01

柏たなか

1) 常勤教員

北沢猛（空間計画学・新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻教授・工学系研究科都市工学専攻）
清家剛（建築構法學・新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻准教授・工学系研究科建築学専攻）
清水亮（環境社会学・新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻准教授）
日高仁（建築家・新領域創成科学研究科特任助教・国際キャンパス担当）
＊共同する千葉大学、東京理科大学、筑波大学の教員
上野武（建築家・千葉大学キャンパス整備企画室教授・千葉大学工学研究科建築・都市科学専攻兼任）
鈴木弘樹（建築家・千葉大学工学研究科建築・都市科学専攻助教）
伊藤香織（都市計画・東京理科大学理工学部建築学科准教授）

2) 非常勤講師

前田英寿（都市デザイン・UDCK 副センター長）
野原卓（都市デザイン・東京大学工学系研究科・COE 特任助教）
栗原謙樹（建築設計都市デザイン・竹中工務店設計部）
三牧浩也（都市プラン・日本都市総合研究所研究員・東京大学共同研究員）
田中大朗（建築設計都市デザイン・UDCT 田村地域デザインセンター・東京大学共同研究員）

3) 特別講師

大野秀敏（建築家・新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻教授・工学系研究科建築学専攻）
斎尾直子（地域計画・筑波大学大学院システム情報工学研究科准教授）

4) 共催

柏の葉アーバンデザインセンター UDCK：センターの活動と連携し指導を行います。
丹羽由佳理（建築都市設計：UDCK ディレクター、東京大学客員共同研究員）
田口博之（建築都市設計：UDCK ディレクター）

5) アシスタント

関谷進吾（東京大学大学院 新領域創成科学研究科 空間計画研究室）
佐藤亮洋（東京大学大学院 新領域創成科学研究科 空間計画研究室）

6) 協力組織

自治体や専門家、企業、地域団体、地元市民の方々と地域の視点をもとに議論を深めます。
柏市役所、UR 都市再生機構、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会、市民団体・NPO、地域市民

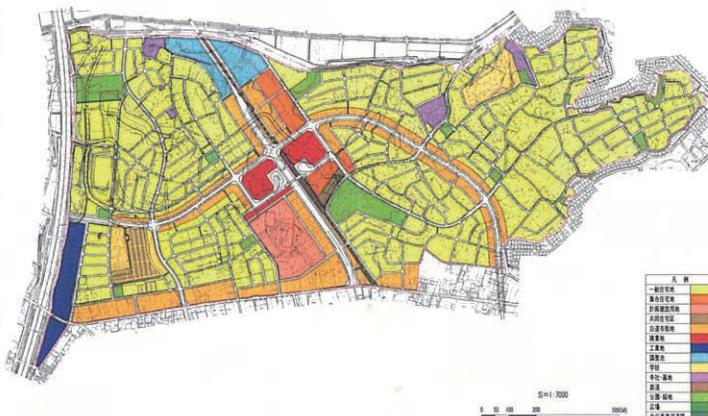


現況

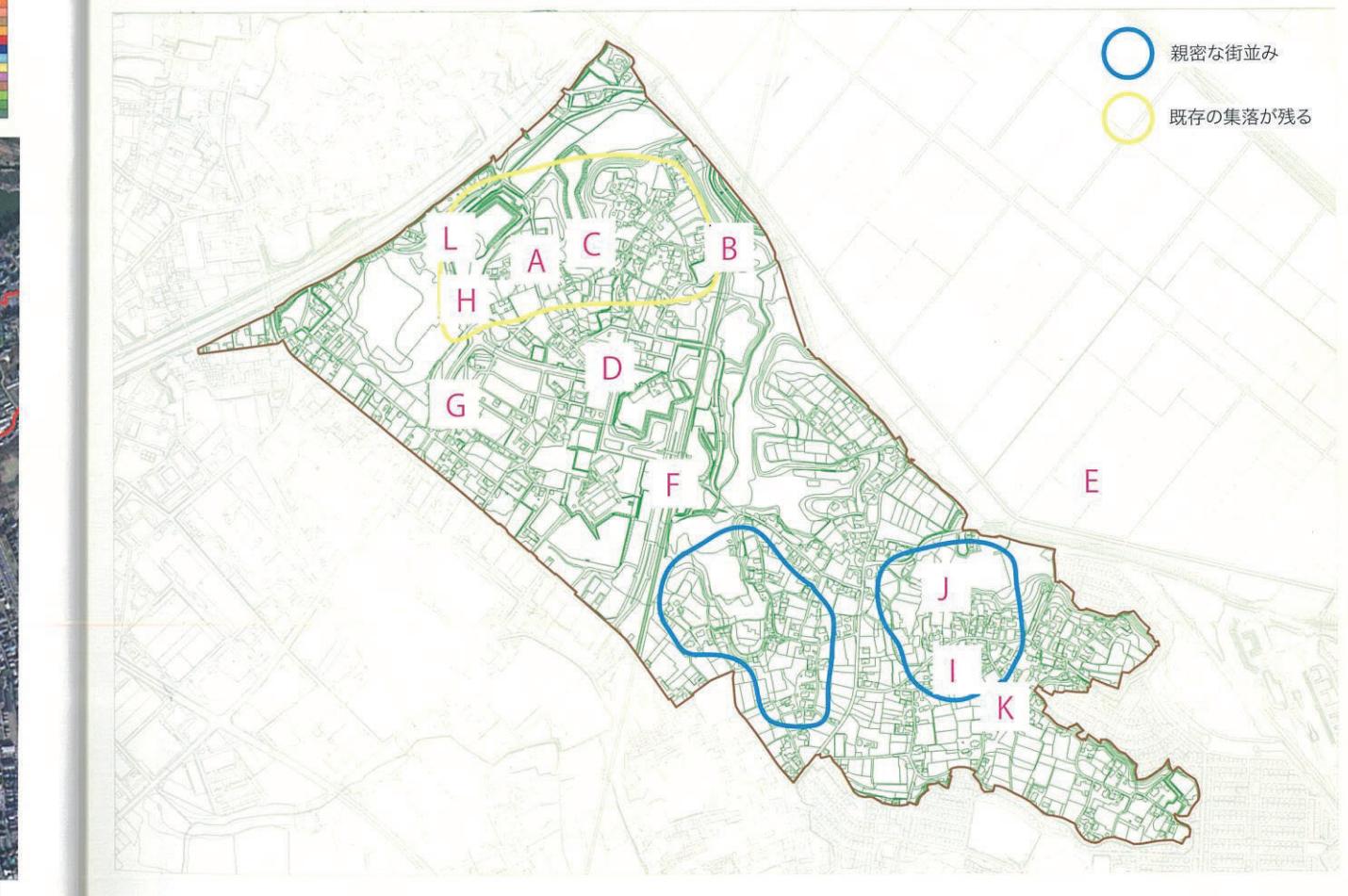
柏市北部地域は、「緑園都市構想」の基本理念である都市の活力と環境が調和した職住近接のまちづくりをめざしている。柏市HPでは「地域に培われてきた郷土の歴史や生活文化などを大切にし、残されている貴重な緑地や水辺を生かすとともに、つくばエクスプレスの新駅を中心に広域生活・文化や業務、交流を担う活力と魅力を備えた、東葛北部地域の中核都市にふさわしい地域整備を行うために、一体型特定土地区画整理事業による計画的な都市基盤の整備を目指します。」と記載されている。「一体型土地区画整理事業」とは、鉄道用地を生み出すため、地方公共団体、都市基盤整備公団等が事業の施行区域内の土地を先買いいし、その土地を鉄道施設区域内に集約して換地することができる。「大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法」(宅鉄法)に基づいて行われる土地区画整理事業である。

「緑園都市」は、つくばエクスプレス沿線の新しい市街地整備地区を中心として、都市の活力と環境が調和した職住近接のまちづくりをめざしていくものである。「都市の活力と環境の調和をめざすまち」を基本理念とし、ふるさとの緑と文化を大切にしたまちづくり、いきいきと住み、働き、学び、遊ぶまちづくり、人と環境に優しいまちづくりを掲げている。緑園都市の整備にあたっては、既成市街地の集積やこれまで地域で培われてきた郷土の歴史や生活文化との調和・連携を図る。また、既存の緑地資源や水辺空間を生かした空間整備を図るとともに、活力と魅力を備えた東京圏の中核都市としての成長を期して、業務機能、居住・生活関連機能、産業、芸術・文化、レクリエーション機能等からなる多機能自立型の都市整備を進めている。

事業種別	一体型特定土地区画整理事業
事業主体	都市基盤整備公団
施行区域面積	約 169.9 ヘクタール
計画人口	約 17,000 人



柏市 HP [柏市のまちづくり (北部地域のまちづくり)] http://www.city.kashiwa.lg.jp/cityhall/sosiki/B_TOKE/TOKE_TOK/



ヒアリング

JA ヒアリング

2009年11月18日 15:00~
JAたなか会長含む2名

UR ヒアリング

2009年12月02日 16:30-17:30
UR 敷地担当者 1名

歴代小青田町会長一同ヒアリング

2009年12月16日 15:00-16:30
歴代小青田町会長 5名、柏市北部整備課

概要

2009年度のヒアリングは、前年と異なり、全てUDCKで行いました。この形式によって、学生は、提案の内容をヒアリング対象者に直にフィードバックし、貴重な見識を得るとともに、自分たちの提案の方向性を確認することを可能としました。今回は、開発事業者であるURと敷地である小青田町内会の歴代の町会長一同に来て頂きました。URの開発の視点とその取り組み方により、現状の開発の実態を知り、事業を行なう側としての試行を知ることが出来ました。また町会長による現場の歴史的変遷と現状の本音を聞かせて頂きました。印象深かったのは、町会長が、この提案を10年前に聞いたかったということでした。事業計画の初期段階から提案の議論が出来ていればという願いからは町会長の学生の提案に対する期待を感じました。ヒアリングにより、地域の動向をしっかりと把握することができました。そして、各グループの提案に活かされたと思います。

日時：2009年11月18日 15:00~
場所：UDCK



JA ヒアリング

参加者：JAたなか会長含む2名

A 農地班：

柏たなか周辺に元々住んでいる人たちと、後から来る世代について伺いたい。以前から住んでる方としての質問をしたい。

[質問]：昔の小字、大字の単位などがあるが、コミュニティーの単位を知りたい。

- ・個人の財産が多い。一つ一つの屋敷が大きい。
- ・全体的に地域を見ると、財産の土地の広さが特徴。
- ・小青や、他地域には、集落別の発展の違いがある。
- ・小青の集落にはコミュニティーが一つしかない。組合がある。
- ・現在は、変化が大きすぎて、また交流も少なく、隣人を把握していない。
- ・戸建では売れている。マンションは今一つ。
- ・若い後継者がポツポツとU-ターンが生まれてきた。
- ・開発されなかったから、跡継ぎが出来たという事実はあるだろう。
- ・ビレッジの方はあまり柏たなか駅を使っていない。ビレッジは、キャンパス駅からバスを使う。
- ・ビレッジ周辺に元々住んでいる人たちは使っている。

B モビリティー班：

モビリティーを通じて、居住者がどう住み、どう動くのかを考えている。

[質問]：どのような行動をとられているか？高齢者の動態は？

・農業後継者が少ない地域と増えてる地域がある。千葉県の後継者がいる場所は開発がされている地域である。

・一方では不動産の賃貸の運用をしている。安心して農業している経緯がある。

・農業には広い道路はいらない。開発などの土地利用を考えたい。

・車での移動が多い。高齢者も同じ。

・電車に乗って買い物に行く人は少ない。

・「ふるさとセンター」、「ふるさと会館」が各地区にある。集会はそこらで行なう。

・昔からの集落の人たちと新しい居住者がどう交流するかが困難な点である。

・集落のゴミの当番、文化祭、運動会などの運用が悩みの点である。

・JAでは小さい直売所をやっている。施設を建てる場所を検討。

C 環境技術班：

柏たなかしさを活かした環境技術。竹林に焦点を絞った。柏たなかの緑を見ると、柏たなかの地形に沿った自然である。

竹林の分布を見ると、拡大している。現代的な利用の価値を見出せるのでは。

[質問]：昔から竹林は存在していたのかどうか？森林を里山として使っていた場所はあるのかどうか？竹林に対して問題意識はあるのか？環境問題としてのJAの意識は何か？

- ・昔は、奇麗な畑に竹が拡大した経緯はあるだろう。
- ・燃料がなかった時期には、森林を燃料にしていた。
- ・竹林を皆大事に育ててきた。昔は大変貴重な財源だった。
- ・竹林で困ってきたことはあるのかどうか。
- ・地域のどこが一番残したい地域なのか。議論があった。遊水池の一部の風景の魅力は素晴らしいと捉えている。
- ・風景としての田んぼなどの維持が大変である。

D 田園住宅／コミュニティー班：

駅を中心とした開発の計画をしている。柏たなかの表玄関として考えている。「水田に浮かぶ駅」を考えている。

[質問]：TXが出来て、沿線開発に対してどう考えているのか？駅に対しての考え方。開発に対して、あるいは今後の景観をどう考えているのか？URとの立場。街の運営に関して。

・開発に地権者は最初は反対した。JAとして、主催の勉強会を開いた。URの方の説明会。継続しなかったことが良くなかった。一部は賛成している。

・今はどうせやるなら早い方がいいという声が多い。
JAとしては、農地の守る方法、土地をどう利用するのかを考えたい。跡継ぎの問題からの体験農業の実践などを計画してきた。開発後の活用について考えたい。

・URからの開発の話は無かった。近年は体験農園にかなり協力的である。開発した後の農地に興味があるらしい。

・農あるまちづくりを考えている。開発に関してはJAは言及していない。

・全国的に耕作放棄地が問題になっている。実際に何が開発できるのか、現場を知らない。何を作つて。どう作るのか。いくらで売るのか。議論が出来ていない。

・耕作放棄地対策を行なうべきである。

質問：住宅開発に関するコミュニティー形成に関する質問です。30-40代の家族が入居してきた際に、農地、遊具などを交えて人が集まる仕組みを作ることを考えている。JAの仕事の内容と柏たなかに対する仕事の配分は何なのか。

・昔からの集落と風土の現代的な扱いが課題である。

・地域のイベントに対して積極的になる部落と、消極的な団体もある。

・柏たなかには9つの集落がある。柏の葉駅もたなかの地域の一つである。

小青田町会ヒアリング

日時：2009年12月16日 15:00より

場所：UDCK

参加者：小青田町会の方々、先生方、学生

ヒアリング対象者：

歴代小青田町会会長 渡辺、岡田、七妻、緒方（TX建設当時ふるさとセンター建設）、中村（次期町会長）

柏市：柏市北部整備課 高野山

[質問]：TXにより開発の前後によって町の変化があったのかどうか？町の中心の移動の変化などは？

町会長：神社を中心にして村が成り立っていた。

[質問]：大字、小字など、どういった単位でコミュニティが形成されていたのか？

町会長：小青田、大青田の単位。青田は、農作物が恵まれた環境でもあった。谷戸もあり、山もあり、広々とした自然が形成されている。基本は、集落の仲良しグループで成り立っている。

300年前に、21件、青田が存在している。個数も増えている。

[質問]：柏ビレジに住んでいる方、昔から住んでいる人、駅周辺の人々とのつながりはあるのか？

町会長：ビレジとはほとんどない。町会長全体としては、行事、祭り、などで一緒に活動をしている。

[質問]：駅はどこをご利用するか？

町会長：若い人はたなか駅を使う。小青田の方は、駅をあまり使わない。新しく入居する人が増えている。交流できるような場所を欲している。



[質問]：新しい土地利用計画、生産緑地が今の2割しか残らない。どう思われているか？

町会長：体験農園については、生産緑地を利用して、交流を生み出すことに期待をしている。農業の後継者が少ない中、一つの方法である。生産緑地を保存していくという意向があり、それらをどう活用していくかは議論になっている。農あるまちづくりを目指している。市役所とURと協議し、来年度より「体験農園」を実行することを計画している。多くの方にご参画頂けることを期待している。

市：柏たなか駅になった理由。

町会長：なぜ、「柏たなか」駅になっているのか。元々たなか村という村があり、本多田中藩が入墾してきたのが名称の由来である。良い政治を行なっていた、ことからたなかという名前を残すという意向があり、TXの駅の名前の一部に反映することとなった経緯がある。

[質問] モビリティー：商店などが多く、不便を感じたことはあるか？

町会長：商店などは基本的にない。不自由だが、車があるから、買い物は遠くに行って行なうものだと感じている。

[質問] モビリティー：車に乗れなくなった時は？

町会長：若い人に買ってきてもらうような体制を取るつもりである。

[質問] モビリティー：区画整理前と後とで、悪くなった点は？

町会長：新しい人の交流の場が形成されていない。散歩す



る中のコミュニティがあるが、その程度である。年代が変わって、30～40年代は上手くつき合ってくれることを期待している。人口が増えないのは、調整区域に家を立てられないことであった。市街化にするまでは、地元のものだけが残る静かなエリアであった。

[質問]：駅の前はずっと水田だったのかどうか。地盤が弱いことが、畠や水田、家の配置に関与しているのかどうか。

町会長：駅前は、畠だった。一部は水田であった。土壤改良を行なって、整備が可能になるようにしている。駅の東側は、(30年前)八田は、ゴミの廃棄があった。その改良が必要であった。そのエリアは公園にすることを考えている。公式な産業廃棄物処理所として利用されていた。

[質問]：水田の所有はどうなっているのか。

町会長：40丁の地元は20丁、入植してきた人のものが20丁。地元は、平均6反の配分。50%ずつ分けている。

[質問]：今は主産物は株と聞いているが、以前はどうだったのか。

町会長：年代によって、変わる。前はネギ、人参が中心だった、ほうれん草、枝豆。夏作、冬作があるが、時々によって変わる。春先に7、8つの種類を計画する。園主が責任を持つ。

[質問]：美しい農地のあり方はとは？

町会長：以前は生産緑地には芝桜を植えようという方針はあった。

[質問]：平地に合う植物、斜面に合う植物はあるのか？

町会長：基本的には平地の方がいい。昔は知恵を出して、試行錯誤していた。あぜ道は一寸というルールがあった。

町会長：集合農地というのがあるが、区画整理事業の際に、残すことを主張していなかったのが問題。15年前に、スタジオで考案している提案があれば、良かったと思う。

UR 都市機構ヒアリング

日時：2009年12月02日 16:30-17:30

場所：UDCK

参加者：UR都市機構、先生方、学生

A 農地班：

- ・生産緑地の有効な活用方法を検討している。都心に近い利便性と農地の特異な関係。
- ・土地の活用方法、担い手の拡大、需給関係による体験農園の実施。参加費の徴収も収入になる。
- ・体験農園の運営主体は、積極性のある農家の方が中心。
- ・昔から住んでいる人の交流の場にもなる。
- ・既存の住宅をベースに景観農道のガイドラインの作成を計画している。
- ・生活に根差した日常に則した駅前の商業開発を目指している。
- ・東側の開発に関しては、区域の見直しがある。

B モビリティー班：

- ・柏ビレジへの交通アクセス、そして農と都市の共存
- ・柏たなか駅から北西の地区は大地主さんが多い地域
- ・販売的視点としては大きな敷地は求められていない、外構や家の作りで勝負する必要がある。
- ・駅前西口東口には足下まわりの商業地域を計画している。日常の買い物。クリーニング、スーパー、歯医者。
- ・懇談会を設置して、商業事業社、地権者、と駅前商業施設の一体感を計画。
- ・地区全体として利便性を図ることを計画。
- ・体験農園を通じてヒアリングを行い動向を伺い、交流を図る。
- ・単身の男性も参加している。どこに需要があるか分からない。

C 環境技術班：

- ・環境アセスメントの基準を満たす水準にある。
- ・近隣公園、緑地、公共施設、等、緑地保存が担保されている。
- ・斜面に緑地がある場所については、民地、公共用地の緑地保全を考慮している。
- ・環境技術という面では植物をチップ化したものを道路に使うことは検討している。
- ・高架下を情報発信拠点として利用することを検討している。
- ・環境技術はコストがかかるがPRとしては良い。
- ・計画している2つの近隣公園に竹の実施を行なうと面白いかもしれない。



02 プロセス

2006
都市スタジオ

柏の葉を拓く130の提案」

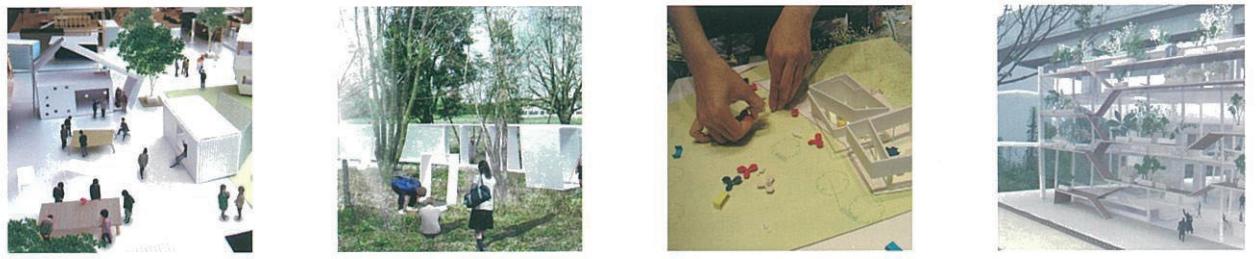
魅力あるまちづくりのために65の予見と65の企画を考えし、提案を実現するための計画、あるいは政策、制度、プロセスを設計した。公園や道、農地、林、緑地、河川や池などの「空間資源」、居住や教育、研究、交流などの活動に対応する「空間設計」、安全や安心、コミュニティや地域自治などの「社会システム」さらには「自治体政策」や「産学連携」など多様な視点から提案された。50年から100年先に私たちの生活や環境がどうなっているかを予測し、柏の葉地域で5年から10年以内に実現される事業などを検討した。



2007
都市スタジオ

「新しい公共空間を構想する」

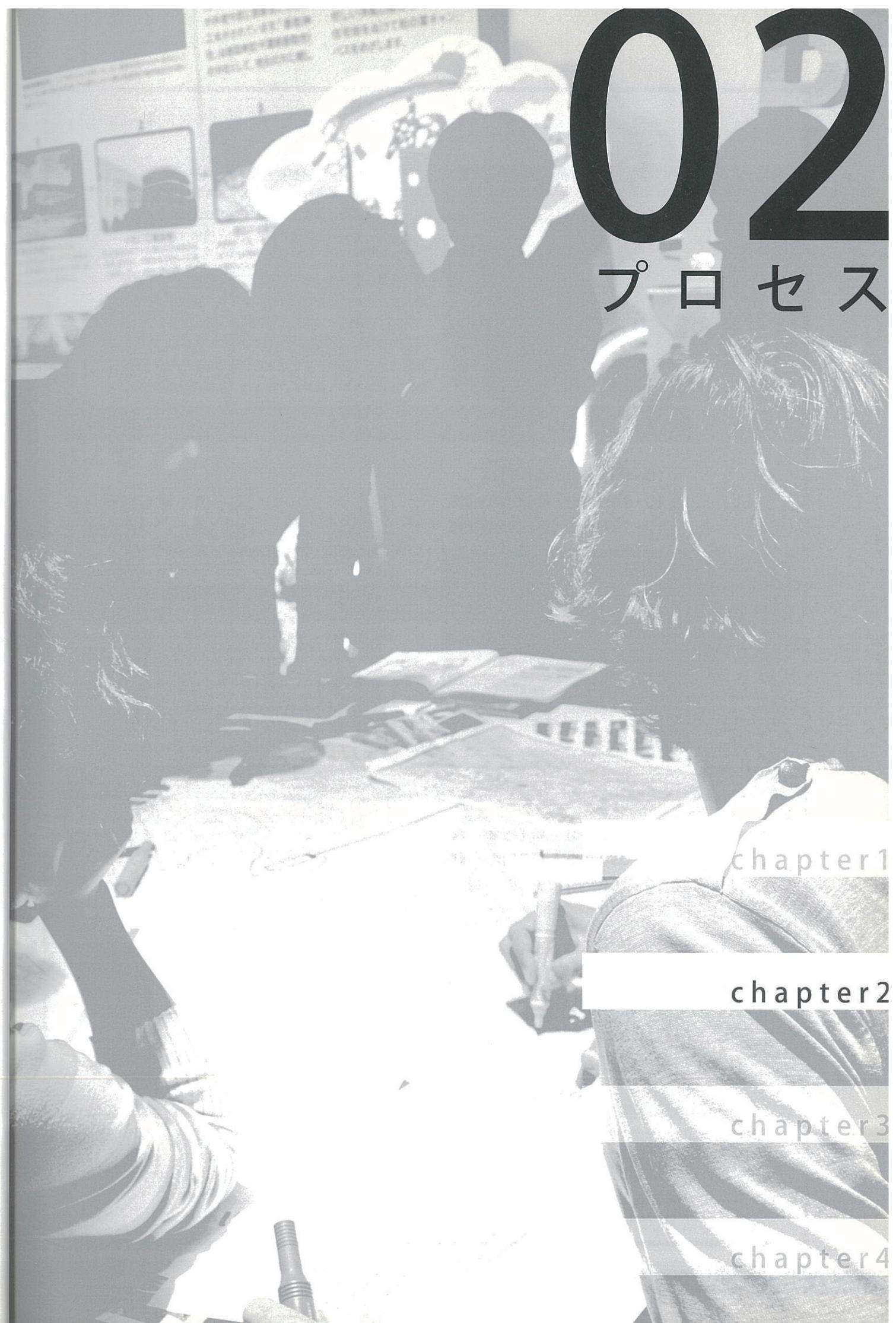
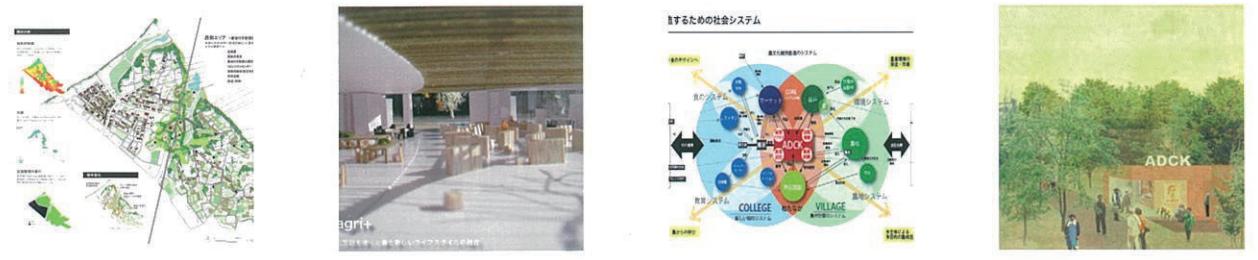
柏の葉キャンパス駅から東京大学に至る通りに沿って、6つのサイトに「小さな公共空間」を企画設計した。市民が自由に使い、管理運営が柔軟な広い意味のパブリックスペースを、面積50m²から最大で500m²程度で設計し、公共空間の周辺整備や公共空間の連続やネットワークなどを構想計画した。多くの人が使える小さな公共空間の設計、実現のために主体や仕組みとしての公共の計画、柏の葉地域全体の将来像を検討した。要所の具体的な提案を連鎖させるなど様々な両方向のアプローチから実践した。



2008
都市スタジオ

「新しい田園都市を構想する」

柏の葉北部地域をケーススタディに取り上げ、新しい『田園都市』に取り組んだ。ハワードの田園都市のようにまずはライフスタイルの提案を行い、次にライフスタイルを実現する社会システムを検討した。最後にライフスタイルと社会システムに対応した空間を設計した。今年度は前回までとは敷地を変えて柏の葉キャンパスの隣の駅である柏たなか駅周辺を対象とした。「農」というテーマについてその扱い方に頭を悩ませる班も多かったが、最終的に様々なシステムの提案や空間の提案が行われた。



chapter 1

chapter 2

chapter 3

chapter 4

プロセス

PROCESS

第1段階 新しい田園都市のデザインのコンセプト提案

- 10・07(wed) ガイダンス
- 10・14(wed) 第1回全体指導
- 10・21(wed) 第2回全体指導
- 10・28(wed) 中間講評会（ライフスタイルの提案：アイデアカード集+パワポ）

第2段階 新しい田園都市の具体的な空間デザイン提案

- 11・04(wed) 第1回全体指導
- 11・11(wed) 第2回全体指導
- 11・18(wed) 第3回全体指導
- 11・25(wed) 中間講評会

第3段階 新しい田園都市の具体的な空間デザインのプレゼンテーション

- 12・02(wed) 第1回全体指導
- 12・09(wed) 第2回全体指導
- 12・16(wed) 第3回全体指導
- 12・25(fri) 中間講評会

第4段階 成果の公開

- 01・13(wed) 第1回全体指導（UDCKにて展示開始、報告会の段取り）
- 01・20(wed) 第2回全体指導（ブック制作の段取り）
- 01・27(wed) 第3回全体指導（ブック制作の段取り）
- 01・30(sat) 報告会兼シンポジウム

ガイダンス

2009年10月7日、都市スタジオ2009のガイダンスが行われました。スタジオには東京大学、千葉大学、筑波大学、東京理科大学の学生・講師を合わせて40名ほどが参加しました。自己紹介を行い、昨年同様に専門・所属の異なる学生が集まっていると感じました。

ガイダンスでは始めに課題の説明を行い、かしわ田中の状況と昨年の成果を発表しました。さらに、UR都市機構の方から柏北部被害地区のまちづくりに関する説明がありました。最後に、柏市、JA田中の方々からかしわ田中の現状についてコメントをいただきました。生産緑地、後継者など農を取り巻く問題、都市と農業のあり方、農家と住民の関係など課題を考える上での様々な視点を設定するきっかけになったかと思います。



多くの受講希望者が集まったガイダンス（東京大学柏キャンパス環境棟にて）

テーマによるグループ分け

10月14日の第一回全体指導の際に、各学生の希望に合わせて4グループに分けました。昨年と同じ敷地ですが、今年は班ごとにテーマを設定し課題への切口を探ります。最初は、モビリティ/ツーリズム、農地/緑地、環境技術、教育/コミュニティ、田園住宅/集落空間の5グループに分けましたが、田園住宅/集落空間を解体し、モビリティ/ツーリズム/田園住宅/集落空間、農地/緑地、環境技術、教育/コミュニティ/田園住宅/集落空間の4グループに変更されました。グループは専門・所属の異なる学生により構成されています。運命共同体として議論を始めましたが、ほぼ初対面なせいか緊張した空気が回りには漂っていました。



班ごとの提案に向けての議論（UDCKにて）

第1回中間講評会

第1段階では、新しい田園都市のデザインのコンセプトを提案しました。ハード、ソフトを問わず、各グループのテーマに沿って課題、解決策を検討しました。構想についての事例調査、対象地区の敷地調査、文献調査を行うと同時に、グループごとにアイデアを出し合いながら議論を進めました。約2週間に渡って敷地の特徴を探りながらの議論、作業を経て、中間発表が行われました。グループそれぞれが趣向を凝らしたプレゼンテーションにより、グループによる性格の違いがはっきりとしてきました。コンセプトの提案段階ということもあり、講師陣からの厳しい指摘、質問が学生に飛び交いました。「なぜ柏たなかなのか」、という議論を深めるようにアドバイスが与えられました。



第一回中間発表（UDCKにて）

農協へのヒアリング

11月18日(水)にJA田中の方にUDCKに来て頂き、ヒアリング調査を行いました。グループごとにデザインのコンセプトを説明し、コメントをいただき、質問にも答えて頂きました。柏たなか地区周辺の歴史、柏たなかの魅力たる景観要素、コミュニティが抱える問題、後継者問題の現況、まちづくりの動向など様々な切り口から話を伺うことができました。実際にまちに住んでいる人から意見、考えを伺うことは、調査から得た知識や、自分たちの仮説を新たなステップに進めるためのきっかけになったかと思います。



第2回中間講評会

第2段階では、新しい田園都市の具体的な空間デザインの提案として、第1段階で提案したコンセプトの実現へ向けた社会的、経済的仕組みが提案されました。この段階では、対象地区へ適用するための実現性を検討し、コミュニティ形態、税制度、不動産ビジネスなど広く柔軟に考えることを目標としていました。ミーティングの際にはアイデアに関する議論を行うだけではなく、模型をつくり空間的な検討が始まり、テーブルの上は賑やかになりました。11月25日(水)には2回目の中間講評会が行われました。コンセプトに関して厳しい質問が飛び、検討すべき課題についてアドバイスが与えられました。



UR、TX、地元町会長へのヒアリング

12月2日(水)にはURの方に、12月9日(水)にはTXの方に、12月16日(水)には小青田町会の方にUDCKに来ていただき、ヒアリング調査を行いました。柏たなかで行われているまちづくりの現況、現在の柏たなかに至る計画の背景などについてお話を伺いました。課題に取り組んで3ヶ月目に突入しました。グループのアイデア、柏たなかについて考え抜いてきたこともあり、グループにより異なる様々な質問が出ましたが、一つ一つについて丁寧に教えて頂きました。頭の中で考えるだけでなく、人に話を聞いたことが血肉となりアイデアの発展につながればと思います。



第3回中間講評会

第3段階では、新しい田園都市の具体的な空間デザインのプレゼンテーションに向けて、第2段階で提案した社会システムに対応した建築や空間を設計しました。ライフスタイルと社会システムを効果的に表現できる場所を対象地区から選び、デザインの提案を行いました。12月25日(金)の最終講評会では大判のプレゼンパネル、模型が作成され、具体的な空間イメージがプレゼンテーションされました。学生たちのプレゼンテーション、成果物に対して講師陣から様々なコメント、指摘がありました。住民の方へ向けた報告会兼シンポジウムまであと一頑張りです。



最終成果報告へ向けた議論と作業

第4段階では、まちの人へ向けた最終成果報告のために、企画書の作成、提案のブラッシュアップ、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの練習が行われました。提案の概要を知る講師陣や専門家ではなく、提案を始めて聞く近隣住民、民間企業の方々に対して自分たちの提案を伝えることを目標にグループ内で熱い議論が行われました。年をまたぎはしましたが、中間講評会での指摘、コメントを生かして提案の密度が高まっていきます。

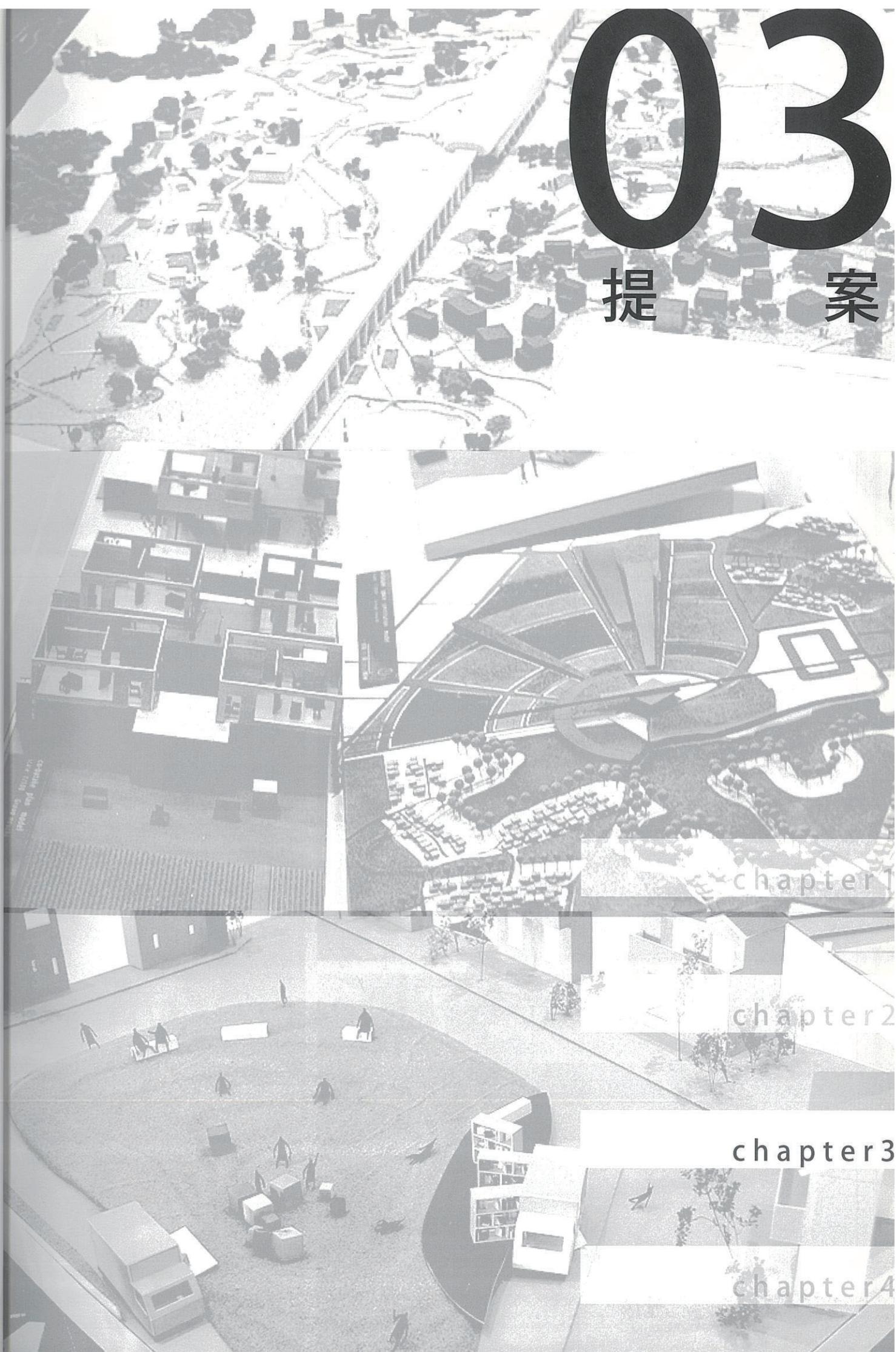
03 提案

意見交換会（最終講評会）

2010年1月30日（土）に都市デザインスタジオ2009の最終講評会がUDCKにて行われました。柏たなか地元住民、柏市、企業の方々など多くの方々に発表を見に来て頂きました。3回の中間講評会、直前のプレゼン練習を経て、受講生のプレゼンには力強さがありました。厳しい指摘、コメントもありましたが、地元の方からは「ぜひ実現しよう」、講師陣からは「1か月で見違えた」、「この1週間のがんばりが素晴らしい」などのコメントもあり充実した最終成果報告になりました。発表後には、受講生、講師陣だけでなく、発表会に参加してくださった柏たなか地元住民、柏市、企業の方々などにも引き続き参加して頂き、意見交換会を行いました。プレゼンでの質疑応答と異なり、提案へのコメント、今後の展開など様々な意見が飛び交いました。一仕事終えた受講生の顔が印象的でした。



市民や企業の方から多くの意見が出ました。



GROUP A



TITLE

ぷらっと

STUDENT



板倉雅也



妹尾悠貴



鈴木亮平



植座有咲



谷口裕子



光安皓

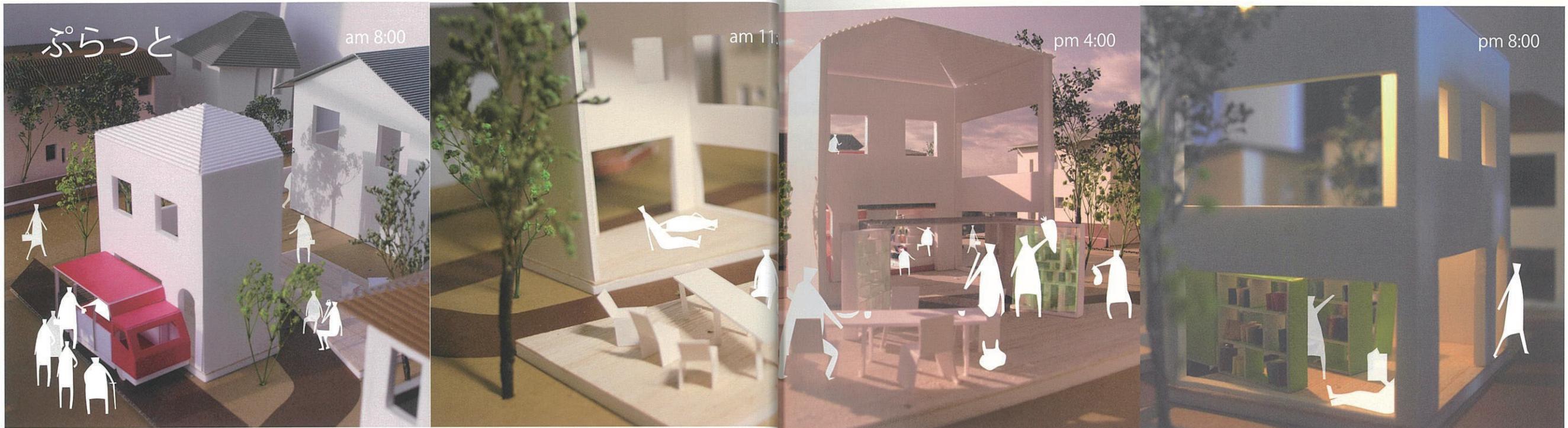
STAFF



清家剛



前田英寿



柏なか地区は、つくばエクスプレス沿線にも関わらず、今なお静かで落ちていた空間を有し、ゆったりした時間の流れを感じることができる。近年の郊外におけるまちづくりは、都市の発達を背景として路線が増え、人々が利便性を追求するあまり駅周辺に機能が集約されてきた。その結果、住民の生活は駅へと誘導される形になった。似たような沿線風景が次々と生じ、今柏なかも遅ればせながら開発の波に呑まれようとしている。確かに駅に機能を集中させることは合理的ではあるが、從来的な開発を行うことで住民は本当に豊かになるだろうか。豊かな農村風景や空間資源を有する柏なかでは、このような操作は必ずしも適切でないと我々は考える。

我々はこのような問題に対処するために、まちに新規のインフラ構築を敷くことで住民を一極に集中させるのではなく、まず共用スペースとなるスポットを分散させ配置する。これらのスポットは日常的に共用スペースとして利用されることを考慮し交差点や広場などに位置する。次に、どの住民にも近い生活サービスを提供することを考え、散したスポットに機能を発着させる。単に機能を挿入するのではなく、自体をテンポラリーに移動させる形態としているため、持続可能な施設になると考えられる。

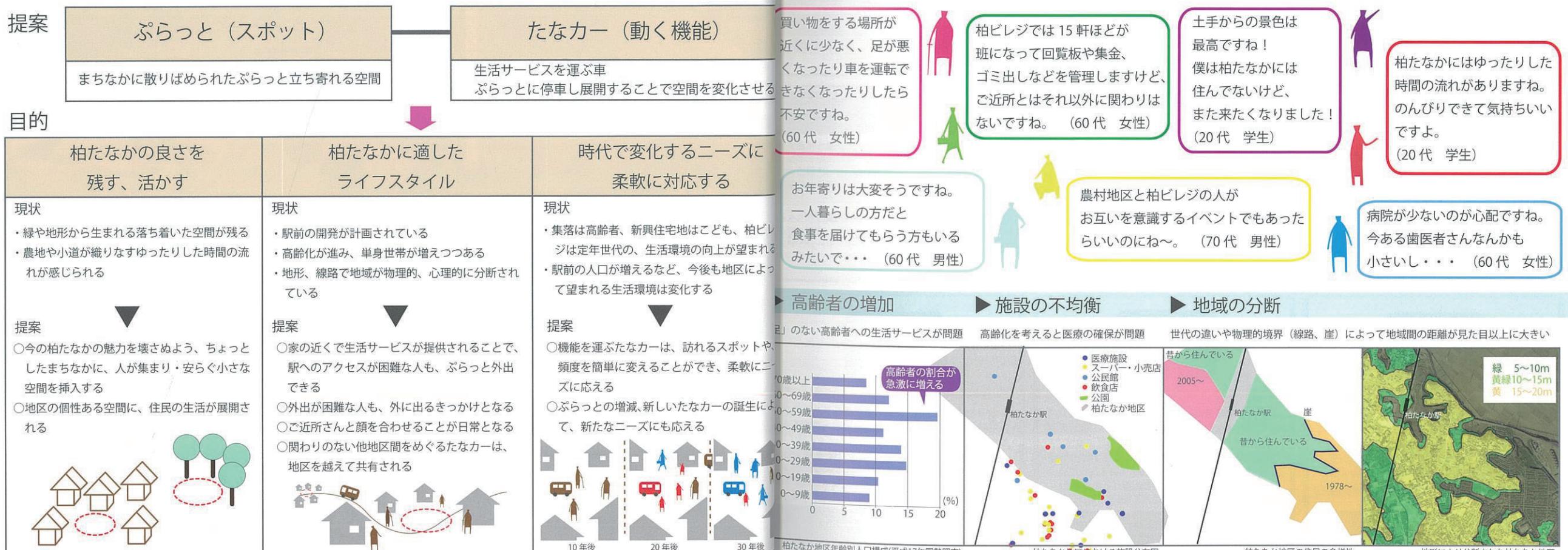
私たちが日常的に使うモビリティとは、一般的に目的地への移動手段ことを指す。高齢化や単身世帯の増加が深刻になる中、モビリティを足に使える環境ない人には生活に大きな格差が生じるであろう。このような観点から機能を動かすことは社会の変化にも柔軟に対応できると考えられる。とりわけ、柏たなかに存在する医療施設は少なく、今後隅々で行き届いた医療サービスを確保する上で我々はまず動く診療所を提えた。

易的なものとする。また複数の動く機能がスポットに連結することで空間間に一層の多様性・可能性を生むことを想定している。

動く機能が近所にやってくるということ・・・ある時は家のすぐ近くがレストランに。またある時は野菜の直売所に。それらが連結することで、大きな施設となりコミュニティにも幅が広がる。様々な機能の組み合わせを与えることで生活スタイルの異なる住民が集う。様々な住民が暮らす柏たなかならではのライフスタイルではないだろうか?

このように動く機能とスポットとの組み合わせ次第で、様々な出会いや集いのある空間を育んでいきたい。今まで気づかなかった柏たなかが見えるはず、という期待を込めて。

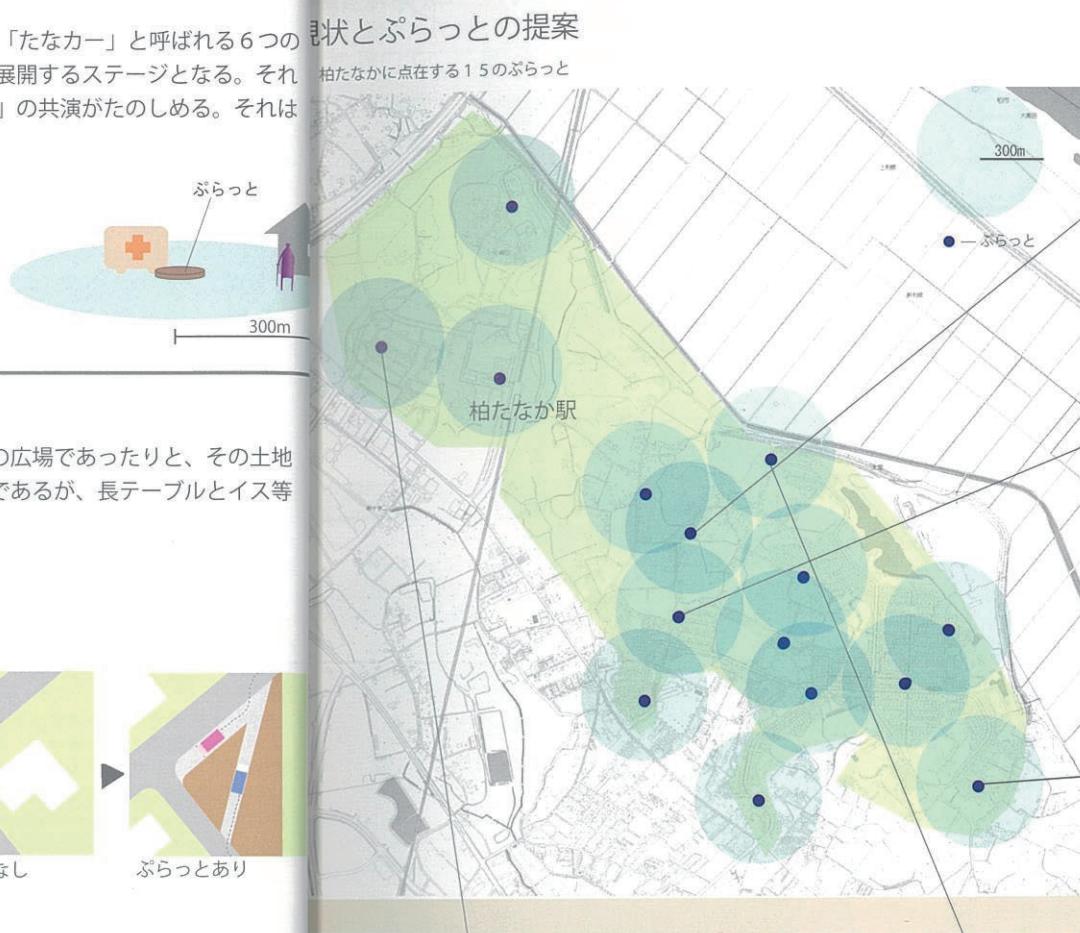
コンセプト



豊かな生活の舞台「ぶらっと」 豊かな時間を育む「たなカー」

まちの声・まちの今を踏まえ、柏たなかに15の「ぶらっと」と、求められる機能を6つくる。「たなカー」と呼ばれる6つの機能は「ぶらっと」を訪れる。「ぶらっと」は住民の共用スペースであり、「たなカー」が展開するステージとなる。それぞれの「たなカー」は目的や利用頻度によって異なる周期で動き、「ぶらっと」では「たなカー」の共演がたのしめる。それはまた地域と人々との共演でもあり、柏たなか地域に新たな交流が生まれる。

現在の柏たなか築には満足のいく医療体制が整っているとは言いがたい。高齢化が進む中、日々の健康に安心感を与えるために医療機能を持ったたなカーを提案する。その際、ぶらっとが住人の生活の身近に存在するよう、徒歩可能圏内である300mを基準にしつつ人口と年齢層のばらつきに応じてぶらっとの場所を決定し、選定した。

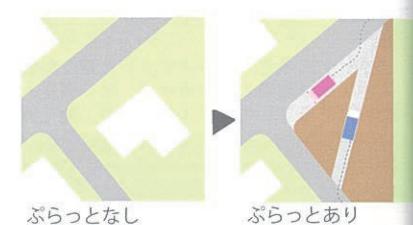
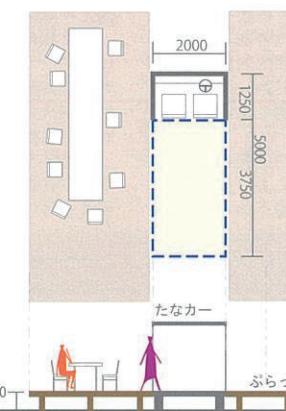
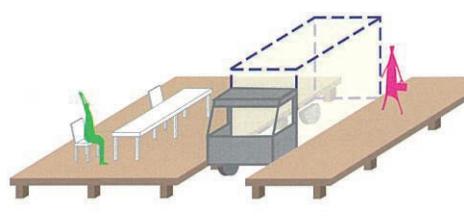


「ぶらっと」

ぶらっとは住宅や蔵のリノベーション、長閑な農地や四季の移ろいを楽しめる場所、身近な芝生の広場であったりと、その土地の資源と特色を取り入れ比較的簡単な操作でつくられる。ぶらっとは屋外・半屋外と形態は様々であるが、長テーブルとイス等を設置し、普段から住民の共用スペースとして使用できる工夫を施している。

ぶらっとのデザイン

- 道路に面し角地である
- 地面から+50cmの高さのデッキをもつ



たなカー紹介

機能

1. 基本キャラクター
2. 主な対象
3. 行動スタイル
4. 運転手からのコメント

期待するシーン

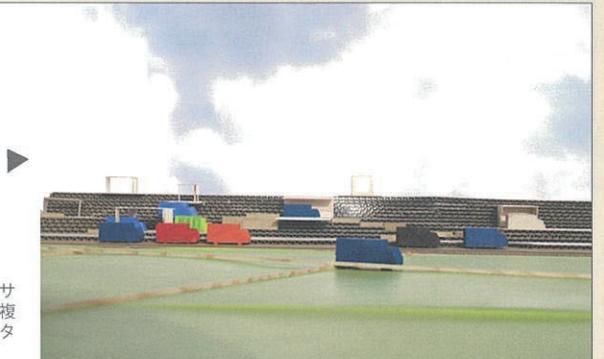
「たなカー」

機能をもつ6種類のたなカーを提案する。たなカーはぶらっとに停車し展開する。

たなカーのデザイン

- 長さ5m、幅2m、床面高さ+50cm

柏たなか地区の道幅を考え、道を選ばない小型トラックサイズ（ごみ収集車サイズ）盛土がされた空地を芝生の広場に改修。こどもが走りぶらっとに接続することや汎用性・将来性を考え、ぶらっとと同じ床高にし、車輪回って遊べるぶらっと。を統一している。



診療所

1. 柏たなか住民の身边に医療を提供する
2. 高齢者の日常的利用
3. 毎日、朝夕で3カ所のぶらっとを回る
4. 診療所の側面にはテレビがあるので、待ち時間にはみんなで団らんを楽しんで下さい。

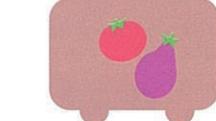
▶ 身近な医療を通して高齢者の外出のきっかけを生む



本棚

1. 柏たなか住民みんなの共用本棚になる
2. 住民の本を介した交流を育む
3. 朝7-9時：駅に停まり出勤者に /-12時：地域を回り本の回収・貸出 / 午後：ぶらっとに停まり図書館をひらく
4. 本棚が家の前まで来て、手に取れるのが魅力！近所の人の趣味が垣間見えて面白い！

▶ 地域の住民を結ぶ



やおや

1. 地元で採れた新鮮な野菜を販売する
2. 主婦
3. 朝摘み野菜を乗せ、1日に3ぶらっとを回る
4. おいしく新鮮、生産者の顔が見える安心やさしいをみなさまに身近なぶらっとで販売してま

▶ 農村部と住宅地とのつながりを生む



キッチン

1. ぶらっとがカフェにレストランにバーになる
2. 高齢者・主婦・仕事帰りの人・週末の家族
3. 1日3ぶらっと モーニング7-11/ランチ11-17(14- カフェ)/ディナー・バー17-23時
4. キッチンの日には奥様方がお茶会を開いてます。なかなか外出する機会の少ない高齢の方にも豊かな食生活を楽しんで頂きたいです。

▶ 世代を超えた交流を生む



だがしや

1. だがしやはこどもたちを誘い集まる場所となる
2. こども
3. 1日1ぶらっと 平日14-18/休日10-18時
4. いつの時代もこどもは駄菓子が好きですよね。自然とこどもたちが集まっています。

▶ こどもを中心として賑やかで安心できる地域を育む



あそびば

1. ビリヤード・ダーツという娯楽を地元で提供する
2. 大人
3. 1日1ぶらっと 平日17-23/休日14-23時
4. 会社帰りに食事やお酒を飲みながら利用されています。素人さんも常連さんに教えてもらったり、高齢者もチャレンジされていますよ。

▶ 普段地域に関わらない人にも交流のきっかけをもたらす

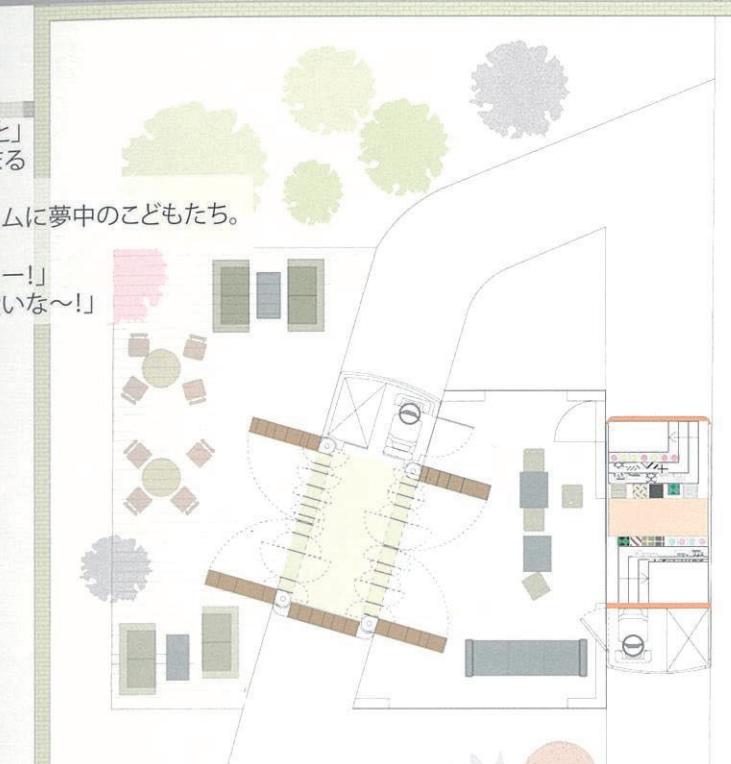
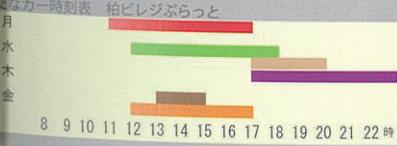
とある平日の光景。
おじいちゃん、おばあちゃんたちが
週一回の診療を受けに来ているよ。
公民館のところに来てくれるから
近くて便利って言ってた。
待ち時間もおしゃべりしたり
本読んだりできて楽しそう。



平面図 scale 1:150



あらやだ、この本読みにかったのよ。
花野井のシズエさんの本だわ。
あとでお話に行きましょ。



こは柏ビレジの
角にある「ぶらっと」
がし屋さんに集まる
子ども達の笑い声。
たりではカードゲームに夢中のこどもたち。

必殺、はっぱカッター!
うわあ、まさやは強いな~!



“そうそう、夕飯用のお大根買ひ忘れていたのよね
ぶらっとに行ってきましょ。
まさやもそろそろ帰る時間だし。”



断面図 scale 1:100

農地

今日はちょっと贅沢にイタリアン。
えっ?都内?違う違う。大室なのよ。
自然を感じながらイタリアンっていいよね。



「食後はビリヤードを楽しみましょ。」
「ビリヤード!?あたし、よくやったわ～。
20年ぶり?30年ぶりかしら。」
「学生時代にタイムスリップした気分ね。」



たなカ一時刻表 農地ぶらっと
火

柏たなかを

柏たなかを飛び出して

ちょっとした空地に、ありきたりな曲がり角に、
そっと「ぶらっと」を作つてみる。
柏たなかから「たなカ一」がやってくる。
日常に新たな光景が生まれる。
柏たなかの外の地域にも「ぶらっと」が増えていき、
「たなカ一」が巡るようになる。
いろいろな地域の生活を豊かにし、
いろいろな地域を結ぶ。
それが、「ぶらっと」と「たなカ一」のもつ、
未来への可能性。

野田市 柏市 守谷市 取手市 利根川

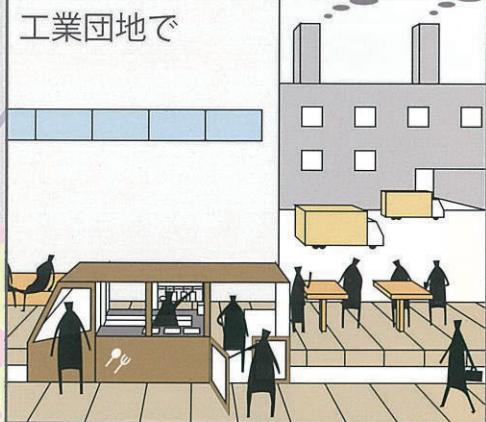
柏たなか駅 柏駅 新松戸駅 流山おおたかの森駅

つくばエクスプレス線 JR 常磐線

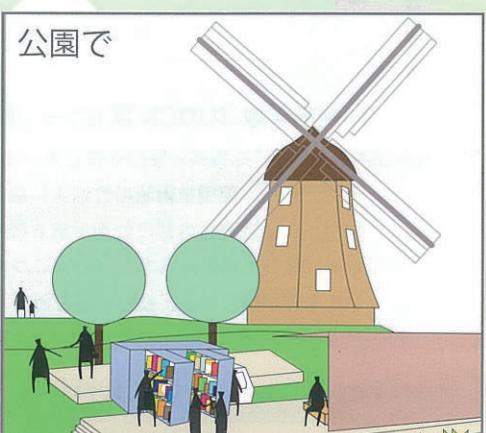
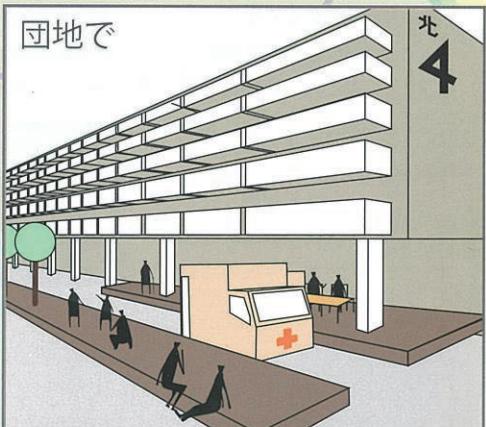
平面図 scale

工業団地に人が休める場所ができたり、大学生と住民と一緒に憩う場所ができたり。そんな新しい光景に「たなカ一」が色付けする。高齢者が多いところには診療所が、子どもが多いところには駄菓子屋が。その地域から新しい「たなカ一」ができるかもしれない。新しくお店や固定した空間を作るのではなく

く、地域を越えて共有する。これらは、地域の生活を豊かにする糸口になる。「たなカ一」を通じて、地域同士が刺激し合い、結びつく。「ぶらっと」が増える。「たなカ一」が機能を運ぶ。この新しいシステムが、住民の生活をしっかりと受け止めて発展し続ける。終わることのない可能性を秘めている。



工業団地で



STUDENT

| 板倉雅也 (東京大学大学院)

時間に制約があったため、グループの話し合いになかなか参加できず、メンバーに多大なる迷惑をかけたけれど、そんな私をいつも暖かく受け入れてくれたメンバーに本当に感謝しています。私たちのグループはとにかくマイベース。しかも、みんなのベクトルもなかなか同じ方向に向かない日々が続いた。けれど、それ以上にみんな優しさに溢れていて、そんなメンバーが奇跡的に集まつたからこそ、最後の最後にやっとみんなの気持ちが一つに向かって、柏たなかの住民の方の心に訴えることができる案に仕上がったと思います。このような貴重な経験をさせてくれたメンバーとの出逢いに感謝！これからも Ball σ o n は続くよ。

| 谷口裕子 (東京大学大学院)

今回のこの都市スタジオ、本当に楽しかった。6人のメンバーで濃密な4ヶ月間を過ごし、たくさんのこと学んだ。メンバーは建築、都市、機械、国際協力…異なるバックグラウンドを持っていた。特に人が物を考えて進めるプロセスが個人ではっきりと異なる、ということを間近で実感し、逆に自分を知ることができた。課題として柏たなかのことを考えるほどに私たちも互いの理解が増したと思う。そして私たちは柏たなかのことも大すきになった。スタジオが終わったとき、ハッピーエンドの映画のラストをみてる気分だった。これからまたそれぞれの日常が始まるんだなって。すがすがしい気持ち。そして将来、柏たなかにたなが走る日がとても待ち遠しい。みんな、これからもよろしくね。

| 妹尾悠貴 (東京大学大学院)

ほんの数ヶ月の課題でしたが、都市を考えるという事がどれだけ難しいか、身をもって痛感しました。ある提案について、それを誰が運営するのか、それは誰が得をするのか、誰が資金を提供するのか、誰が管理するのか…。社会に関わっている以上必要最低限となるこれらの前提が、スタジオというある意味理想的な環境において学生にどれだけ蔑ろにされているのか。それをきちんと受け止めた上で、新しい事にチャレンジする事がどれだけの困難を伴うか、その一端を理解できた事が今回のスタジオを履修したことによる最大の収穫でした。今回のがむしゃらなチャレンジの経験を大事にとつておき、今後の活動の糧にしていきたいと思っています。

STAFF

| 前田英寿 (UDCK 副センター長、東京大学非常勤講師)

“したたか”な提案に魅力を感じた。モビリティ班はバスと肝心な地点にしぶって成功した。ポッド班は実感から発想した分、具体的な形まで行けた。環境技術班の竹はよい着眼だが、活用方法に独自の視点がほしかった。農地公園の2案は、周囲の宅地との関係に工夫がほしかった。近現代の都市計画手法も参考になる。課題書に掲げられたテーマの内、ツーリズムと教育を正面から取り上げた提案がなかったのは意外であり、残念だ。この二つは全国共通の話題。TX 新設の柏の葉地域はなおさら、新しい人に訪れてもらいたいし、定着や交流には学びが鍵になる。社会状況をヒントにプロジェクトを組立てる思考方法も求められています。

| 鈴木亮平 (東京大学大学院)

北沢先生のお葬式でいただいたカードの裏に、僕はこう書きました。「どうぞ、地元の人たちに感動や驚きを与えるような提案を作成して、大いに議論を盛り上げてください。」北沢先生がスタジオ受講者宛に送ったメールです。僕たちがやろうとしたことは、すごく単純で、たった一文で表現できることです。でも、それが難しい。都市に対する情熱と、信頼する仲間が必要不可欠だと感じました。幸運なことに、情熱を持った仲間、情熱を持ちすぎている先生方、そして自分の中にある情熱の卵に出会えました。みなさん、ありがとうございました。大事に育てたいと思います。

| 一門座有咲 (東京大学大学院)

まず初めにこの仲間に出会えたことに感謝！！優し過ぎ、話が直ぐ脱線、甘え、意見もバラバラなうちだったけど、最後の詰めで、みんなのイメージが一致していった過程は感動的だった。この課題では、みんな「どうしたいか」というイメージは同じなのに、その答えの切り口を探すのが非常に難しかった。結局は、現状をちゃんと見ると自然と出てくるものなんだね。そして、プレゼン！！自分が何を主張したいのか、伝え方一つで、相手の納得度が全然違う。それは、今回の課題で一番勉強になった事。先生方の熱い指導の賜物でした。ありがとうございました。これからもぶらっととたなカーの活躍と繁栄を願って・・・フレー！フレー！

| 光安皓 (東京大学大学院)

柏たなかという名前で括られる地域は驚くほど変化に富む。そんな地域に施策を講じる。何とも難しい課題だと思う。このような課題でまず大切なのは地域を知ることだと感じた。実際に地域へ行く。駅から家々まで己の足で歩く。住民の毎日を訊く。公園で遊んでみる。出来る限り地域のことを理解しようとした。そのほんの一部分でも伝わったのが最終講評だったのかと思う。努力した甲斐があった。一方で柏たなか以上に変化に富むのは我々のグループにきらりと光る6つの個性であった。バラバラのベクトルをもつ6人。考えがまとまるわけがない。とにかく話し合おう。己の意見を述べることで他者を知る。他者の意見を聞くことで己を知る。我々は議論の時間を大切にした。そして最終講評。いつの間にかベクトルが揃っていた。

TITLE**畠 scape****STUDENT**

黒川佑人



鈴木志帆



関口由佳



竹田恵理加



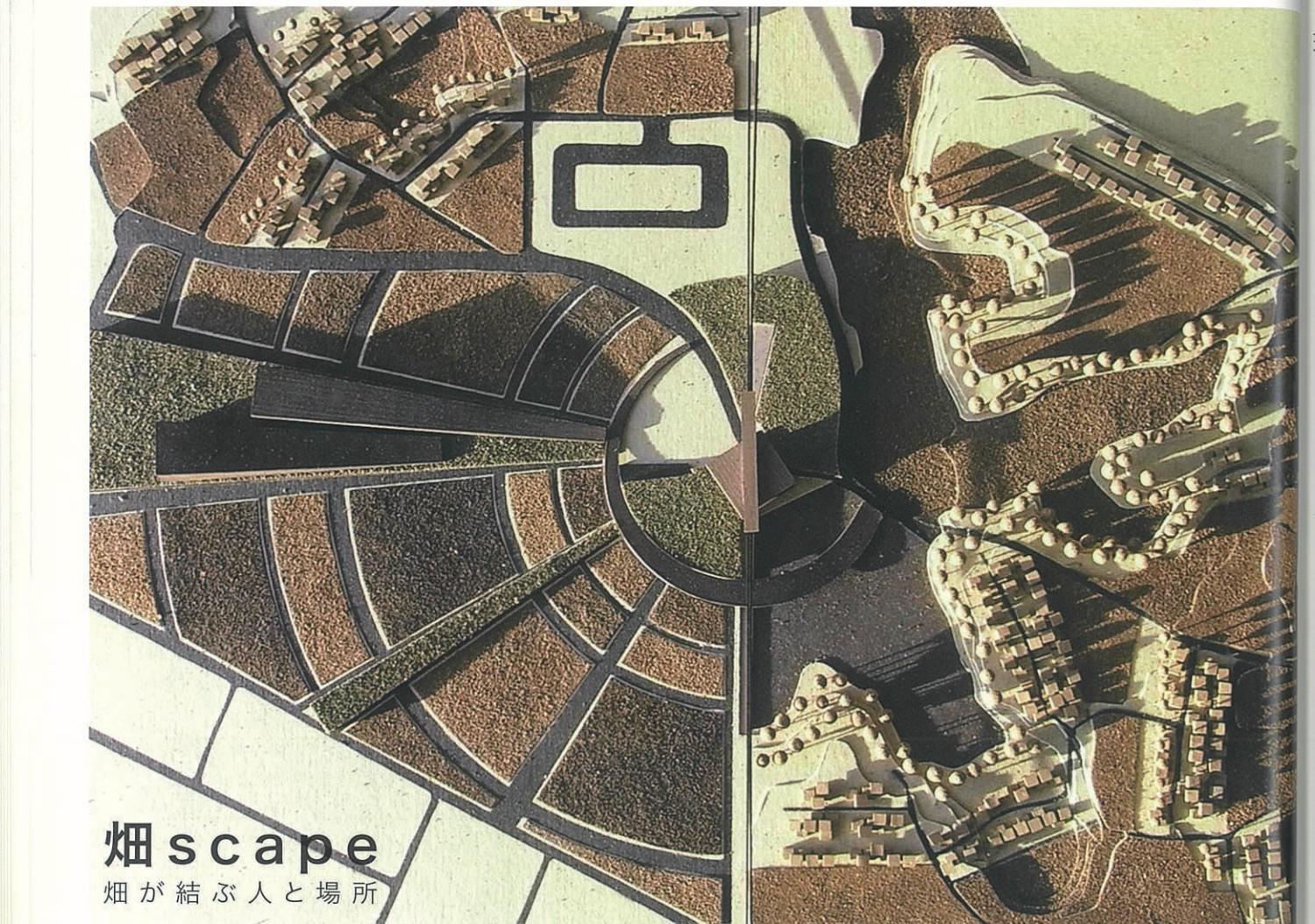
福角朋香

STAFF

清水亮



三牧浩也



問題意識

対象敷地のたなかは、魅力的な風景を成す畑が多く残る地域である。このような地域で、宅地開発が進み、畑が減少してしまうという現状に悲しさを感じた。今までのようなありふれた郊外都市開発では、畑の魅力的を活かすことはできないだろう、そして縮小の社会では限界を迎えるのではないか。

分析から目標の設定

たなかには、先人（昔から住んでいる住民）、第1次住民（柏ビレジ開発の時期から暮らしている住民）、第2次住民（TX開通後に移住してきた住民）の3つの層が居住している。しかし同じまちに住んでいるにも関わらず、まちへの意識が違う方向へ向いていることが調査やヒアリングを通じて分かった。

また、今後農地が減少する可能性のあるこの場所で、住民は畑に意識を向けることが難しいまま、暮らすことになるだろう。

もう一度畑の魅力を見つめ直し、それを軸に3つの層が「同じまちに住んでいる」という意識を持つことができるまちの計画を目指とする。

コンセプト

コンセプトを「農がつなぐ人と場所」とし、たなかの人々がいろいろなまちたちで畑に関わることができ、外部の人々がたなかを畑のまちとして認識できる計画を行う。これは、残っている畑をただ残すだけではなく、新たに畑を計画することでたなかの魅力を引き出す「都市と畑の再々開発事業」である。「見る」「食べる」「作る」という様々な行為を通じて、ひとりひとりが「私と畑」という関係を持つことを期待する。

提案

一つ目に、まちのシンボルとなるように、駅周辺に大きな畑「大畠」をつくる。再々開発事業の核として、初期段階から計画する。駅周辺に、畑の風景が広がり、畑で採れた食材をすぐに食べることができる場所を計画する。また体験農園などができる畑を設ける二つ目に、たなかのまち全体を対象として、地域に広がる住宅畑の集合である「小畠」をつくる。小畠は必ずしも計画の初期段階からあるものではなく、時代によって増減する。住戸や道路沿いの風景を眺め、獲れたての野菜を食べることができ、農作によるコミュニティを持つことができる住宅地を計画する。

この2つの畑がきっかけとなり、たなかに住む人々がそれぞれ合った方法で畑と関わり、人と場所が結ばれるまちとなる。

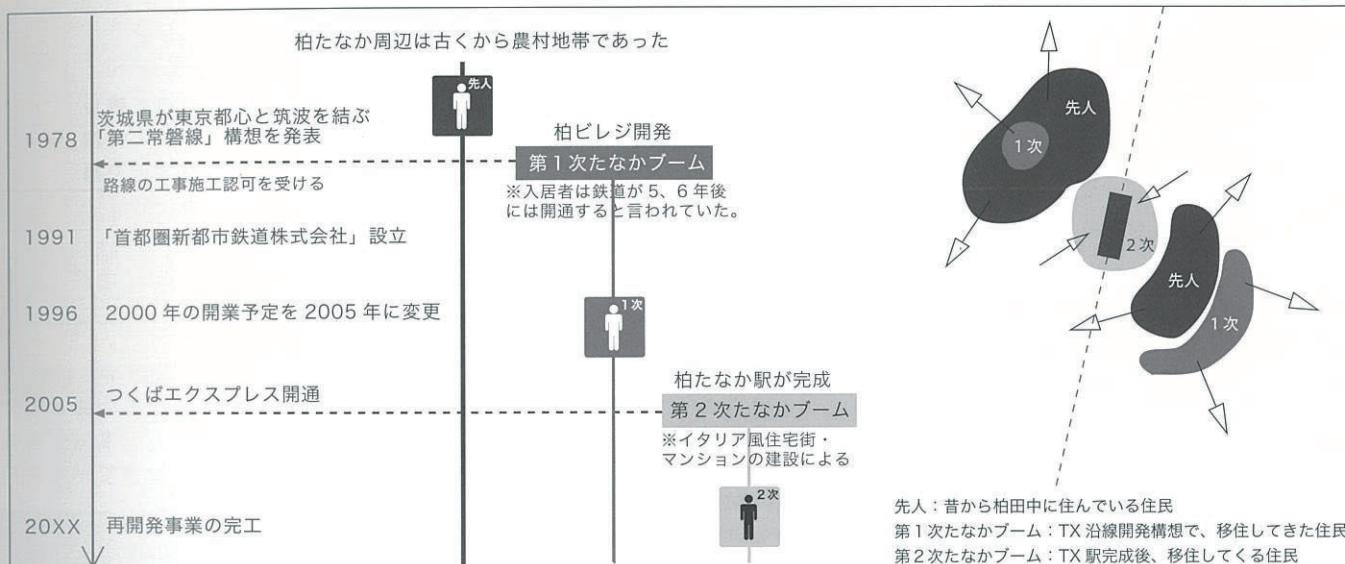
将来像

たなかが「畑のまち」になることで、たなかに住む人々、また東京に住む人々も、それぞれ新たなライフスタイルを獲得する。しかし、やがて東京の人口も減少し、たなかへの人口流入がなくなり、その時たなかは、畑が身近にある地域として成熟する段階にあるはずである。私たちの計画では、小畠は時代に応じて柔軟に変化するが、大畠がずっと存在することで「たなか=畑のまち」というイメージを持ち続けることができる。そして、都市が縮小しつつも、「畑と共生するまち」であり続けるという将来像を描いている。

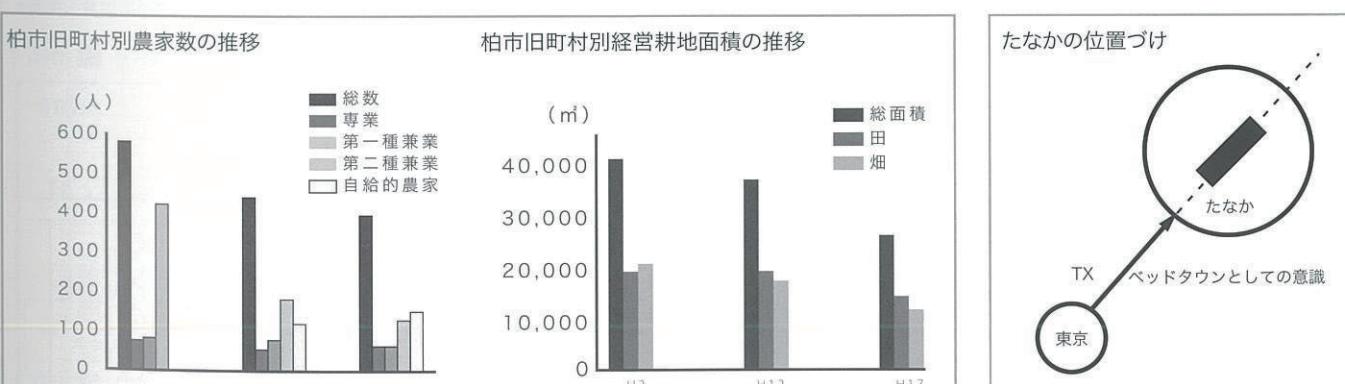


分析結果

柏たなかの歴史



たなかには、農村地帯であった頃から住んでいる「先人」、柏ビレジ開発と同時に移住してきた第1次住民、つくばエクスプレス完成後に移住し、今後も増え続けられるであろう第2次住民の3つの層の人々がいる。3つの層は同じまちに住んでいるのにも関わらず、まちへの意識が違う方向を向いている。



平成2年の段階では第二種兼業農家数が最も多く、平成17年になると第二種兼業農家数が激減し、自給的農家が急に増えた。経営耕地面積の推移をみても、畑が減っていることがわかる。TX開発に伴う用地買収により農地は減少し、残っている農地も細分化される。自給的農家が今後も増加していくと、経営力がないために、最終的には生産緑地のみとなってしまう可能性がある。

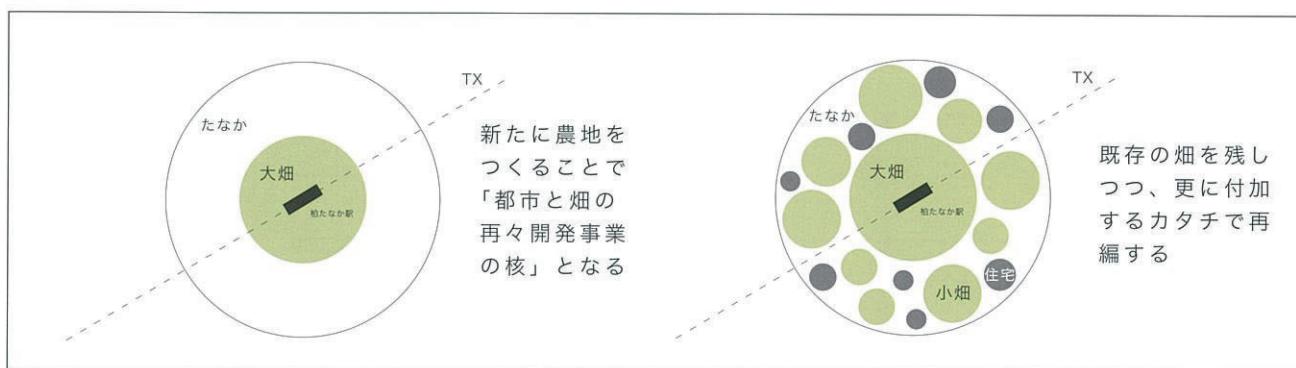
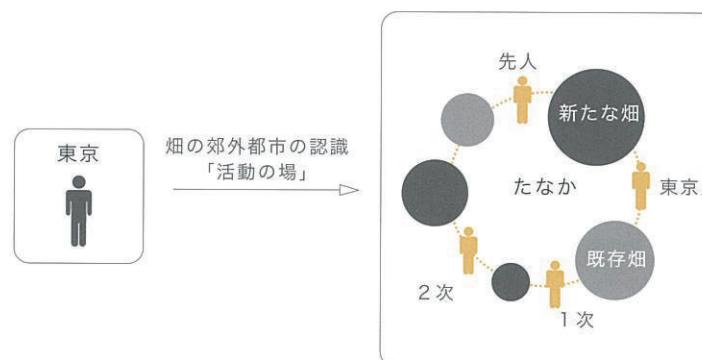
たなかは古くから東京近郊に位置する農村地帯であった。TX開発によって、東京近郊の農村地帯から、東京のベッドタウンという位置づけに変化しつつある。

concept

烟が結ぶ人と場所

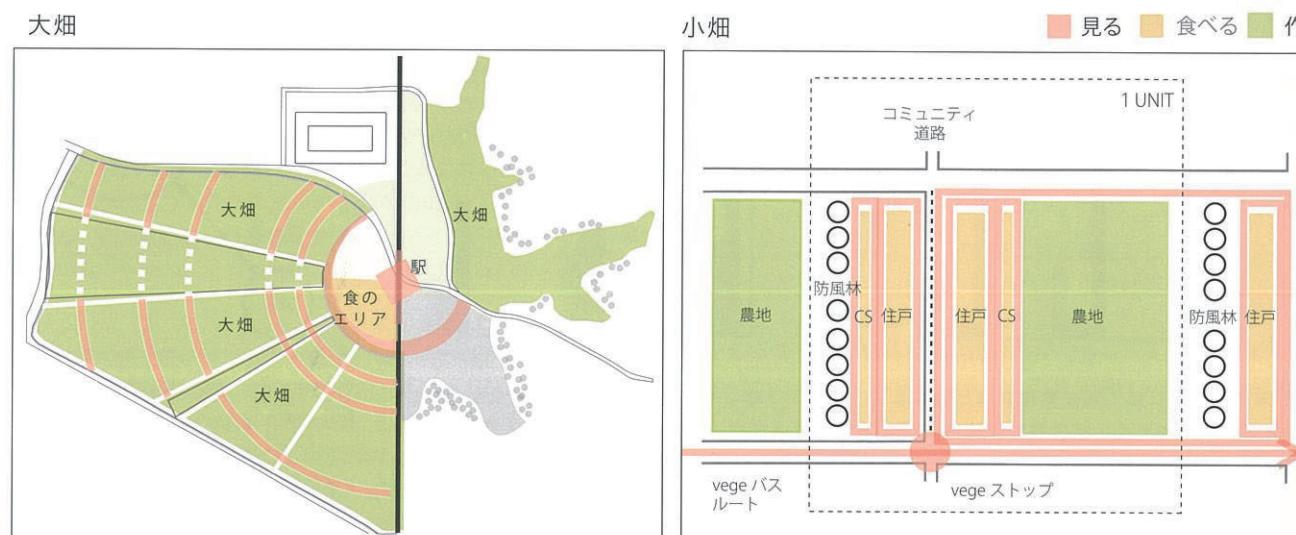
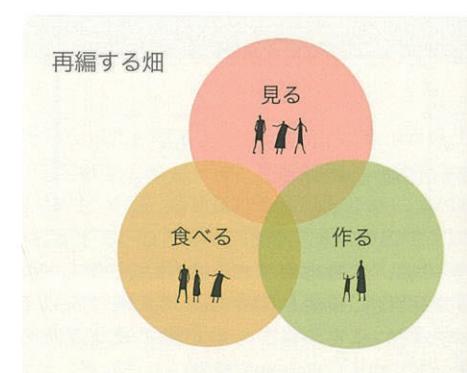
たなかは東京近郊で農業ができる畠のまちとしての特徴があったにも関わらず、沿線開発と共にその様子が変わってきたことが調査・分析からわかった。そこで、私たちは開発によって畠がまちからなくなるということに対し、何かできないか、もう一度畠の魅力を見つめ直し、改めてたなかに「魅力的な畠のまち」となってほしい、と考えた。

たなかにとっての畠は日常的なものであり、まちの象徴でもある。そして、何より誇れるものであるべきだ。そのためには、現時点まで行われてきた再開発事業ではなく、畠の再編による再々開発事業を行う必要がある。



3つの層で「見る」「食べる」「作る

畑になる作物が生む風景の美しさ、自然に対する人間の営み、それらをたくさん的人がこの場所で感じることができるようにしたいと考えた。その感じ方は必ずしも農家でなければ感じることができないというものではない。通勤する道で、散歩する公園で、様々な場所で畑を見る。レストランで、家で野菜を食べる。体験農園で、兼業で野菜を作る。それぞれの人のそれぞれの関わり方があるはずだ。できるだけ多くの人が関わることのできる畑。そんな畑が私たちの目指す畑である。



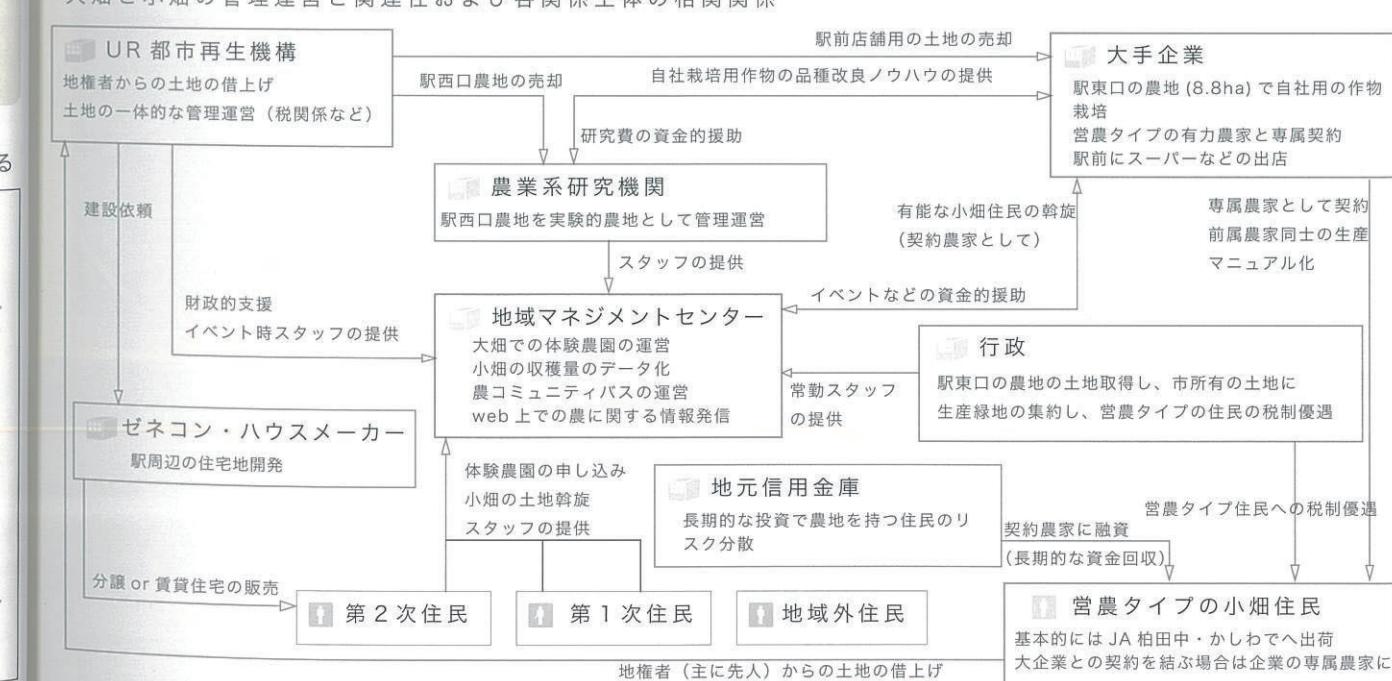
master plan

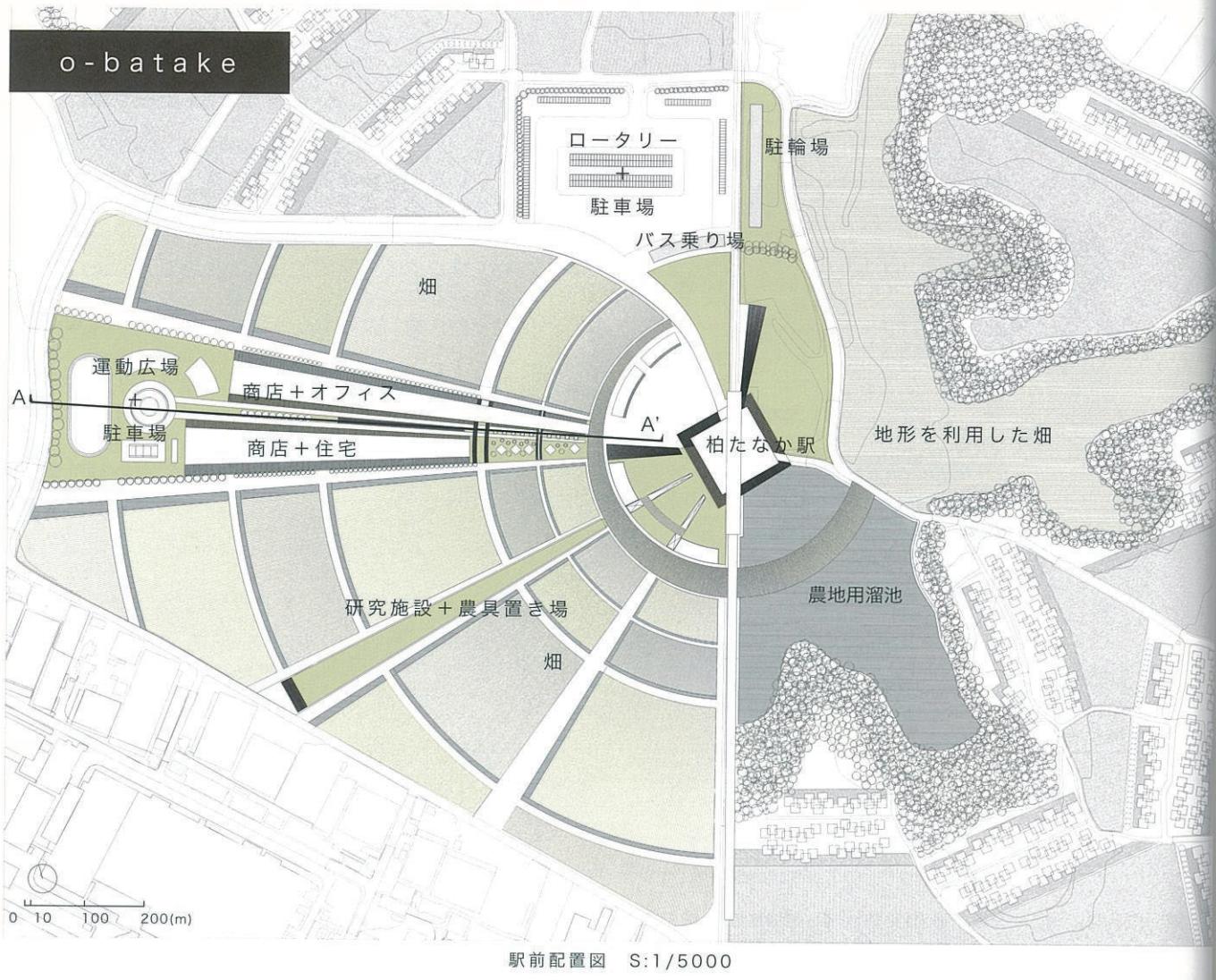


「大畠」「小畠」という2つの畠をつくる。駅周辺の既に区画整理の行われている場所に「大畠」をつくる。これは、再々開発事業の核となり、まちのシンボルであり続ける。そして、その周囲に広がる畠「小畠」は住宅との関係を考えた畠の集合である。これは、既存のまちの構造を残しつつデザインする。この大畠と小畠の機能は異なるものの、相互が美しい畠スケープをつくりだし、たなかを農のまちへと変貌させる。

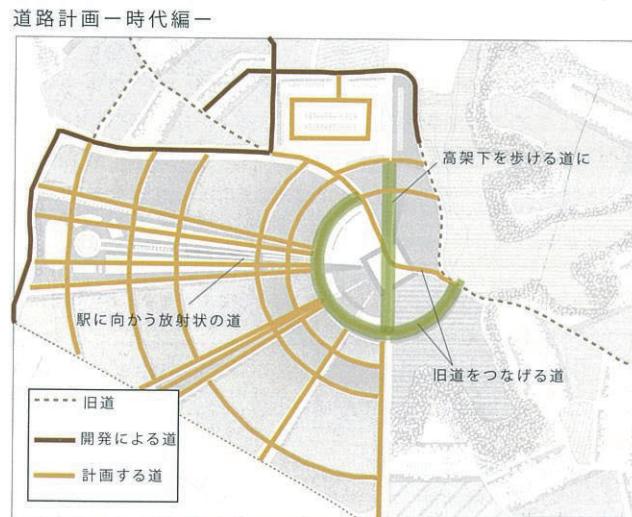
System

大畠と小畠の管理運営と関連性および各関係主体の相関関係





駅前配置図 S:1/5000

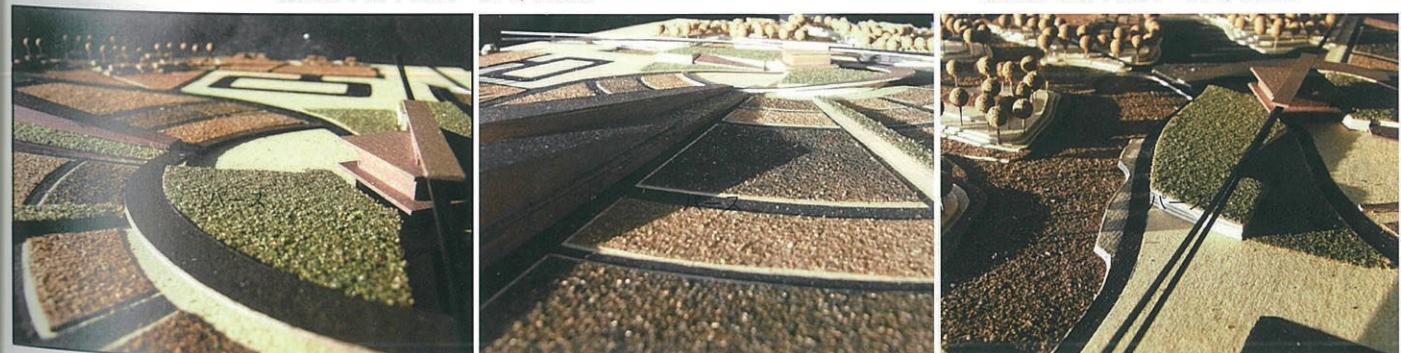
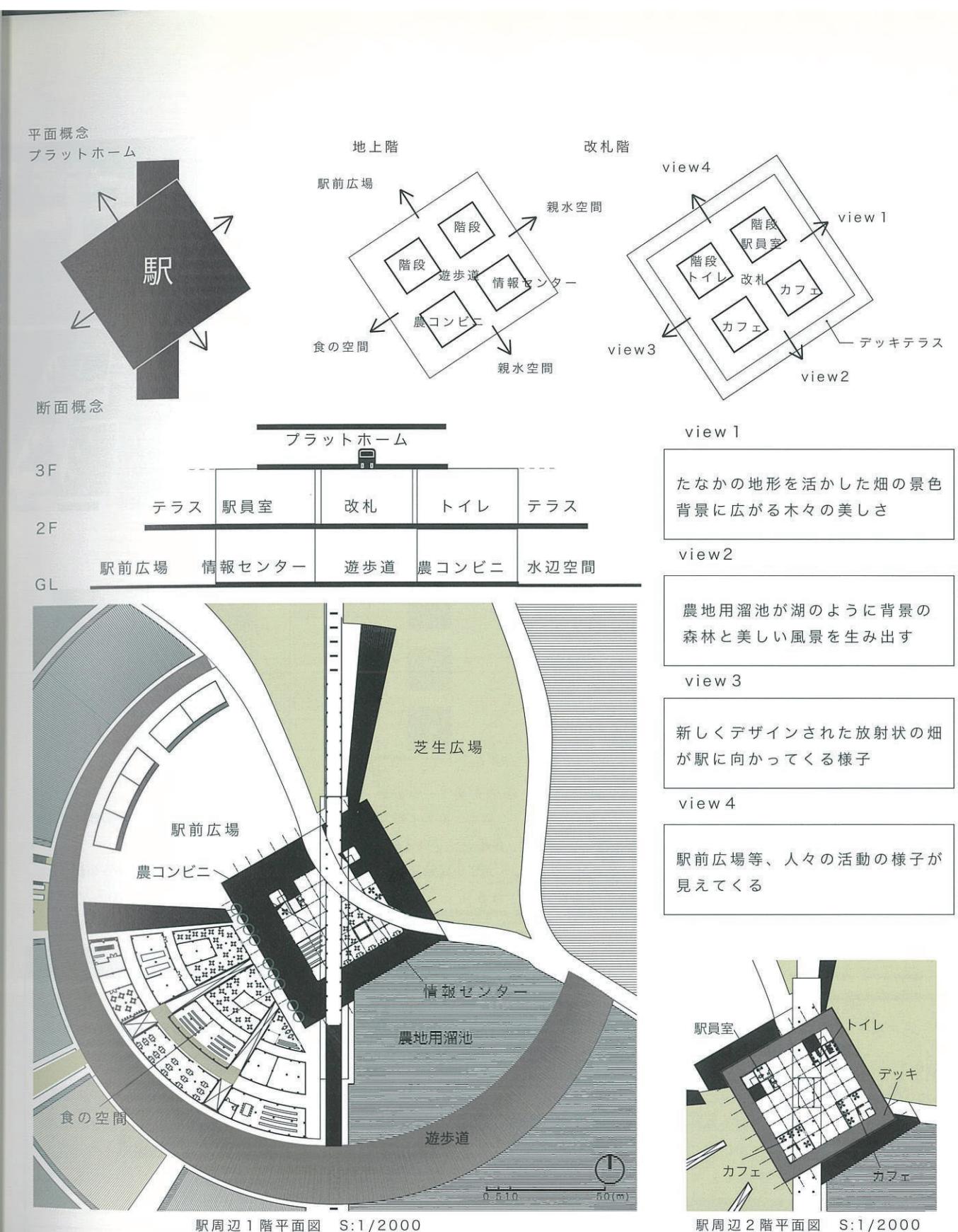


開発によって区画整理された場所に、駅に向かう放射状の歩道を計画した。また、旧道路と開発によってできた道路を繋げる道を、駅を通過する形で計画した。駅の高架下も歩いて楽しい空間となるように他の計画道路と交差させ、商店等を隣接させた。

商店 + オフィスエリア

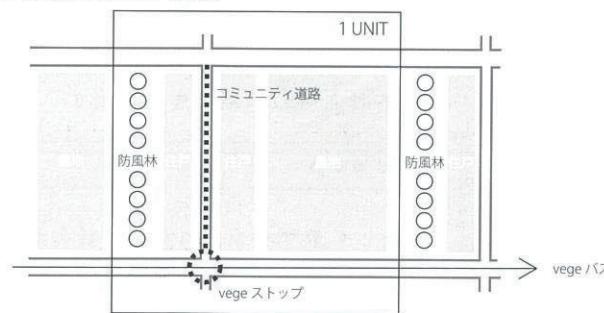


A-A' 断面図 S:1/3000



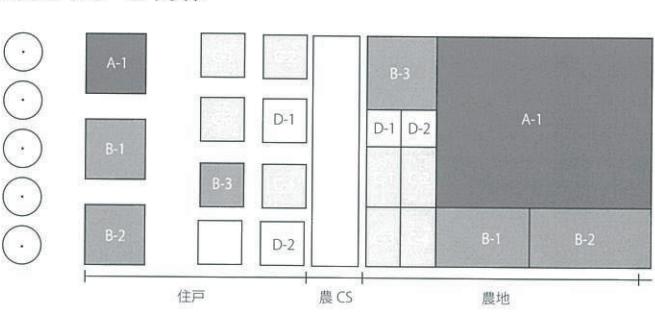


小畠配置空間概念



- 防風林・住戸・コミュニティ道路・住戸・農地を1UNIT
- 既存の街区を残し、バスルートとコミュニティ道路の2つの機能を持たせる
- コミュニティ道路とすることで、道沿いに防風林がこないため、沿道景観に農が広がる
- 1 UNITごとに vege ストップを設けることで、地域内のモビリティが向上

小畠と住戸の関係



- コミュニティ内で管理している農地は営農タイプ・小規模営農タイプ・自給タイプの3種類の大きさに分割
- 大きい農地はバスルート沿いに配置し、農が広がる車窓からの風景となる
- 小さい農地は住戸近くに配置することで、農コモンスペースがにぎわいをもつ
- 管理体制は先人が営農タイプ or 小規模営農タイプとなり、2次住民が自給タイプとなる
- 将来的には農地の大きさが変化しうるよう、畝とあぜ道を造成する

vege バス（コミュニティバス）の計画

1つのUNITで構成されるコミュニティにvegeバスが停まるvegeストップを設ける。このvegeストップは直売所とポストの機能をもち、コミュニティ同士をつなぎ、コミュニティの農の象徴となる。例えばAコミュニティからFコミュニティに収穫したキャベツを届けたいときには、vegeストップの野菜ポストに投函すると、vegeバスが届けてくれる仕組みとなっている。



A- コミュニティ

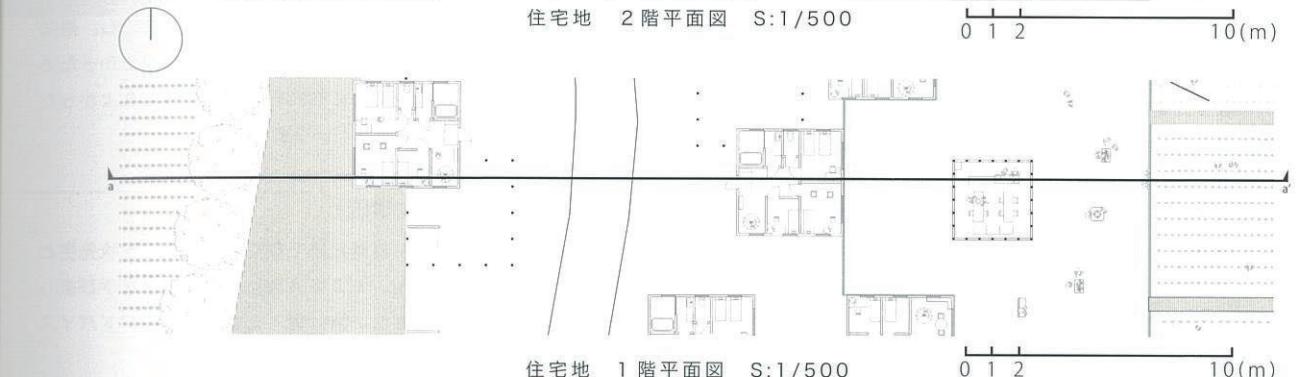
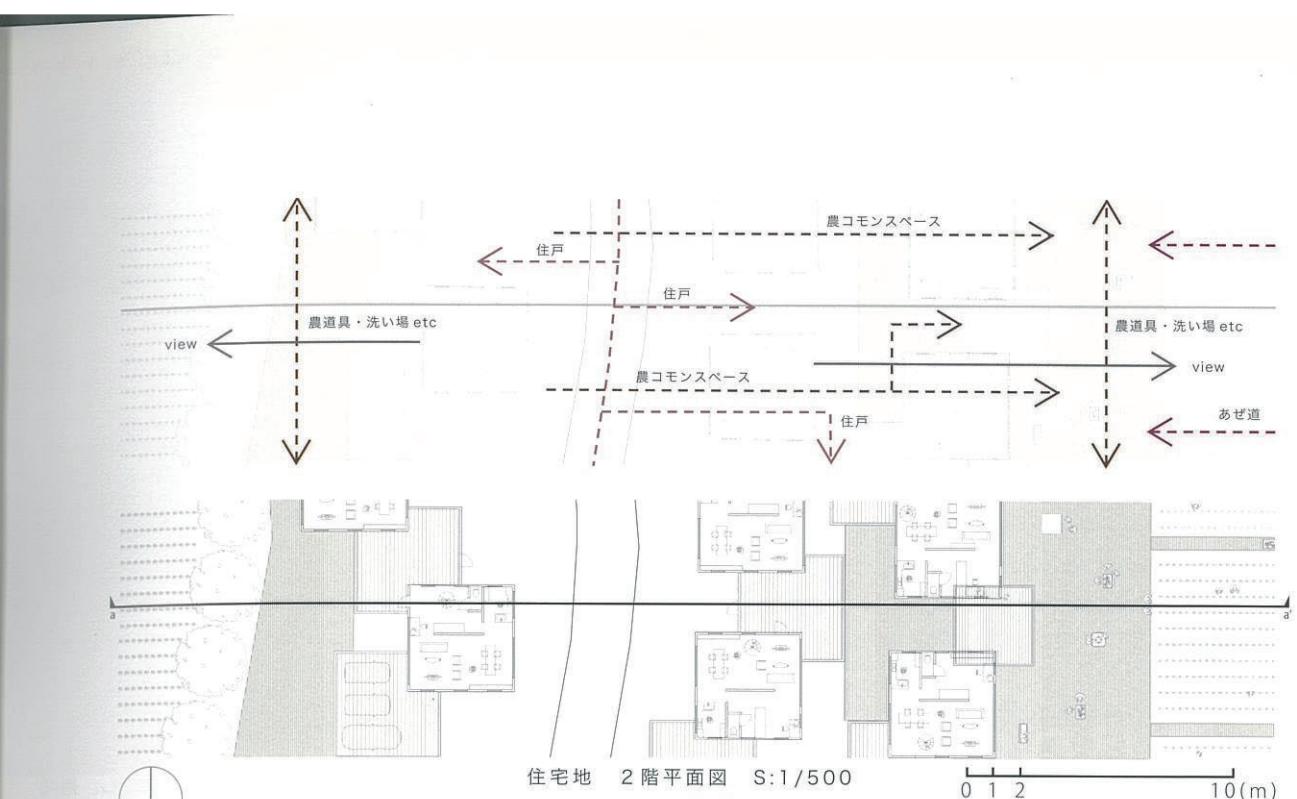
- ・野菜ポストに
獲れた野菜を投
函
- ・野菜のレイア
ウト

F- コミュニティ

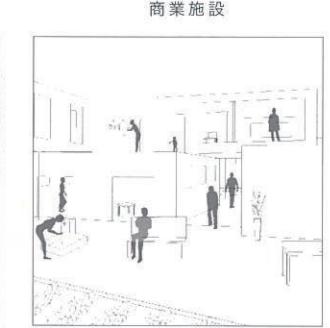
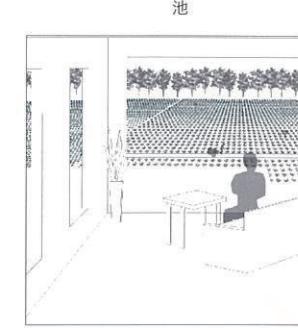
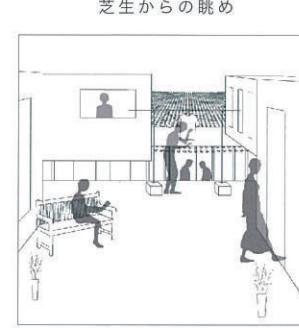
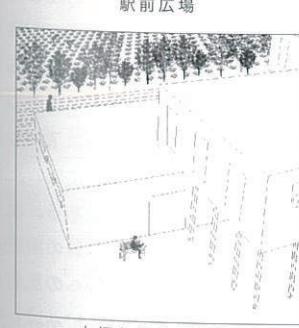
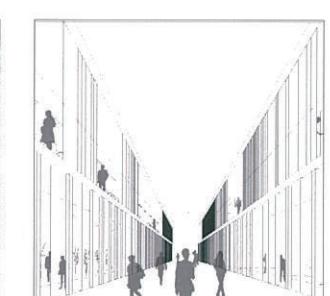
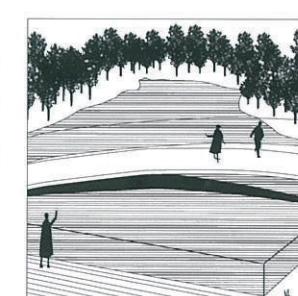
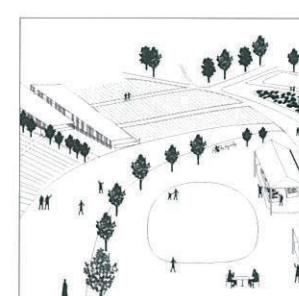
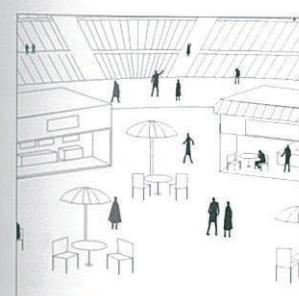
- ・野菜ポストに届
けられた野菜を受
け取る
- ・野菜のレイアウ
トに変化

vege バス

農バスによる野
菜の宅配



イメージパース



STUDENT**| 黒川佑人 (東京大学大学院)**

本当に刺激的で充実した4ヶ月でした。ライフスタイルも含めて考える新たな郊外都市のあり方という課題に対し、多様なバックグラウンドをもつメンバーと講師の方々との議論を重ねて自分たちの納得のいく提案ができたと思います。振り返ると何十時間も議論や作業したことはとても貴重な経験であり、初期段階からぶれない軸を班で共有できたことが提案に向けて突き進めた原動力となりました。また、北沢先生に提案を見て頂くことができなくて非常に残念でしたが、先生の想いは他の講師の方々から伝えて頂いたので、これからもその想いに恥じないように都市と向き合っていきたいです。最後に、このスタジオを通して本当に多くのことを学ぶことができました。みなさん本当にありがとうございました。

| 鈴木志帆 (東京理科大学大学院)

このスタジオで受けた刺激は大きく、自分とは異なる視点でのものの見方や考え方を学ぶ、とても貴重な経験となりました。何度も議論を重ね、方向性の確認、意見の擦り合わせをしてきたからこそ、自分たちなりに納得のいく提案ができたと思います。農業についての理解はまだ浅い部分があるかもしれません、柏たなかというまちを見つめ、たなかの畑について、私たちなりに真剣に考えたことに意義があったと思います。また都市をデザインするということの難しさと醍醐味の一端を味わえたのではないかと思っています。班のみんなのお陰で、濃く、楽しく、めまぐるしくも充実した日々を過ごせたことに感謝しています。班のみんなと熱心にご指導して下さった先生方、本当にありがとうございました。

| 関口由佳 (東京理科大学大学院)

スタジオが始まってから終了するまでの4ヶ月間、気がつけばあっという間でした。よく集まって夜遅くまで作業していたのが今となっては懐かしいです。特に最終発表に向けた怒濤の1ヶ月間が(笑)体があと10個くらいあればなあ、と思うくらいスタミナが必要でした。スタジオをとるまで、設計は元よりグループで課題を

進めていくことに久しく接していくなく、チャレンジのつもりで臨みました。農地班メンバーとの違った角度の考え方や先生方の意見を聞く中で、色々取り入れて最終的にこの案に辿りついたと思うと感慨深いです。私自身、もっと積極的に意見を言うべきだったとか反省点は多々ありますが、その辺りも含めて見つめ直すことが出来ました。知識はまだまだ浅いながらも、農についてもスタジオで学ぶことが出来ました。有意義な4ヶ月間でした。みなさん、本当にありがとうございました。

| 竹田恵利加 (東京大学大学院)

このスタジオを通じて学んだことは、何を提案するにも、「こうしたい!」という強い想いをもつことが大事だということです。そして自分が何をしたいのかを、いかにグループ内の人人にプレゼンし、伝えるかというところが、難しくもあり、面白かったです。それを先生方、最後は住民の方達にプレゼンすることで、段々とステップアップできました。また、長い時間を5人で過ごし、最初はわからなかったメンバーの素顔がみえてきたことが嬉しかったです。あと、もうちょっと地域の人に触れる機会があったらよかったかなと思います。長いようであつというまででした。

| 福角朋香 (東京大学大学院)

4ヶ月間、楽しかったです。班員だけでなく清水先生・三牧先生との議論も楽しみの一つでした。エスキス毎に多くのことを学びました。学生同士での議論が進まない時は違った視点からのアドバイスで、見事な舵取りをしていただきました。内容としては「3つの層」、「畑」という2つのキーワードは最初から最後までチームの軸として残りました。そしてその軸を最後まで5人全員が共有できたからこそ、たなかのまちと向き合い、ストーリーを描き、提案することができたのではないかと考えています。細かい計画やプレゼン能力等まだまだ課題が残りますが、こうしてまた新しい課題が発見できたことを嬉しく思い、次に繋げていきたいと思います。班員のみなさま、先生方、ありがとうございました。

STAFF**| 清水亮 (東京大学准教授)**

農地班の提案は、進行する土地区画整理事業と真逆の内容で、現実から目を背けているようにとらえられるかもしれません。けれども、よく読むとそれは現在の開発のその後のストーリーであり、時代の先取りであることがわかります。柏北部はTX開通に伴う開発の中ですが、柏市全体で見ると既存市街地に空き家や空き地が目立つようになってきています。この問題との整合性を時間軸の中で考えたとき出てきたのが農地班の提案です。単に課題とされた空間と時間とだけに目を向けるのではなく、視野を広げてより大きな文脈の中で空間と時間の意味を問い合わせ直すデザインを考えようとしたこの発想と経験を、社会に出てからも是非忘れずに活かして欲しいと思いました。

| 三牧浩也 (東京大学共同研究員)

まず、実感に裏打ちされたエッジの効いたテーマを見付けること、そこから幅を広げながら説得力を持った形でまとめるここと、この両方が伴うことで面白い提案が完成する。「農」を課題に出発したこの班が定めたテーマは「見る農」である(食べる、作るはさておき)。産業や生業としての農を考える観点からは不真面目に見えるかもしれないが、都市における農を考えるとき、環境空間や視対象としての農は決して無視できるものではないし、これを徹底的に活かした空間像があってもいい。確かにこの提案のアウトプットには、王様的というコメントもいただいたように、少々乱暴な面はある。より細やかで地域性を踏まえた「畑スケープ」の提案、より農の実感を感じられるまとめ方もあったかもしれない。そこは今後の反省としつつも、試行錯誤して提案を組み立て、自分たちなりに地域レベルの空間像を描ききった作業そのものは素直に評価したい。

TITLE**竹がつむぐまち****STUDENT**

宋俊煥



多田裕樹



三井健吾



林志勲

STAFF

日高仁

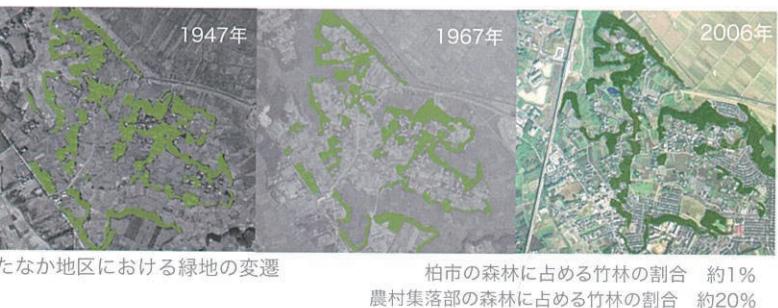


栗原謙樹



竹がつむぐまち

問題意識



失われる緑地 変化する緑地

古くから谷戸の地形に沿うように残されてきた緑地は、柏ビレジの開発時に南側斜面林を喪失した。今後、既存の緑地を活かす方向で区画整理が行われるにしても、その構造が変化してしまうことは免れない。また、たなか地区には管理されずに拡大した放置竹林が存在する。

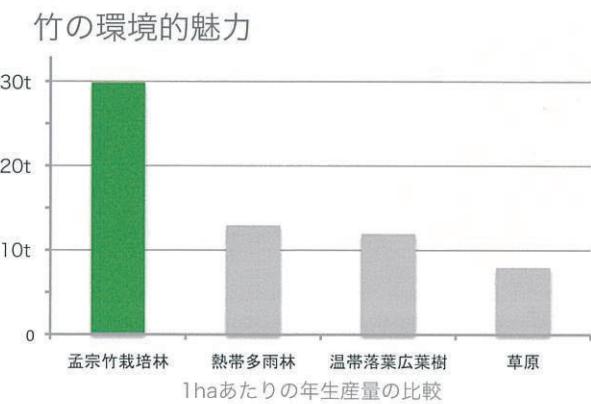
住民間コミュニティの希薄化

昔から農業、あるいは吉祥院・鹿島神社を中心とした人と人の結びつきが存在した。300年前より伝わる盆綱引きという行事も地域の結びつきのもとで継承してきた。しかし農村集落の旧住民と移住してきた新住民の交流は限定的である。盆綱引きも若年層の減少を受け、数年前より行われなくなってしまった。今は過去を知る年配の方々が盆綱をつくり飾るという形で残ってはいるものの次世代への継承が課題となっている。

道路の拡幅・敷設による都市構造の変化

農村集落地区には集落独特の雰囲気のある三叉路や、地域の集住拠点をつなぐ主要な道が存在する。一方で区画整理の土地利用計画では、そのような集落の中心となっている道を積極的に活用する意向だが、道路の拡幅や新たな道路を敷設することで、これまでたなか地区における三叉路の魅力が失われてしまう恐れがある。

竹を活かしたまちづくり



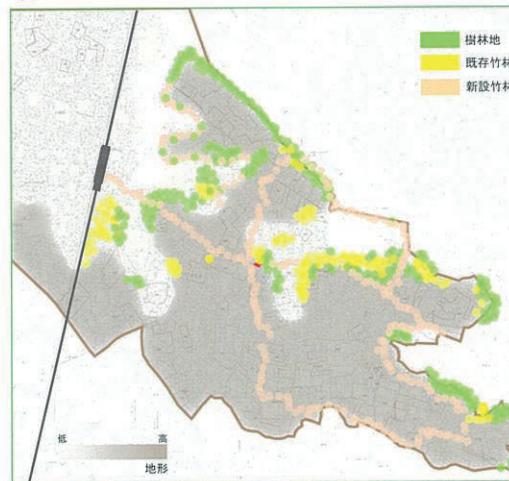
つながりを生む竹

現在においては森林に侵入し一斉に拡大する厄介者として認識されている竹林に現代的な価値を見出し、竹の強さ・美しさ・しなやかさを活かしたまちの形成を提案する。竹林の充実は緑地の充実に結びつき、竹を生かした環境技術は循環型の生活に結びつく。そのような竹林をよい状態で維持していくためには、人の手による適切な管理が必須である。竹林が柏たなかの地域資源として捉えられ、住民自身の手で管理が行われることで、新旧住民も含めて住民どうしにつながりが生まれる。竹のまちというアイデンティティは地域外住民を惹きつけると同時に、地域外からの評価が柏たなかの住民に「まちに対する誇りと愛着」を育む。



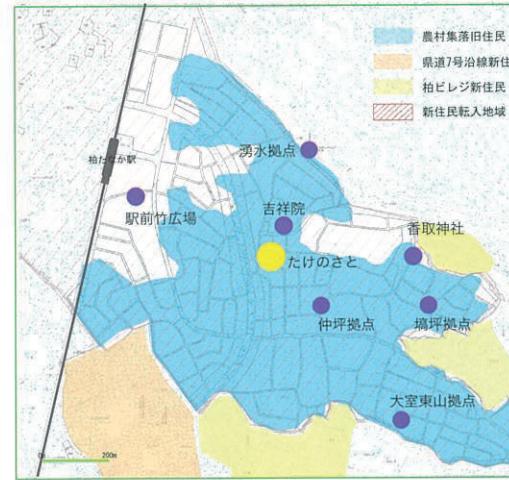
計画の仕組み

緑地の分布



現在は斜面地に緑地が多く分布
既存の竹林に加えて、計画的に竹林を地区内に拡大する

既存の施設を活用した住民交流拠点整備



古くからある集落の寺社を中心としたつながりに加えて、現在ある公民館を中心とした施設を竹でつながる住民交流拠点とし整備することで、多様な住民層の交流を促す

主要交通結節点となる「たけのさと」



地区の中心を東西にはしる竹の遊歩道と、計画されている幹線道路の交差する地区、つまりふるさとセンター周辺地区は、多くの人が行き交うポテンシャルの高い地区である

全体図



たけのさと

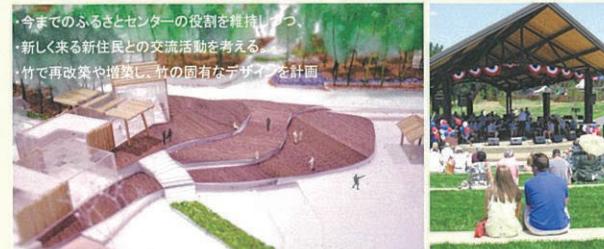
1.保存されたクラで遊ぼう！



2.まちなかで竹林の美しさを見つけよう！



3.ふるさとセンターを竹でリノベーション



4.イベントで住民が出会って親しくなろう！



断面図 scale: 1/600

A



竹林と既存の樹木の調和
ふるさとセンター

交流館と竹林の調和

通ひ空間

ケヤキ



交流館と竹林の調和

通ひ空間

ケヤキ

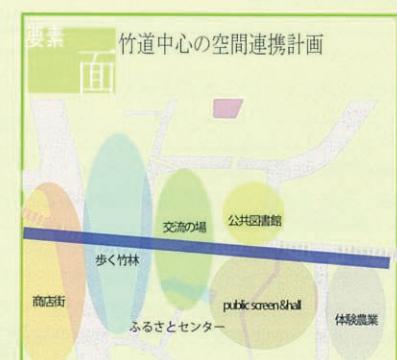
吉祥院

A'

配置図 scale: 1/1000



ふるさとセンター立面図





竹を用いて環境共生型のまちづくりを進める。よく管理された竹林の拡大は、二酸化炭素の吸収やクールスポット、地耐力の強化など多面的な機能を生み出す。さらに竹は、形を変えることで、多様な利用が可能となる。竹の間伐材は、建材や竹垣に利用できる。竹炭は農地の土壤改良や水質浄化、食用に。竹チップは遊歩道に利用することで、透水性にし湧水保全につなげ、またペレット化することで暖房器具などの燃料に利用する。さらに竹粉からはバイオエタノールの生成が可能である。

竹林の持続的な管理は、竹の様々な利用を生み出し、地域内の建築・農業・エネルギー分野での循環型社会システムの構築に寄与する。

竹林の持続的な管理は、竹の様々な利用を生み出し、地域内の建築・農業・エネルギー分野での循環型社会システムの構築に寄与する。

竹林間伐実体験＆ヒアリング調査概要

日時：11/9(Tue) 10:00～16:00

対象：日本の竹ファンクラ

場所：神奈川県横浜市青葉区 こどもの国

調査項目：竹の管理方法・運営組織に関するこ

調査から明らかになったこ

調査が分明になったこと
1人・3時間弱で25本の竹の間伐が可能
ボランティアによる自然体験・環境教育の場づくり
市民団体と地域の中間組織としての自治体の役割



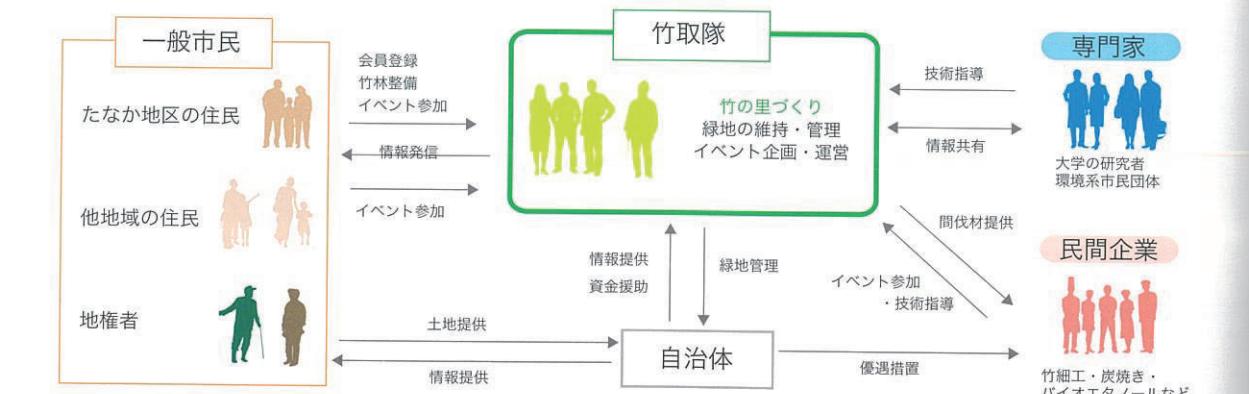
ボランティアによる竹林整備



初心者への竹林開伐の指導

竹取隊とは

柏たなかの住民による竹林整備ボランティア団体。地域の竹林を定期的に整備するほか、竹林による魅力的な空間を活かしたイベントを企画する。地域住民を対象とした竹林整備体験を通じた環境教育や、地域の環境系市民団体との交流会、専門家を交えた協議会など多様な人々の交流を生み出す場をつくる。



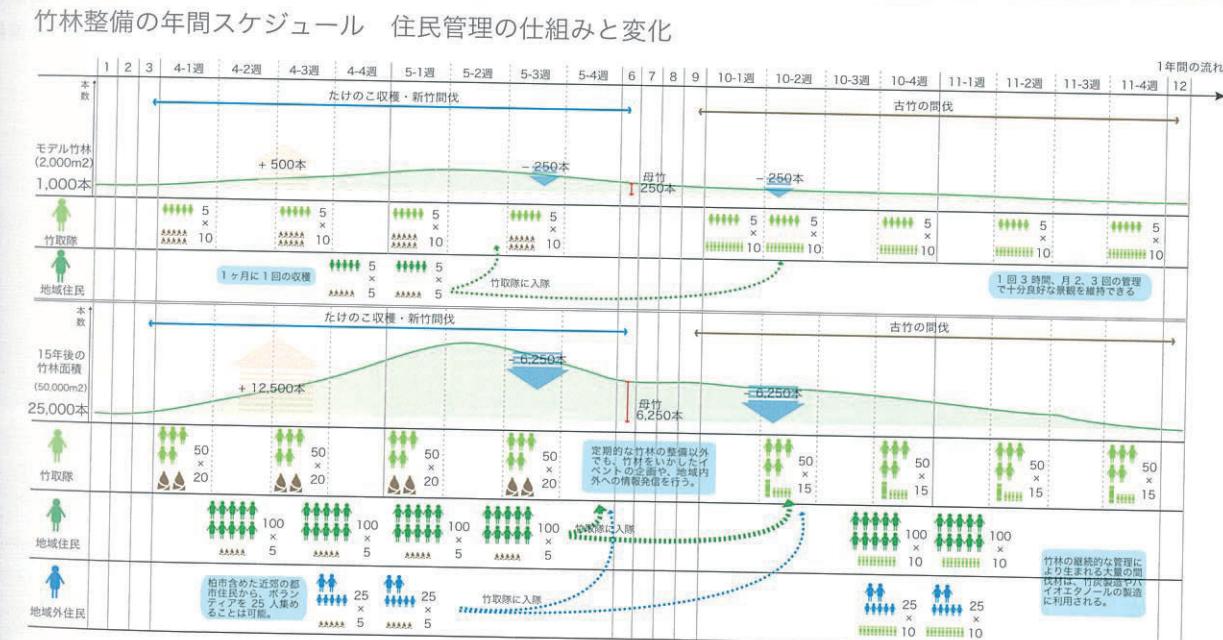
「たけのさと」竹林の整備

まちの中心的なコミュニティ施設として機能する「たけのさと」付近の竹林約2000m²をモデル竹林とし、竹取隊が整備を進める。一般市民も交えた、春に行われるたけのさと掘りは竹林の密度を調整する役割もある。竹の生長が遅くなる秋には古い竹の間伐をすすめ、間伐材は竹垣作りや炭焼き等、地域住民が楽しめる場を生み出す。

たけのさとの竹林は、5人ほどの人数で管理が十分可能であり、徐々に住民を巻き込んでいく。

15年後 竹がつむぐ地域のコミュニティ

たなかの住民だけでなく地域外の住民も巻き込んで、竹林の管理や竹を利用したイベントが行われる。管理やイベントを通して新旧住民間、さらには地域内外でも交流が生まれる。竹取隊が竹林整備の中心に位置するものの、たなか地区で、住民・地権者・行政・専門家など、多様な主体同士の信頼関係が構築され、様々な活動が展開するようになる。



管理の基本指針

2000m²あたり1000本の密度で管理すると、毎春約500本の新竹が生える。たけのこの収穫をしつつ、次年度以降の母竹となる250本を残る。秋には、伐採適期となつた4年生の竹を250本伐採する。新しい竹の育成と伐採する竹野バランスをとることで、安定的に竹を資源として利用していく。

15年間かけてつむぐ

```

graph LR
    A[2,000m2] -- 管理面積 --> B[50,000m2]
    C[6,000人] -- 人口 --> D[10,000人]
    E[500本] -- 成竹利用量 --> F[12,500本]
  
```

The diagram consists of six boxes arranged in two rows of three. The top row contains '2,000m²' and '50,000m²', with an arrow pointing from the first to the second labeled '管理面積'. The bottom row contains '6,000人' and '10,000人', with an arrow pointing from the first to the second labeled '人口'. The bottom row also contains '500本' and '12,500本', with an arrow pointing from the first to the second labeled '成竹利用量'.

利用方法の変化

はじめはまちの成長にあわせて、建材など地域の施設整備に利用する。竹林の拡大により、竹炭製造やタケノコの本格的な収穫が行われる。さらに、将来的には地域の循環型エネルギーとして利用し、持続可能な環境まちづくりを進めよう。



STUDENT

—宋俊煥(東京大学大学院)

はじめに未熟な私たちを最後までご指導いただき誠にありがとうございました。栗原先生、日高先生に心より感謝を申し上げます。韓国で学んだ都市に対する自分の考えは完全ではないことを感じ、新たに都市に対する接近方向を学ぶことができましたこの4ヶ月は私にとって非常に大事でした。特に、緑地・都市計画・土木・建築と、専攻の異なる4人が集まり「竹中心のまちづくり」についての考え方は、かなり多様でやはり都市というのは色々な視野から見るべきとのことを新たに感じることができました。三井さん、多田さん、ジフンさん、本当にお世話になり誠にありがとうございました。

—多田裕樹(筑波大学大学院)

「手を動かせ」先生方から何度もこの言葉をかけられたでしょうか。昨年まで草むらでマメの研究をしていた僕にとって、計画やデザインはほぼ初めての経験でした。手の動かし方すらわからず、最初の講評で「環境技術班は苦しいんどうだね」とコメントされたことが印象に残っています。その後、「竹」一本で最後まで押し切りましたが、初め考えていたよりもかなり広がりのある素材でした。歩いていても竹が目に付く仕方ないという後遺症は、これから竹を見る度に、なんとか手を動かそうともがいたこの4ヶ月間を思い出させてくれるのでしょう。最後に、厚く指導してくださった先生方、環境技術班改め竹班の皆様、本当にありがとうございました。

—三井健吾(筑波大学大学院)

“メルヘンなくして情熱は生き立たれない”。竹の魅力にメルヘンを感じ、3ヶ月間、スタジオに情熱をかけ続けました。思い起こせば、序盤の解散危機から最後の意見交換会までこれたのも、栗原先生や日高先生をはじめとした先生方の熱いご指導のおかげでした。動物園のような竹班への指導は、相当難しかったと思います。本当にありがとうございました。そして最後の打ち上げでは、お酒が至上のコミュニケーション・ツールであることを再認識しました。他班のみんなにも感謝の気持ちでいっぱいです。スタジオが終わり、大学院生活に穴が空いた気分ですが、また次なるメルヘンを求めて日々精進していきたいと思います。ありがとうございました。

—林志勲(東京大学大学院)

この度はこの授業に参加できたことが僕の修士課程において大きな力になりました。竹を題材したまちづくりを通して竹の環境に及ぼす影響やすばらしさを学ぶことができました。今、竹に対するイメージがネガティブではありますが、私たちの研究によってこれから先、少しでも多くの人々が竹に対してポジティブな印象を抱いて頂いてまちづくりの題材として活用できたら嬉しく思います。今回このチームで一緒に研究をした三井君、多田君にはとてもお世話になりました。最後に陰に陽に色々と手助けをして頂いたソウ先輩にはとても感謝しております。ありがとうございました。

STAFF

—日高仁(東京大学特任助教)

「環境技術」について考えるというテーマは「こんなこといいなできたらしいな」と考えるだけでも比較的困難だ。ある程度の実現性をもった新しい技術について考えるのは殆ど「発明せよ」という課題に等しく、はじめに柏なか地区をリサーチし沢山のアイディアを壁に張り出して一覧した際にその難しさを改認識した。月並みでどこででもできそうなものか、全く実現性を欠く抽象的なレベルにとどまるもの。そのなかで、「竹を生かす」というアイディアは、極端かもしれないが具体的で取り組んでみたくなるものであったため、早期にこの課題に絞り、深く掘り下げる所とした。大学院らしい探求の端緒を体験することができたのではないかと思う。

D
GROUP

TITLE

Park&Rice

STUDENT



阿南隆史



金令牙



小島良輝



白川佑希



丸上雄哉

STAFF



伊藤香織



野原卓



丹羽由佳理



1. 問題意識

現在の開発計画が駅前の商業施設とマンション、少し離れた所から戸建住宅が広がるということに疑問を持ちました。既につくばエクスプレス沿線では同様の計画が先行しています。同様の駅前が続くよりも、多様な駅前が連なる路線の方が、つくばエクスプレスの魅力を高めるのではないかと考えました。同時に、柏たなかならではの場所を追求することは、他の郊外とも異なり、柏たなかの魅力も高めると考えます。

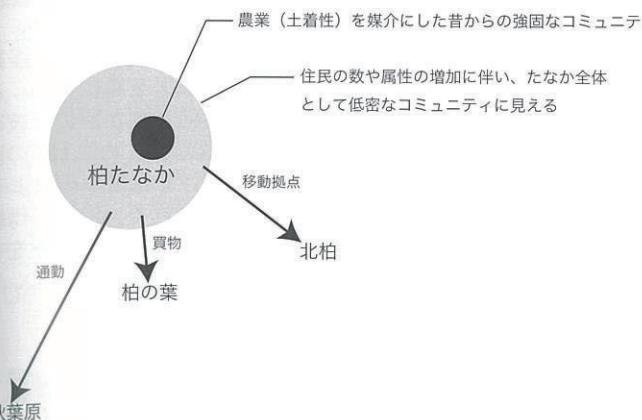
2. ライフスタイルの提案

柏たなかと農業の象徴として、体験農園である水田を提案します。この水田を通じて、農家や住民、利用者など、様々な人たちの交流が生まれます。首都圏から30分という好アクセスの場所で、農作業をし、収穫物を自分で食べるという楽しみのある新たなライフスタイルを提案します。柏たなかに新たに住む人や以前から住んでいる人だけでなく、つくばエクスプレス沿線の他駅に住む人たちの週末の楽しみへの提案もあります。

3. 社会システム

体験農園には柏たなか住民、つくばエクスプレス沿線住民、東京都内からと様々な場所に住む人が訪れ、交流が生まれます。農業指導を通じて都市住民と農業者の交流が図られ、相互理解が進み、農業への関心も高まることを目指します。

現状分析



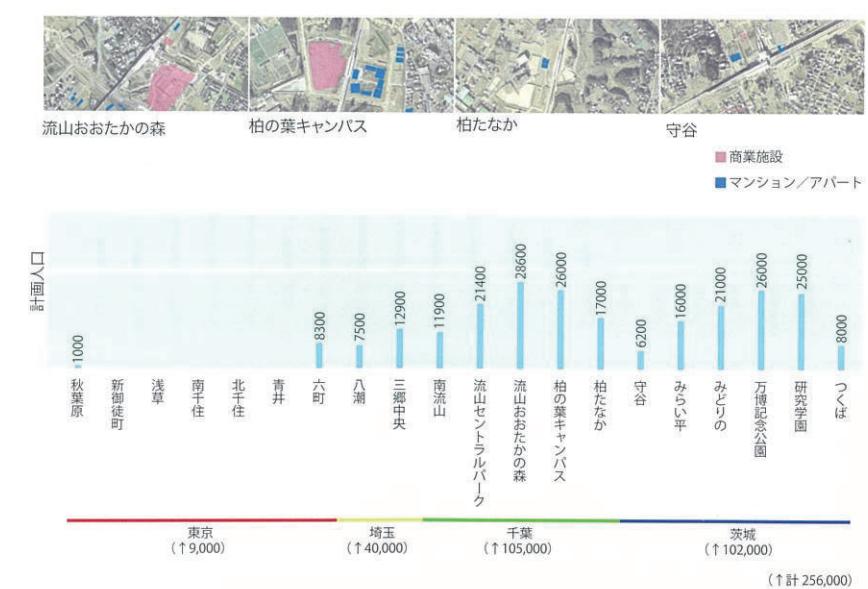
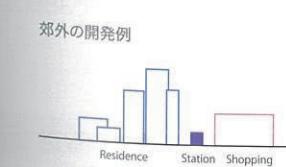
柏たなか駅周辺の風景



TX沿線開発と計画人口

つくばエクスプレス沿線開発の総計画人口は256,000人であり、世帯数はおよそ102,400世帯である。
(2.5人/世帯：1世帯平均構成人員)

東京都内は既成市街地を通っており、千葉県と茨城県にある各駅に多くの人が移住してくる計画が立てられている。特に流山おおたかの森駅と万博記念公園駅周辺に2つのピークがあり、商業施設+マンション/アパートという計画が多い。柏たなか駅は2つのピークのひとつに位置する。



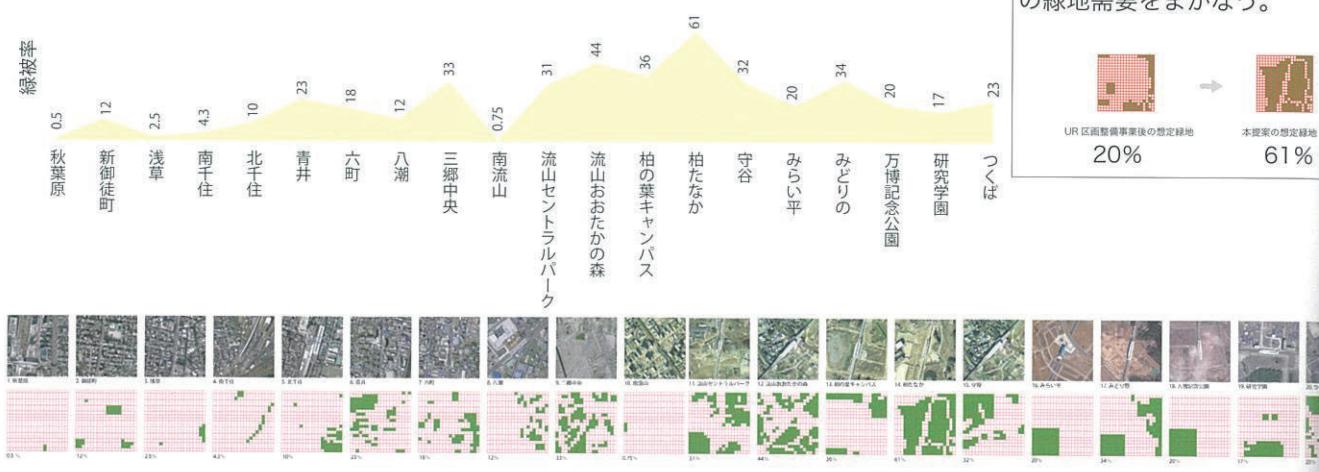
柏たなかは市街化調整区域であったため、開発の手が伸びることなく、農村集落と畑の入り交じる、田園風景が広がっている。30年ほど前に、エリアの東端に柏ビレジが開発された。現在、つくばエクスプレスの敷設に伴い、徐々に開発が進んでおり、駅西側にはマンションと戸建住宅地が建設されている。エリアの北東には利根川の遊水池に広大な水田を有し、柏市で一番の穀倉地帯である。

SURVEY

TX 沿線各駅周辺の緑被率

緑地抽出範囲 : 各駅周辺 200m 四方
 グリッド : 10m 間隔、1マス 100 m²
 本分析の緑地の定義 : 地域性緑地（自然公園、風致地区、農地、保安林、河川区域など）
 施設緑地（都市公園、グラウンド、スポーツ施設、寺社境内など）

(開発中の駅前（みらい平、みどり野、万博記念公園）については、TX の他駅のうち特に郊外と呼べる駅（青井～つくば）で既に開発が進行または終了した駅前を参考に、それらのおおよその平均緑被率である 20% を適用した)



市民農園面積概算

体験農園の吸引力の指標として、柏たなかへの近さ、東京からの遠さ、緑の少なさの 3つを採用する。
 柏たなかへの近さは、柏たなか = 1、秋葉原 = つくば = 0、東京からの遠さは、秋葉原 = 0、つくば = 1 とする。
 緑の少なさは、緑被率 α として、 $(1 - \alpha - 0.39) \times 1.65$ と定義する。

a. 柏たなかへの近さ	0 0.8 0.15 0.23 0.31 0.38 0.46 0.54 0.62 0.69 0.77 0.85 0.92 1 0.83 0.66 0.50 0.33 0.17 0
b. 東京からの遠さ	0 0.05 0.11 0.16 0.21 0.26 0.32 0.37 0.42 0.47 0.53 0.58 0.63 0.68 0.74 0.79 0.84 0.89 0.95 1
c. 緑の少なさ	1 0.81 0.97 0.94 0.84 0.63 0.71 0.81 0.46 0.99 0.5 0.28 0.41 0 0.48 0.68 0.45 0.68 0.73 0.63

柏たなかエリアの計画人口は 10000 人と開発計画より少なく見積もり、体験農園の希望率は 0.89% とする。

吸引力の 3 つの指標をそれぞれ a、b、c とし、各エリアの計画人口を p とする。
 体験農園希望世帯を、 $p / 2.5 \times 0.0089 \times (a+b+c) / 3$ で求める。



→ 体験農園希望世帯は計 410 世帯程度と推測される。
 以上より、 $25(\text{m}^2/\text{family}) \times 400(\text{family}) = 10000(\text{m}^2)$ の体験農園を計画する。



本提案では、1人あたり 10m² の水田を設けることによって、周辺の駅前に住む人で農業に興味のある人は、柏たなかを訪れる。一方、周辺には商業施設が充実している駅がある。柏たなかに住む人は、買い物のために周辺の駅に出掛ける。様々な機能を各エリアが相似形として全てを縮小して持つではなく、それぞれが特徴を持ち、相補的に利用し合う関係を目指す。

1ヶ月、自分たちで作ったご飯を食べる

対象

本提案の対象は、開発により利益を上げる側と、開発に魅力を感じて柏たなかを選ぶ側の 2 つに分類できる。
 以下に具体的な対象と、その対象が受けるメリットを列挙する。

Supply

供給側の対象とメリット

つくばエクスプレス	UR都市機構	柏市
沿線の価値を高めることで、乗客数の増加が見込める。	区画整理事業主体として、他の地域との差別化を図ることにより競争力が高まる。	柏の葉(学)と柏たなか(農)と個別の特徴を有する 2 つのエリアを持つことになる。

Demand

需要側の対象とメリット

柏たなかに居住する人々	沿線の他駅から柏たなかに訪れる人々	都心から訪れる人々
駅を中心に広大な緑地が広がる、『農』が主役のまちに住むことを選ぶ人々。潜在的な新住民や農家の方々。 駅西側の新興住宅地の住民、柏たなかの既存集落の住民、柏ビレジなどの近隣住民。	TX 駅周辺のマンションに住み、庭を持たない人々。 アクセスの良さを活かし、週末に訪れる自分の庭として、柏たなかを訪れる人々。	従前の体験農園が交通アクセスの悪い立地にあることを踏まえると、駅前に体験農園があることは移動の煩わしさをなくし、気軽に体験農園を楽しみたい人にとって、新たな選択肢となる。

目的

本提案においては、農あるまちづくりを掲げる柏たなかが活力のある場として機能するための空間計画を全面的に押し出している。駅前という人目につきやすい場に、また公園という公共の場に、大量の水田があるという点が從来の体験農園と異なる。この仕掛けにより、以下のよう交流と交流に伴う相乗効果を提案の目的としている。

1. 都市住民と農業者の交流促進

相互理解が深まることで、農業への关心や食べ物を大切にする気持ちを高める。

2. 利用者間の交流

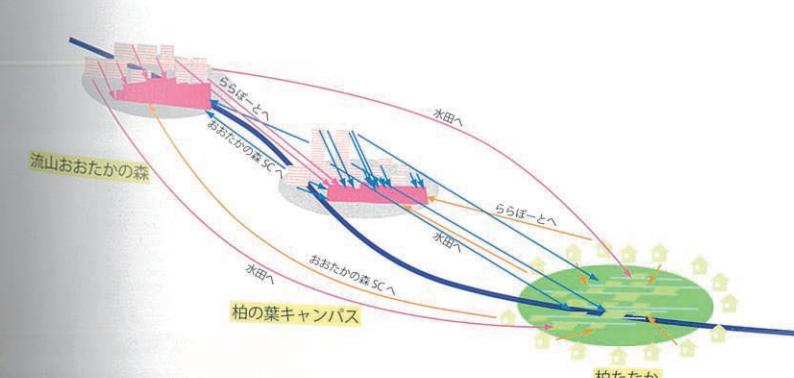
水田を媒介にして、様々な交流が生まれる。週末に農業スクールを行ったり、収穫時期には収穫祭を開催し、老若男女を問わない交流を深める。TX の開通に伴って新たに移り住む住民が多いことからも、新しいコミュニティを構築出来ることは意義が大きい。

3. 農家の誇り

農家は体験農園における先生役であり、街の中心で様々な人に見られることで農家の仕事に誇りが持てる。利用者の成功体験にも繋がる。農あるまちづくりを考える上で、農家の方がより誇りを持って働く空間を創出することは重要である。

4. 周辺駅で相互に利用

柏たなかの駅前に市民農園としての水田を設けることで、周辺の駅前に住む人で農業に興味のある人は、柏たなかを訪れる。一方、周辺には商業施設が充実している駅がある。柏たなかに住む人は、買い物のために周辺の駅に出掛ける。様々な機能を各エリアが相似形として全てを縮小して持つではなく、それぞれが特徴を持ち、相補的に利用し合う関係を目指す。



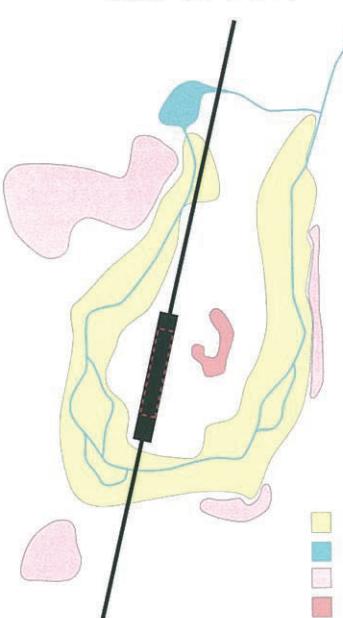
CONCEPT

PROPOSAL

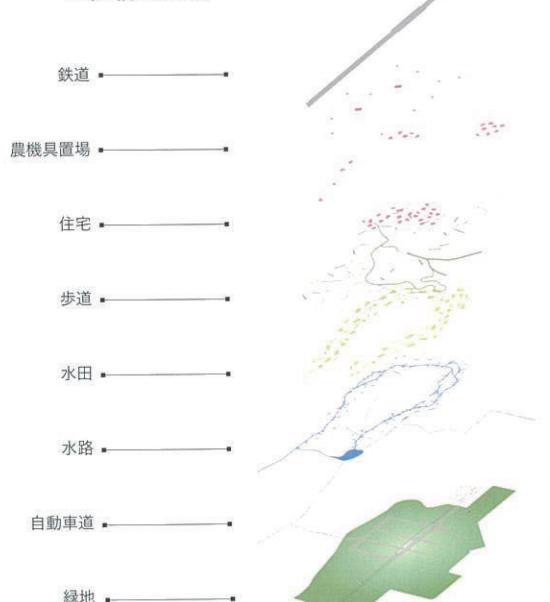
水田公園

既存の水路をベースに水路を通し、その周辺の低地に水田を配置する。利用者同士が密にコミュニケーションを取りることを考え、各水田は2~8ユニットの小さなものとする。住宅はその周辺の比較的高い場所に設ける。

空間ダイアグラム



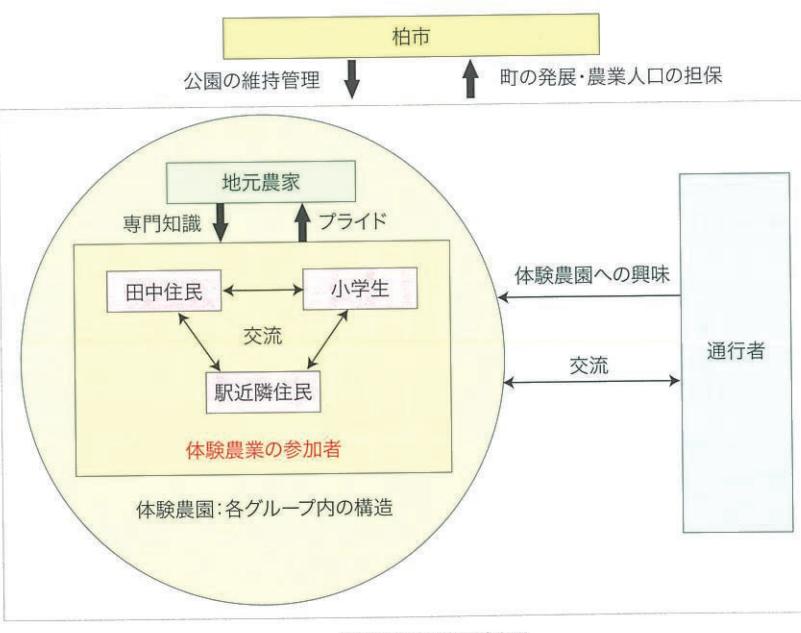
空間構成要素



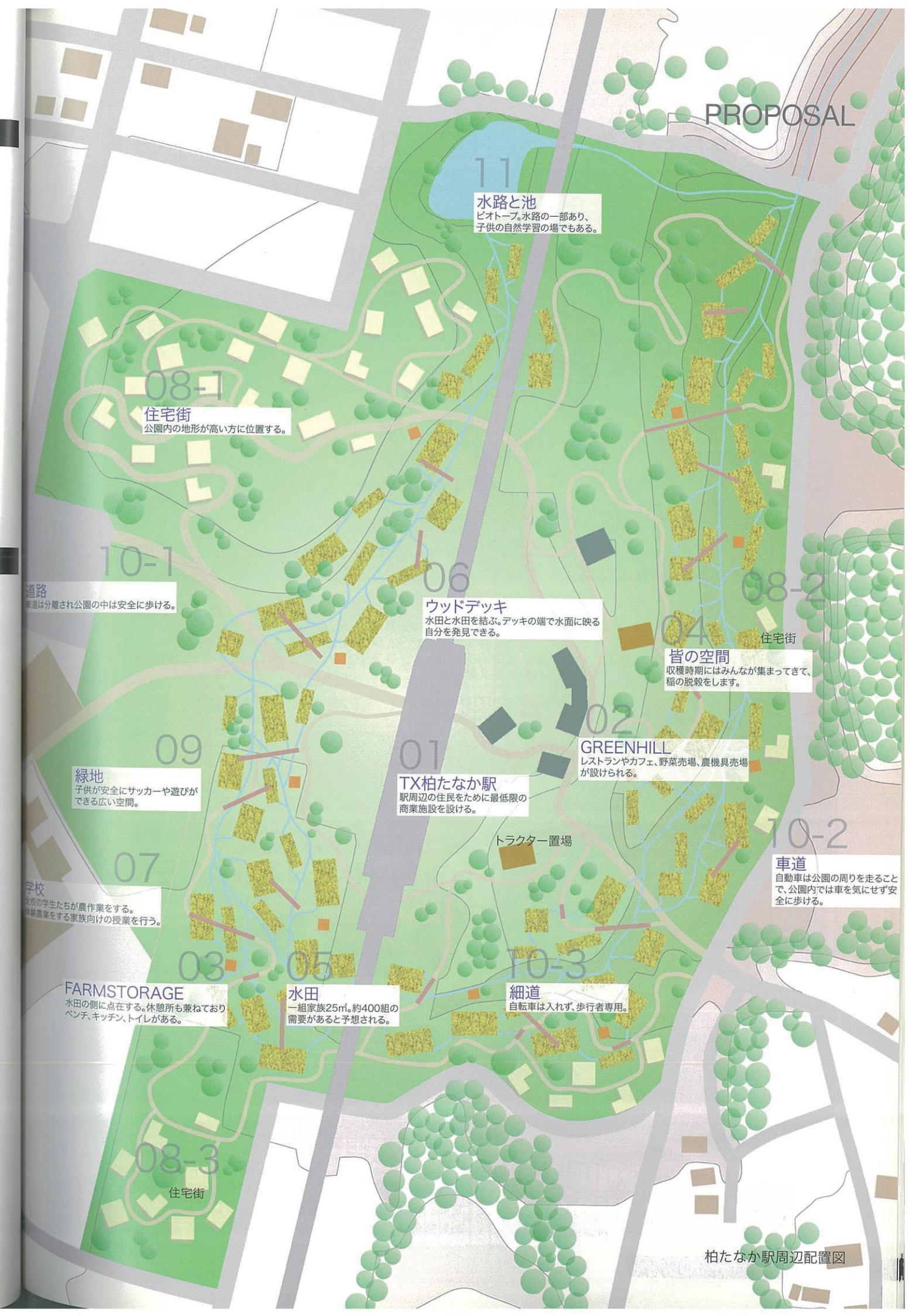
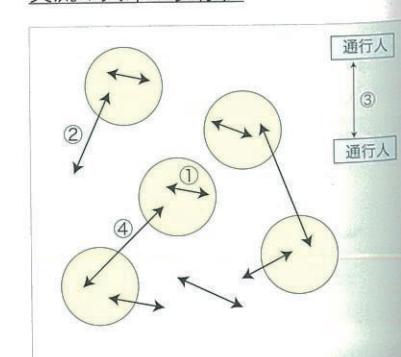
体験農園

体験農園の関係者利益関係

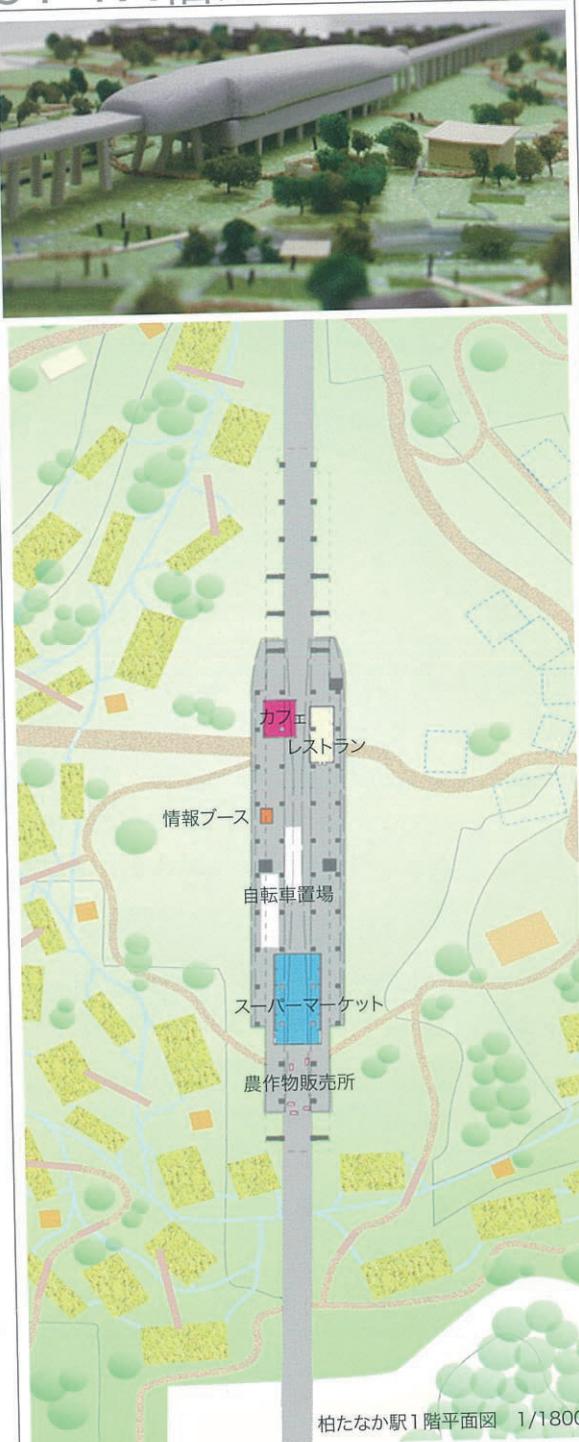
	役割	メリット
柏市	公園の管理運営・体験農園の指導農家の確保	柏市産の米の良さを知ってもらえる。 農業に親しみを持つ人、子供、若者の増加。
農家	体験農園の運営	参加者との交流・体験農園による利益・人々に教えることや、見られることにより農家としての誇りを持てる
参加者	体験農園への参加	身近で本格的な体験農業を経験できる 普段知り合えない人との交流



交流の矢印の多様性



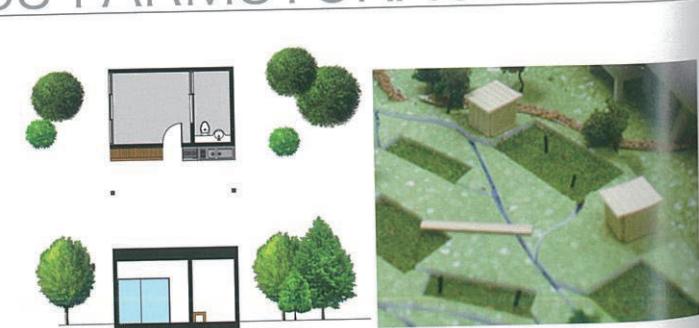
PROPOSAL 01 TX柏たなか駅



02 GREENHILL



03 FARMSTORAGE



カッコイイ農機具

駅周辺の公園には自家用車は入れない。米の収穫時には、公園内を走つても不快感を与える、それを操作することで農業がカッコ良く見えるデザインの重機を用いる。この重機は、専用の倉庫で保管する。体験農園で使用する道具類を収納する倉庫を、水田近くに点在させる。ベンチを持つ小屋もあり、ここからのんびりと公園と水田を眺められる。

04 皆の空間



精米機

精米機が中に入っている、収穫期に皆が集まり一年の経験を共有するコミュニティの場となる。

PROPOSAL

05 水田



06 ウッドデッキ



デッキ

歩道が水路を跨ぐ所にウッドデッキを設ける。水田を横切るものや歩道とは別に設置されるものもある。水田に突き出すデッキでは体験農園をやっていない人も間近に水田を見ることが出来る。

08 住宅街

30~40歳代夫婦・1子家族向け



8-1 公園内住宅 緑地の外延部に配置する。家の前まで緑地が続いている、玄関を出ると、そこは広大な緑地の一部である。**8-2 道路沿いの住宅** 交通が便利な住宅地で、公園側の窓を開けるときれいな風景が目に入る。**8-3 小規模集合住宅** 8個の住宅の集まり。30~40代の家族向け。

10 道路



ライト

駅前を緑地にするため、夜は非常に暗くなる。歩道のライトが足下を照らし、歩道に沿って連なる。

PROPOSAL

07 学校



09 緑地



11 水路と池



STUDENT

—阿南隆史（東京大学大学院）

グループ設計を初めて体験しただけでも、貴重な時間だったような気がします。メンバーで意見をまとめながら一つのものを仕上げていくことの難しさを痛感した授業でした。アイデアを出して整理しながらまとめていく作業においては、コミュニティ班担当の先生方の指導から多くを学ばせていただきました。ありがとうございました。

—金令牙（東京大学大学院）

都市全体をデザインすることと言うのがいかに難しい事なのかクループの提案の大変さをよく感じたスタジオでした。皆の意見をふさわしく反映しながらその提案に根拠を作る。思い返せば、思い通りに進まなくて提案のところで苦労をしたのはすごく勉強になったと思います。少し、「こうしたらよかったです」、「もっと頑張った方がよかったのに」などと思う後悔もあります。しかし、私の足りないところが分かることができたし、柏たなかにすごく愛着ができた時 間でした。先生方のご指導ありがとうございました。

小島 亮輝（東京大学大学院）

アーバンデザインを専門にすると決めて大学院に入り、履修したスタジオでしたが、都市の捉えにくさを改めて感じました。提案の切り口、スケール、密度を全て自分達で決めて行かなければならぬことが、それに拍車を掛けました。柏市やつくばエクスプレスなど身近なものを改めて見つめ、今まで触れたことのなかった農業について考えた、良い機会でした。一人で走らずに、周りを巻き込み、上手くひとつにまとめていきながら作業を進められれば良かったというのが反省点です。グループワークは上手くいったとは言えませんが、指導して頂いた先生方、履修した友人と素敵な仲間に恵まれ楽しく4ヶ月間過ごせました。これからもよろしくお願ひします。

STAFF

— 畠原直 (東京大学助教)

今年度のテーマ「新しい田園都市をデザインする」は、E. ハワードの提案から 100 余年を経た、古くも新しい壮大なテーマであり、受講生はこの壮大さに圧倒されたかもしれない。しかし、ハワードの提案は、都市空間のコンポジションのみならず、自立経営により、どのように空間を自分たちで管理するかというマネジメントの視点も含めた、言わば地に足をつけた提案でもある。本課題では、デザインとマネジメント両面からの視点が望まれ、これが、正に都市デザインの一側面であろう。今回、都市を構想できた（できたつもりになれたか）、チャレンジすることができたか、それでいて、大きな目標にひるまず、一歩ずつ歩むことができたか、都市に生きる人々を想像できたか、そして何より、自分の提案を楽しむことができたか。そして、これは、私が北沢先生に教わったものもある。

白川佑希（東京大学大学院）

都市デザインスタジオは、建築や都市計画を学んだことがなかった私にとって、用語・考え方・作業…全てが新鮮でした。特に模型を作っていく時、出来上がった時のワクワクした気持ちちは忘れられません。いつかまた模型を作ってプレゼントしてみたいなあと思います。そしてこの授業で学んだことを、専攻でも活かしていきたいです。最後に、コミュニティ班の人には色々と迷惑をかけてしまったこともありますでしたが、4ヶ月間どうもありがとうございました。

一丸上雄哉（東京大学大学院）

模型初心者の僕としては、皆で協力して、見栄えのする模型が作れたことが、一番の思い出です。今更ながら模型の作り方を学びました。いつの間にか画像編集の技術も身につきました。

自身のスタイルを曲げて徹夜もしました。どれも良い経験になりました。ただ、授業中盤で計画を考え直した辺りから、僕らの提案は槍玉にあげられるようになりました（笑）建築特有のきつい言葉、忙しい毎日、自分の適性への疑問。結果、甘ったれの僕は、見事にスタジオへの意欲を失ってしまいました。必死にフォローしてくれた4班担当の先生方には本当に申し訳なく思っています。すみませ

TITLE

Melting pod

STUDENT



rob ragoen



mathieu wauters



川沙繪子

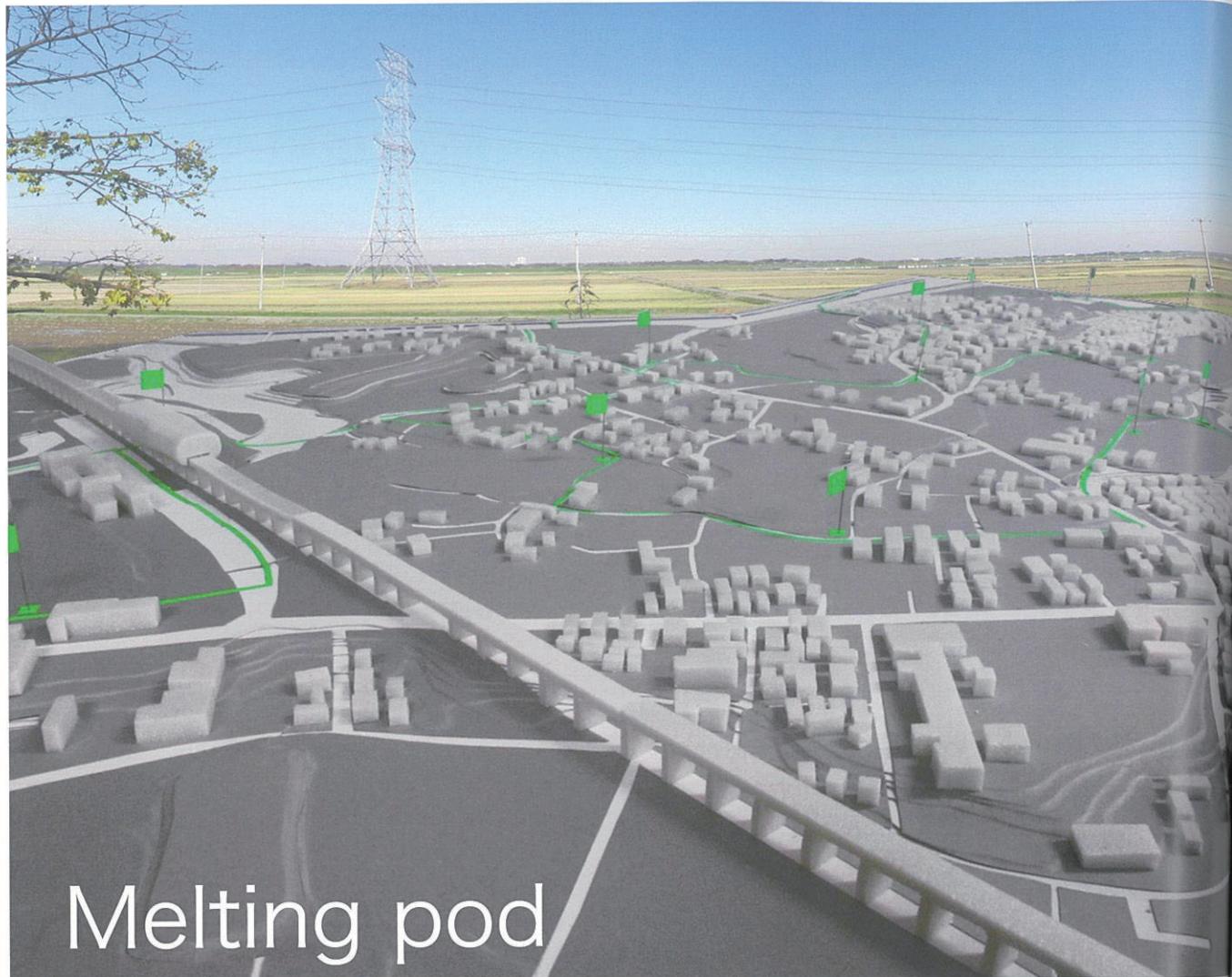
STAFF



二十一



八一三六四四



1. 問題意識

●言語の壁、関わるきっかけ不足
私たちのグループには留学生があり、外国人にとっての言語の壁や現地の人と関わるきっかけの少なさを実感していました。柏たなか周辺には大学キャンパスが多数あり、多くの外国人がいます。また、東大の柏国際キャンパスプランもあり、国際化の可能性に富んだ地域です。同時に住民と訪問者、住民同士の関わりももっと楽しく活発になる可能性があると考えます。

●大規模開発への危惧、気づかれていない地域の魅力
駅周辺を始めとして少しずつ開発が始まっています。豊かな土地を持つこ柏たなかに、今後それを壊しかねない巨大な建造物が建つ可能性も考えられます。同時に、この地域ならではの風景や魅力をもっと多くの人に知って欲しいと考えます。

2. ライフスタイルの提案

●Knowledge exchange : 知識交換
何かを「交換」するという具体的な方法で人々の関わり合いを活性化させます。特に外国人と日本人、新規住人と古くからの住人それが持つ知識を交換する場を作ることでお互いのことを知り、一人一人の世界が広がることを期待します。

●サイクリングツアーや点在するPOD
地域を一周し、風景を楽しむサイクリングロードを設定します。同時に、それに沿って小さなPODを点在させます。PODは、様々な機能を持った小さな空間で、サイクリング中に立ち寄る、住民が日常生活使う、知識交換などの用途があります。

●Melting pot(d) るつぼ

外国人訪問者、日本人訪問者、外国人住民、新規住民、古くからの住民、農村地域、新興住宅地、線路の両側など様々なものや文化、知識が混ざあわせた「るつぼ」のような場所が生まれます。るつぼは英語で melting pot と表現します。

3. 社会システム

●1lecture = 1night stay
外国人訪問者は1時間の英語授業を行い、一晩の宿を得ます。同時に彼らは日本の文化や言語を学ぶ機会を得ます。

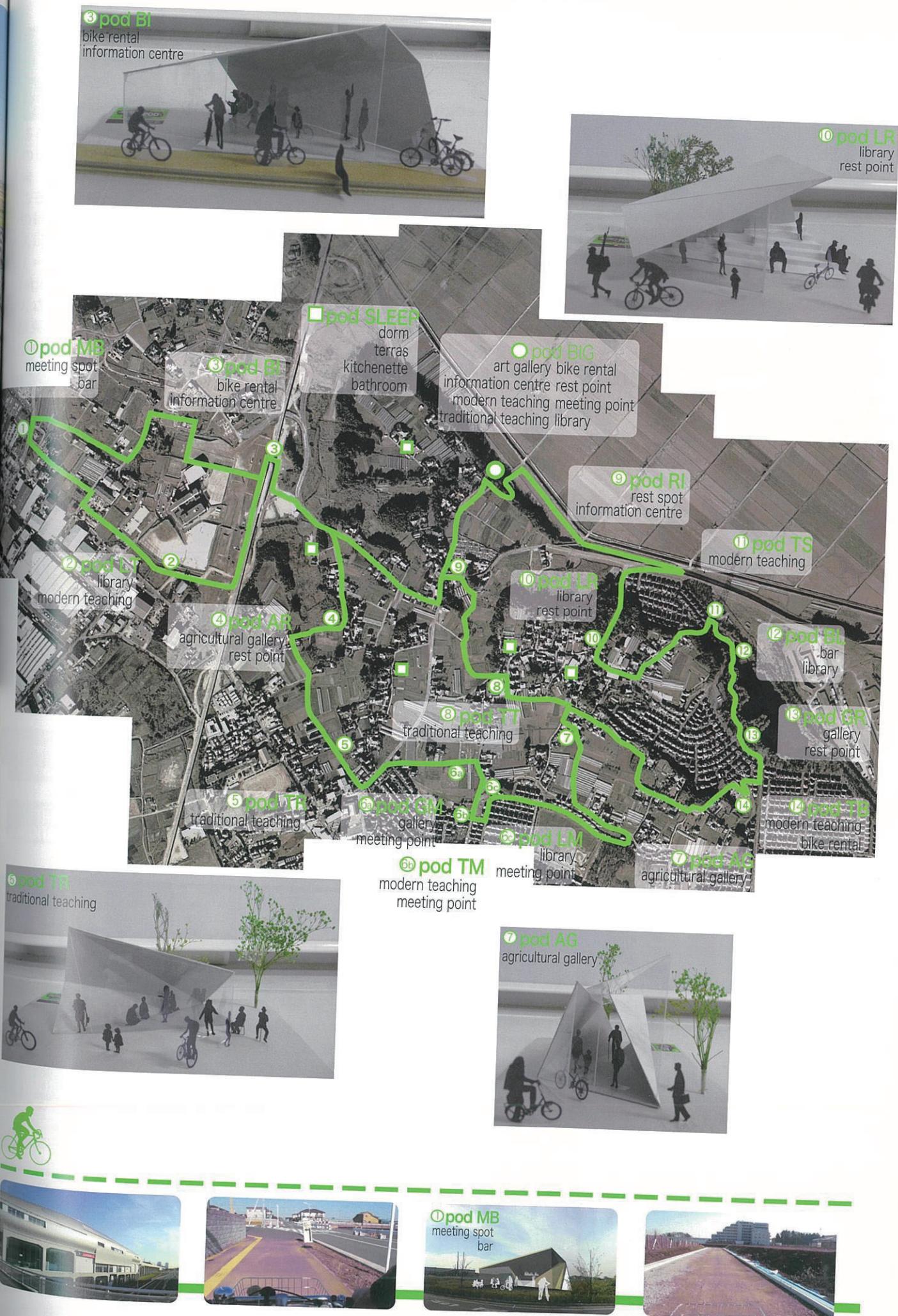
●PODのもの多様性、可能性
PODの機能は、教室(英語、日本文化、料理、農業など)、ライラリー、カフェ、休憩所、ギャラリーなどがあります。これらを様々な人が混ざり合いながら使います。全PODを使ったイベントなども行います。また、一つ一つが小さく、時代や環境に合わせて立地、数を自由に増減しながら地域にとけ込んでいきます。

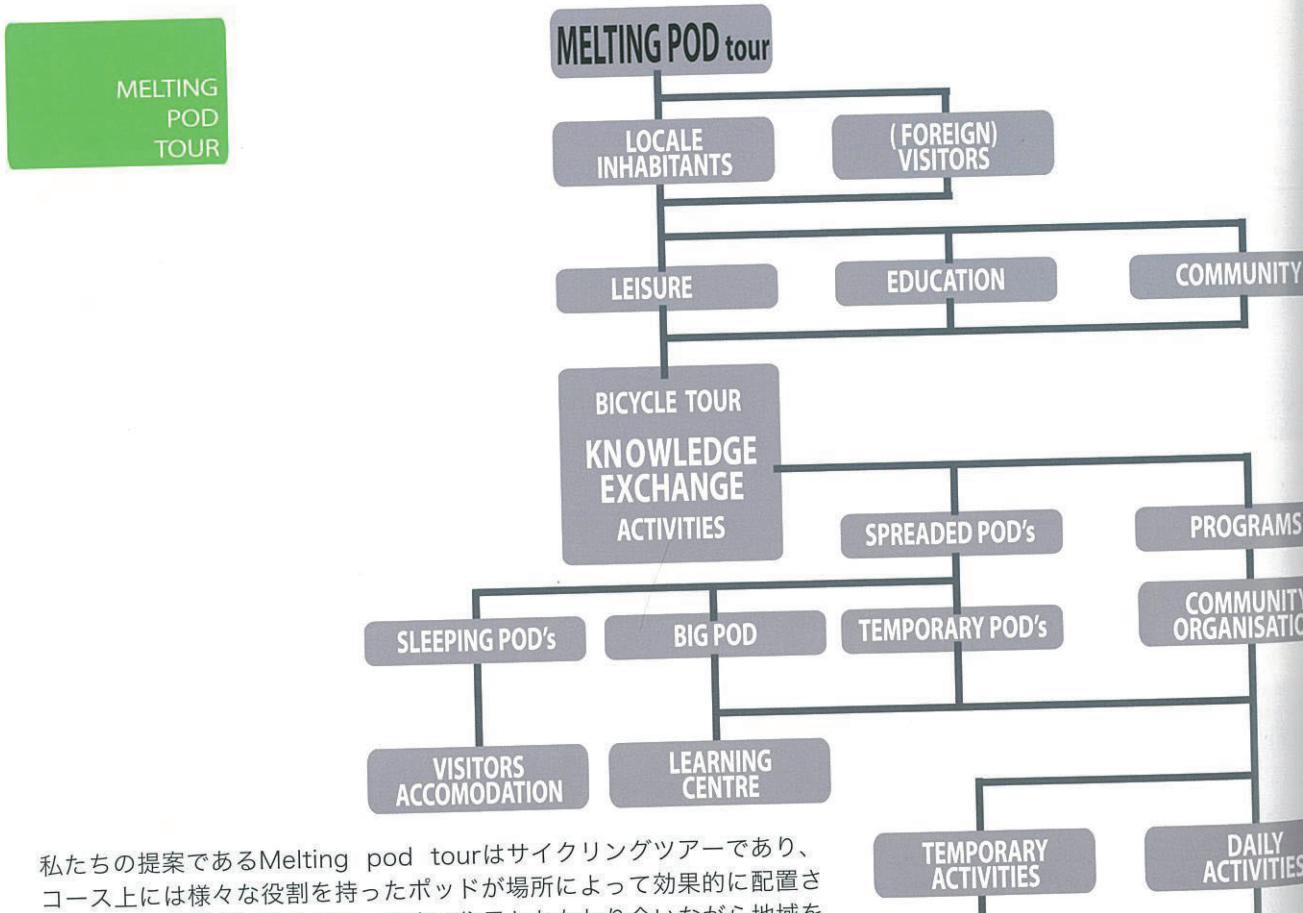
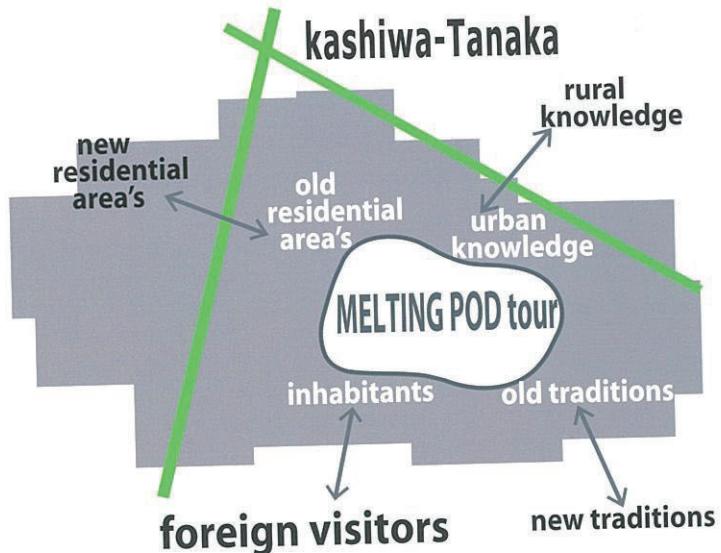
4. 空間デザイン

●POD (SMALL PODS)…活動を包み、また角度によって印象が変わる自由な造形です。外部と内部の境界が薄く、お互いの活動を感じられます。

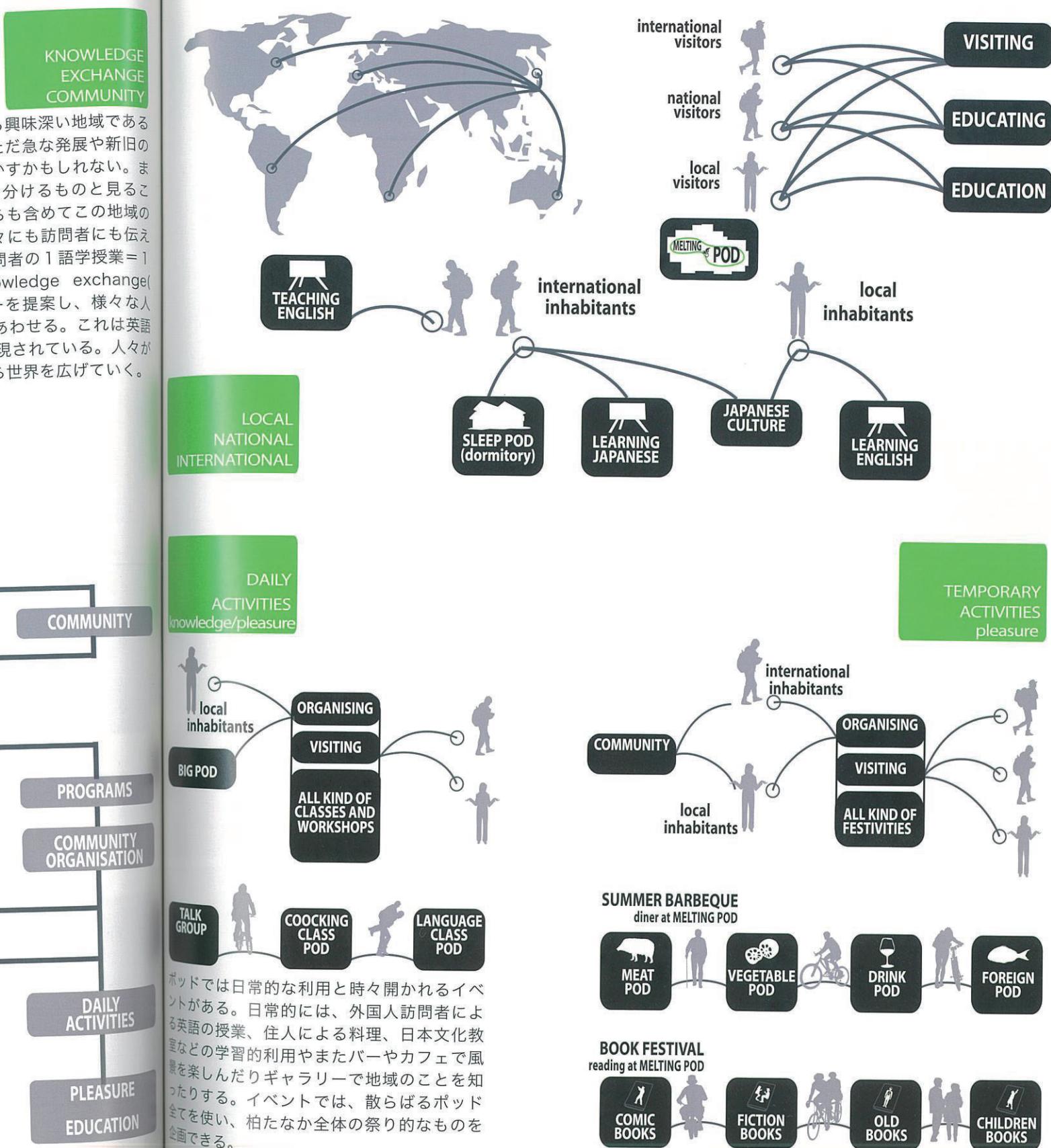
●SLEEPING POD (宿)…古い空家に新しい内部をめ込み新旧融合した空間に宿泊します。

●BIG POD…田んぼ地帯との間の堤防部にあり、風景を楽しみながらあらゆる活動を包み込みます。





私たちの提案であるMelting pod tourはサイクリングツアーであり、コース上には様々な役割を持ったポッドが場所によって効果的に配置されている。訪問者はこのツアーの中で住民とかかわり合いながら地域をまわり魅力を知る。訪問者も住民も自由に教室、図書室、ギャラリー、カフェなどでリラックスして風景を楽しみながら知識交換をし、文化的な時間を過ごす。ポッドは日常的な活動の他にイベントも行い、学習、機能、楽しみ、といった様々な顔をもつ。

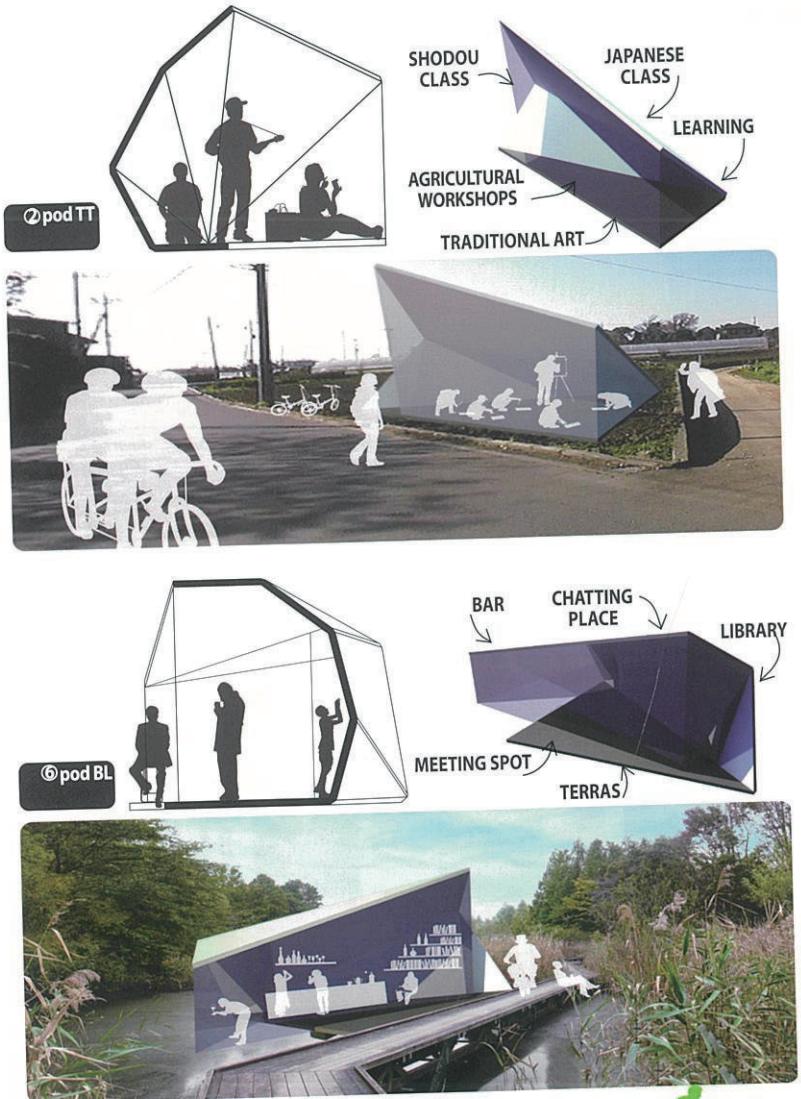


EXAMPLE
SIMULATION
POSSIBILITY

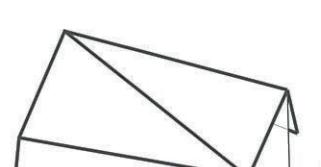
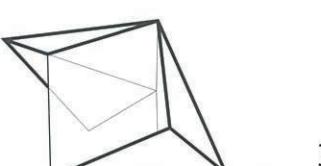
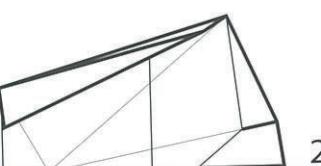
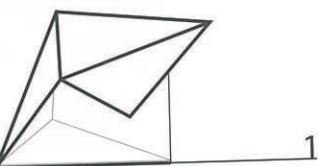
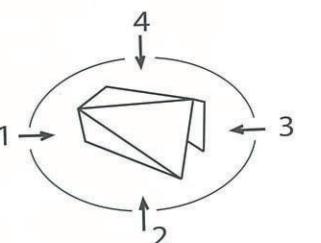
地域に散らばる小さなポッド達はそれぞれの活動を包むさやのようなイメージである。内部と外部の境界はゆるく、中での活動が外から見え、また外の風景や動きが中の人たちの視界に入って来る。また、見る角度によって、日の当たり方によって様々に表情を変える。

通りすがりに英語教室の楽しげな雰囲気が目に入り、次回参加してみようと思ったり、のんびりくつろいでいる人々に誘われて自転車をとめたり…。

活動、知識、出会い、様々なものを地域にばらまいている。



PODS HAVE A
LIVELY ARCHITEC-
TURE AND DESIGN



OPEN ACTIVITIES



COVERED ACTIVITIES

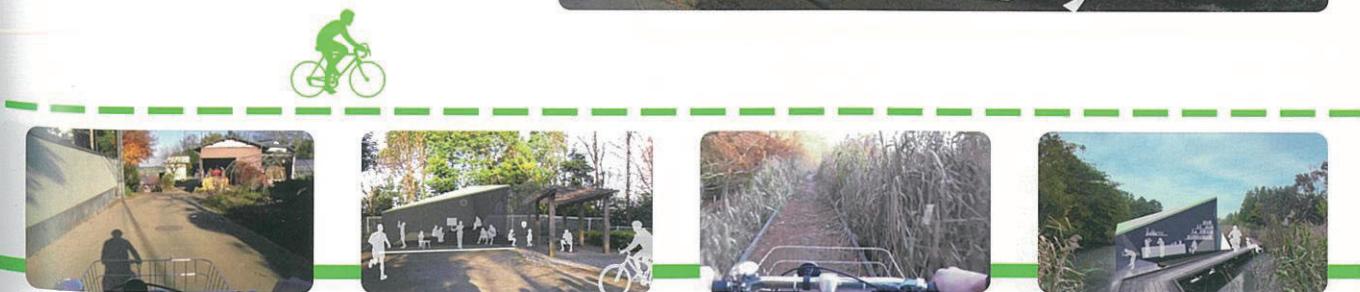
PODS PROVIDE A
SPACE FOR ALL
KIND OF ACTIVITIES

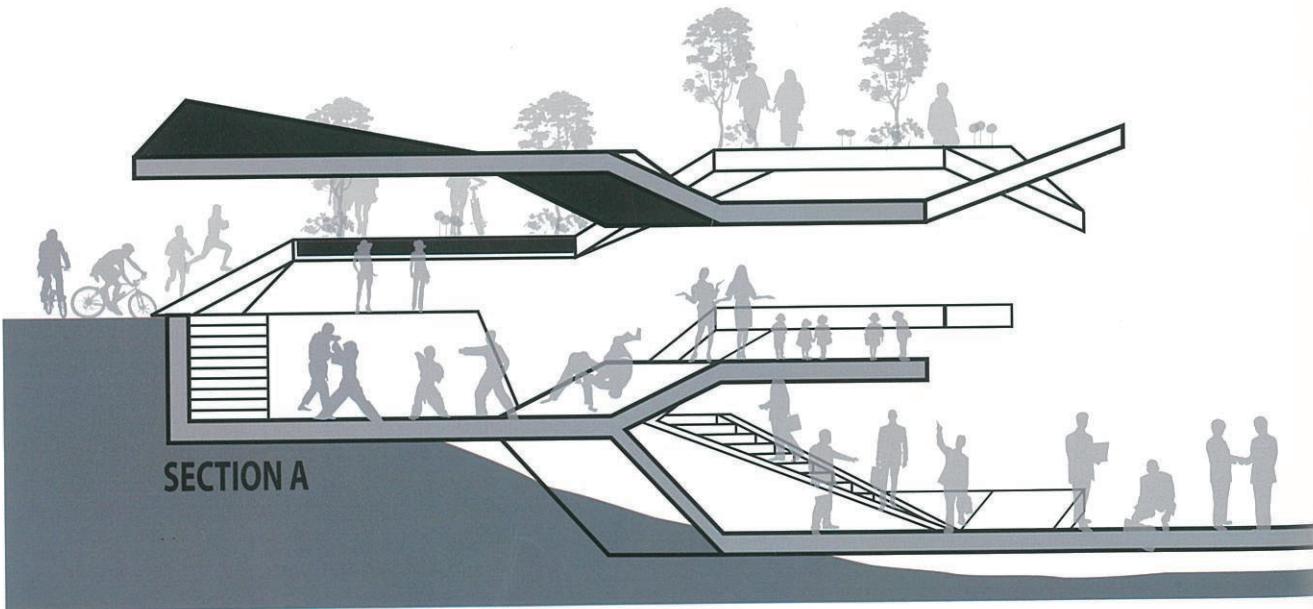
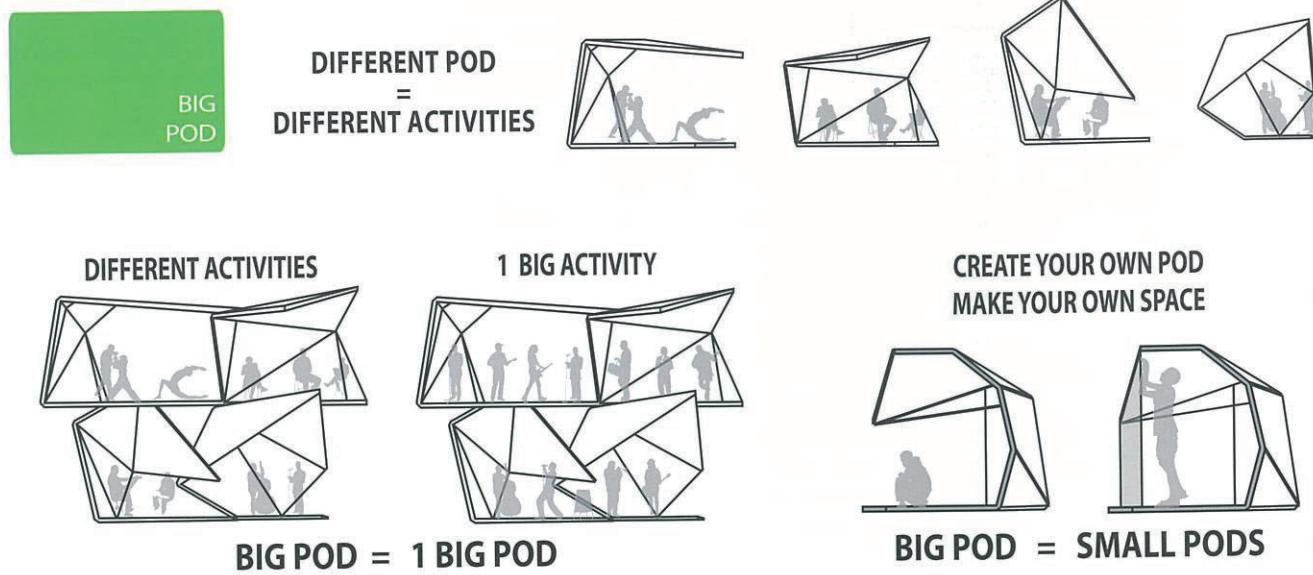


FUNCTIONAL PLACE



ACTIVATED PLACE





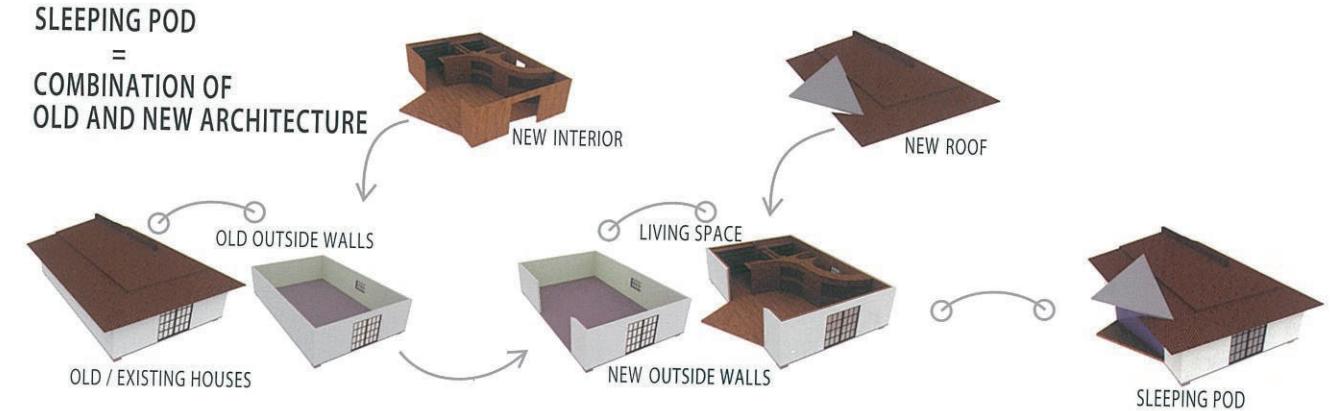
SLEEPING POD

1 NIGHT ASLEEP

international visitors

1 HOUR TEACHING

'Accommodation in exchange for knowledge' instead of 'Accommodation in exchange for money'



04 総評

STUDENT

—rob ragoen (千葉大学大学院)

A good design is a process of many months with the help of different opinions and suggestions. UDCK is in that way the ideal place for the developing of fresh ideas and new perspectives.

As a foreign exchange (AUSMIP) student from Belgium, I founded it an enormously rich experience in this lab. Thanks to the collaboration with students of all kinds of faculties, I learned a lot about the developing of Japan and will now look at it from another point of view.

I hope we managed to produce a good design and concept idea for the area of Kashiwanoha and hopefully in the coming years it will has its influence in the developing of this beautiful area.

—mathieu wauters (千葉大学大学院)

The difference with UDCK and any other university project I've done is that students are actually doing meaningful work that serves a higher purpose than merely sharpening the student's design skills. In UDCK we were part of a think tank, searching for good ideas from students and professors year after year and taken seriously by the local community. The motivation of the student to work hard is thus instantly doubled, in the hopes to contribute to something real and meaningful. As an exchange student from Belgium, the challenge of bridging the language gap between Japanese students and professors and ourselves has pushed us even more towards presenting our project in a more graphical way. The hands-on approach of UDCK lab has in that sense been a very stimulating and enriching experience for me.

—安川沙絵子 (千葉大学大学院)

今回、私にとってほとんど初めての都市計画のスタジオでした。

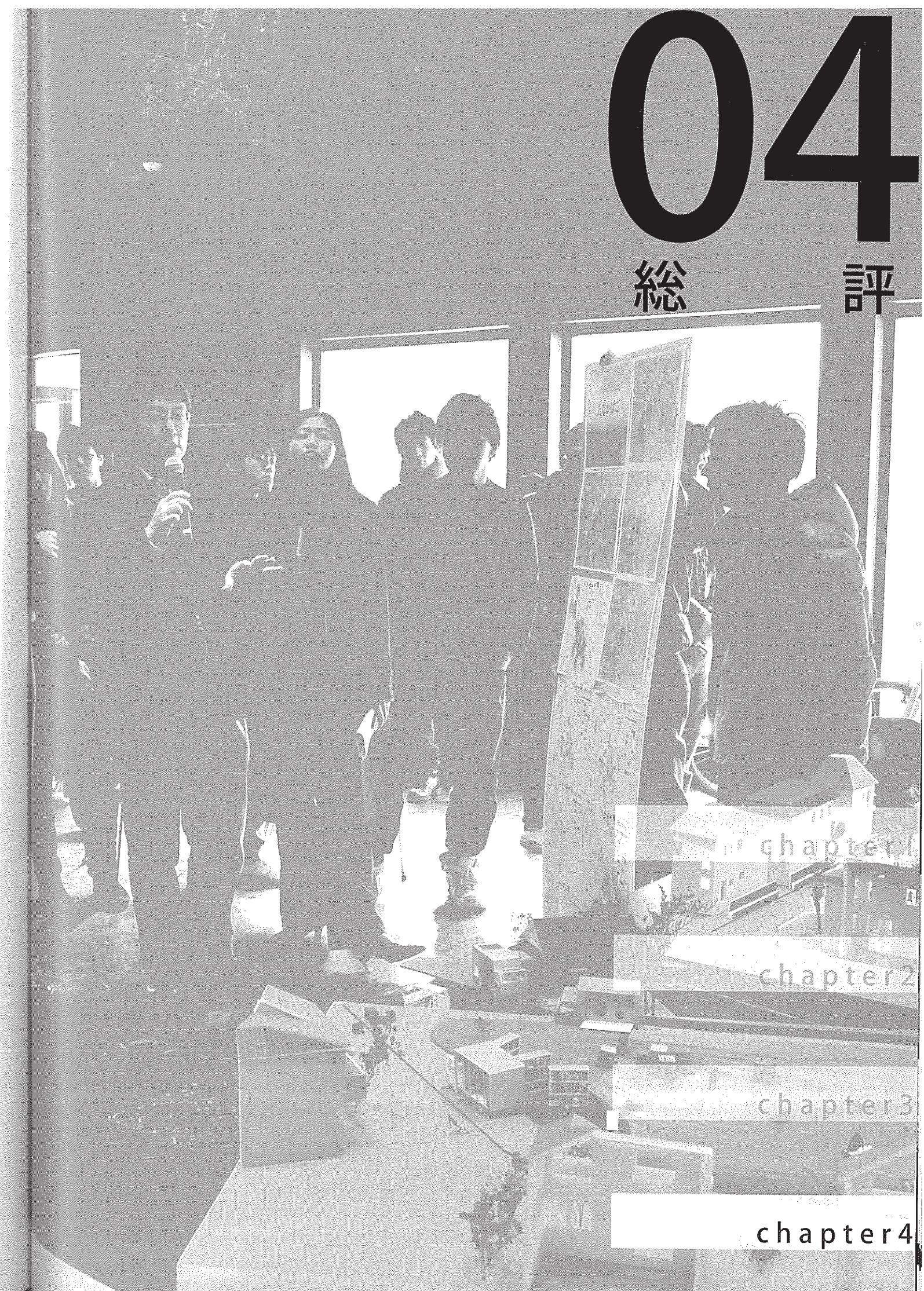
「実際にその土地につくり、人が使う」ということを常に意識し、頭の中にそのシーンを浮かべていることの重要さに改めて気づきました。また、貸し自転車で自分の身体を使って現地調査したり、住民へのヒアリングなど、その地域を自分自身で実感しないと提案も実感のあるものにならないのだと感じました。

最終プレゼンで、提案に対して住民の方々から積極的に意見をもらえたことが一番印象的で、大きな収穫でした。来年以降、毎週のエスキスから住民の方々が参加して、意見が飛び交い、このスタジオがさらに盛り上がっているのだろうなと想像しています。

STAFF

—鈴木弘樹 (千葉大学助教)

このグループは、AUSMIP (Architecture and Urbanism Student Mobility International Program) のプログラムでベルギーから来た交換留学生と AUSMIP 経験者の千葉大学学生によるグループで、お互い留学という共通点を持つ。彼らの課題に対する取り組むは、シンプルなアプローチから発想している。留学生（外国人）にとって住みやすく、居やすい場所、地域の人々とコミュニケーションが取りやすいシステムを提供し、それがまちづくりに生かせないかという発想である。今回の留学生も強く感じていることに、特に日本では、言葉の壁や国民性から外国人にとって地域に溶け込みにくく、コミュニケーションが取れないことが彼らの率直な問題であった。また、柏の葉キャンパス一帯の地域は、国際キャンパスタウンという構想をもとにまちづくりを行っている。今回の提案は、留学生からみたまちづくりの提案であるが、地域住民と留学生（外国人）の間に障害がない国際的なキャンバスづくりの提案として可能性を持ちまた、夢を抱かせる提案である。



オ 2009 の感想

学准教授)

は、昨年度に引き続き田中地域を対象とした。田中は緑が豊かで農業を営んでいる風景がらを中心に「新しい田園都市」をそれぞれのグループが考えた。当初は5グループそれぞれスタートしたが、結果として農業を積極的にとらえて生活に取り込みつつ風景としてもと、竹を資源としてとらえた1グループ、広域の田中地域をモビリティによってつながりをえた2グループの3つのコンセプトに集約された。特に農業については昨年度も中心的な、今年度は農業の難しさを理解しつつ水田や畑を駅前に積極的に配置するという、より大いた。竹を中心と考えたグループは、田中地域での新しい資源を探すというスタンスがおどりティを考えたグループも、車、自転車とそれぞれの良さを十分引き出した提案であった。い部分もあったが、それぞれ特徴が出て、バラエティのある案がそろったといえる。また、では、住民の方々など関係各位のお話をたびたび聞くことができ、学生にも、我々教員にいた。2年間続けてきた田中という地域で、単なる住宅地としての開発ではなく、かといっ市ではないより現代的なことを考えることができたと感じている。北沢猛先生の宿題に答はわからないが、これからも学生と一緒にまちについて積極的に考えていきたい。

理科大学准教授)

しながら4年目を迎えた都市デザインスタジオ(UDS)は、昨年度に引き続き柏たなか一マごとにグループを組んでデザインするかたちを取った。良かったのは、地域の魅力方がそれなりに異なっていたこと、農の風景の魅力などは共通の認識であったが、TX沿線や移住の時期による3種の住民層、放置竹林など、それぞれの着眼点が提案の個性につ調査分析・組織や仕組みの提案・空間デザインのバランスが比較的取れてきたように思う。配分は異なるが、都市デザインの複雑な思考プロセスに挑戦したことがわかる。

次は、実際に地域に接する場所で作業をし、地域に向けてプレゼンテーションする機会が実現する可能性もある。だから、学生らしい自由な発想の羽ばたきの中にも、ある種が求められる。地域を生きる住民、専門家、官民の組織等が、都市づくりのアイディアくためには、翻訳能力と場が必要だ。学生たちはUDSのプレゼンテーションを通してそれを眺めながら顔をつきあわせられるUDCKがそうした場になろうとしている。

し、たくさんの種を蒔いて、力を注がれた都市づくりは、柏の葉でも着実に根づき、育ての1年目からティーチングスタッフとして参加させていただいた私にも、北沢先生の時いる。これを大きく育っていくことを託されたのだと感じている。



最終講評会

2010.1.30 13:00-17:00

FINAL PRESENTATION 2009

2009年度 報告会兼意見交換会

2010.01.30 SAT 13:00-18:00

1班 モビリティ ぶらっと

地域住民

良い発表でした。柏ビレジでも是非取り入れたい。特許を取ればいいのではないか。

追川 (UR)

新規住民がぱつぱつと住み始めているので、その交流の場として良いのではないかと感じた。

安藤先生

ビジネスとして成立するのかが疑問。角地にした理由は?

>車両によっては曲がりきれない細い路地が多いので、角地を採用した。

伊藤先生

普通のカフェを設置するより、時間が限られている方が、人が集中して集まってきた。中心市街地でもなく、人の密度が高くなないので。

「ぶらっと」の空間の設計も面白ううなので、もっと詳細に見られれば良かった。



大野先生

公共施設が閉鎖される事例が多いため、研究室でも、移動図書館のような移動型サービスの研究をしている。建築と自動車の接続はテクニカルに難しい。車のサスペンションが長い時間留まるのに適していないかったり、雨が降ったときどうするかなど。どんな状況にもびたっと合って、しかも簡単に出来るアイデアが求められる。

2班 農地班 畑SCAPE

地域住民

素晴らしい構想である。美しい景観のために畠を残すのか、従来どおりの産業・生産としての場なのか、または周辺の住民に新鮮な野菜を提供する場なのか、どこに焦点があるのか。

>更に魅力的な畠を実現するために計画した。大畠は生産ではあるが、研究施設を入れて実験的な機能を伴わせた。小畠は生産性もあり、新しい住民の交流の場として考えており、また自給可能な規模を計画している。

大野先生

ベルサイユ宮殿でマリーアントワネットがお百姓さんを見たいというブチギヤノンの発想と似ている。直線では排水が出来るか分からない。>町の象徴となるインパクトのあるものを意識した。西側は、造成されて既に平らになっており、また池を配置しているので排水は可能である。



追川 (UR)

畠に着目したことはいいことである。都市と農の共存の一つの形態として考えられる。現在の開発の中で、生産緑地が減少するが、なるべく維持していきたいと考えている。また体験農園を通じて、活用していきたい。畠を通じたまちづくりを考えていく上で、発想を参考させて頂きたい。

日高先生

実際に柏なかで体験農園に参加するといふと思う。

3班 環境技術班 竹がつむぐまち

斎藤 (TX)

まちづくりは竹のように根を張り巡らせていく。竹を中心としたまちづくりはその象徴のようですばらしい。目をつぶっても竹の音を聞きながら歩いていき、景観を感じられるのが良い。竹の匂いも同様。ビジュアルに知らないまちづくりにつながる先導である。

大野先生

まとめ方がプロフェッショナル。柏の木ではなく竹である理由は? 竹から他の種を守ろうとする動きの中、竹を積極的に利用するのは生態的にどうなのか?

地域住民

4人で管理すると書いているが、出来るのか? 今、竹は厄介者扱いされている。放置竹林の伐採には多くの人手と時間がかかる。住民が熱心に参加してくれれば良いが、人が集まらない場合、どうすればいいのか? >放置された竹林は確かにやっかいだが、いったん竹取隊のシステムが軌道に乗ってしまえば、あとは若い竹を駆除していくべきなので、労力は減ると予想される。

追川 (UR)

どういう経緯で竹になったのか? >柏市史を読んでみると、竹を使った工芸品の職人の話が出てくる。地元の竹を使って作ったものが良いということになった。竹への愛着というより、竹がつながりを生むきっかけとなると思ったので。



近隣住民

思いつきでも、やろうという意志が大事。

4班 コミュニティ班 Rice & Park

千葉大安藤先生

提案の必然性がわからない。本当に駅前に必要? >他の駅との差別化、同じような駅が続いている現状を変えたい。計画された緑地を駅前に持つていたら新しいものが生まれるのではないか。

地域住民

生活に対してはどのような配慮があるか? 現在、駅前は何もなく、暗く、夜は怖い。 >小道をライトアップする案は一応ある。

地域住民

電気がついているから安全というわけではない 全部公園ではなくて住宅を入れようとはしなかったのか? >駅から少し離れた場所に住宅を計画している。



大野先生

ただ人口密度を減らしただけでは提案として難しい。公園のまわりにビルを建てるなど、計画人口を抱えられるだけの提案にするなど、周りの環境もみた専門的な解答が欲しかった。

5班 コミュニティ班 (千葉大) Melting Pod

地域住民

地域の人との交流がイベントと英語を教える以外にあればいいと思う。柏なかには他にも良いところがあるので、歴史的なものも取り入れられれば。住んでいても知らないものもあるのでそれも知れるような仕掛けがあれば。

>散らばるポッドを使う中で、自然と知り合いになっていくことを考えた。



地域住民

平日は利用者が少ない中、運営はどうするのだろうか。興味深いが、ビジネス、運営としては難しい。ポッドを作るのにも金がかかるし、公共投資をするのか。お年寄りは、時間はあるが、行くところは限られているので、ポッドは良いと思う。自転車に乗れないお年寄りは車で行く事になるのだろうが。

地域住民

外国人と日本人の生活習慣のズレがあるだろうから、学生に聞いてみたい。 年記者と若者のズレもあって、受け入れられない事もあるが、どう思うか。 >専攻内にも外国人が多数いるが、積極的に話しかけないと交流は生まれない。交流を生む場としては、面白いと思う。

大野先生

ポッドは小さいような気がしたのだが、滞在者が泊まるような、もっと大きなポッドの構想はなかったのか。 >あくまで立ち寄る場所としての提案。宿泊機能は地元住民が多いので、それぞれの家でいいと考えた。

地域住民

柏ビレジに既にある、「はなみずき」というコミュニティカフェはある意味でポッドといえる。

総評

地域住民

大学院は職業訓練の場であるべき。学生にはもっと暴れてほしい。

清水先生

今まで通りではだめ。今日の学生の発表はやりたいこと、新しいこと、現状の問題などを提案できていたと思う。プレゼンも比較的、直しの成果が出てそれなりの仕上がりであった。せっかく模型を置いていたのに、それをうまく使えていなかったのは惜しかった。後で見てもらえたたら。

千葉大 安藤先生

年末のプレゼンに比べるとしっかりしていて、違った印象を受けた。前半の段階で今日くらい学生達の中で整理されていればもっとよかつたのではないか。全体的によかつたと思う。

千葉大鈴木先生

説明、プレゼンともに12月より上がったと思う。

東京理科大学 伊藤先生

12月に比べると伝わりやすくなっていたと思う。ツーリズム体験や竹の体験を通じた提案というのが印象的だった。それらの体験を地元の方々などにフィードバックしながらやっていくのは良いと思う。

大野先生

都市構造、社会が変わっていく中で、柏の葉では先端的なものを扱っていこうと思っている。言い訳めいた話にはなるが、新しいものというのは、なかなか形になりにくいものだと思っている。歴史のある分野というのは蓄積を活かして良い形になりやすい。学生の学ぶ場というのが実験場になって新しい分野が育つべきだと思う。

建築の立て替えスパンが非常に短いという特異な日本であるが、どんなサービスがあれば我々が幸せになるかという答えがまだなく、そこを追求していかなければならぬ、専門家ではない方々の意見というのはそういう場面で非常に重要である。
北沢先生のもとで発展してきたスタジオだが、これらも発展させていきたいと思っている。

三牧さん

演習に4年程参加している。漠然としたテーマを毎年取り扱っていると思う。都市計画の専門性は多様になってきている。いろんなアプローチが混在する中でまちづくりが行われているということを再確認した。学生がどういうことを考えて提案をしているかということこれまで思いを巡らせていただけたら。

野原先生

新領域という、既存の研究分野のみならず多様な分野と連携しながら研究をしていこうという中で行われている本スタジオは、普段の授業とは違ったプロセスやアプローチを経て、チャレンジできる環境であると思っている。

北沢先生は実践するということに重きを置いていたが、今回の発表でも、自分たちの中で実践しようという思いが強かったもののほうが、伝わってくるものが多くなったように思う。来年のスタジオは柏ビレジの住民の方に加わっていただき、一緒に考えていくような形もあるのではないか、と思った。

栗原さん

竹の班は初め形になるか不安だったが、軸がぶれずに提案できたので良かったと思っている。どうやって住民を巻き込みながらやれるか、ということを考えるべき。どううまく仕組みを成立させるかというところまでデザインするのが大事だと思う。

丹羽さん

伸びが凄かった、もっと早く伸びていれば面白かったと思う。スタジオと市民講座というの今まで区別して考えていたが、今日それが繋がったような気がする。スタジオのようなことが市民講座でもできるのではないか。市民講座の進め方も模索していきたいと思う。

前田先生

エスプリの効いた提案をしてください。今後もそれを活かしてほしい。

日高先生

スタジオは今後も続けていきたい、こういうものの延長線上にアーバンデザインの可能性が見えてきたらいいと思っている。

清家先生

色々な方に参加していただいたこのスタジオは有意義なものであったと思っている。大学院の学生ということで、誰に向けての提案なのか、という点をもっと意識してほしいと思った。いろんな方に最終講評に関わってもらっているが、もっと色々なやり方もあると感じた。まちづくり講座などと合同でやってみるなど。

TXが通って、既存の町の中に新しい変化が生まれた、さらに開発需要も弱まっている中で柏たなかを処理するか、という課題だった。特殊なシチュエーションの中で提案していくということが面白みだったと思う。この特殊なシチュエーションの中で考えた、という体験がこれから財産になっていくと思っている。

今回で4回目で、次はどういった課題にするかまだ決めていないが、続けていけたらと思っている。

今村さん

去年、スタジオの学生が徹夜しているのを見て感心したものだった。先生、学生も皆よく頑張っていたと思う。作業途中での議論、葛藤、疑問点を将来に繋げていければいいのではないかと思う。



编辑说明

羽田 雄一郎 Yukio NIWA UDCK テネルタ多二/東京大学研究員

欲請李衡之，衡固辭不許。衡曰：「吾雖愚陋，猶知君之賢，故不以爲嫌。」衡既至，劉備與諸將士大會，酒酣，劉備謂諸將曰：「吾自董卓以來，常思興漢室，還舊都，吾每念之，未嘗不淚流滿襟也。」於是諸將盡皆垂淚。玄德曰：「吾非流淚，吾心感動耳。」操聞之，謂張遼曰：「彼人有德，我無能也。」

老兩輩戒烟，循序漸進地慢慢減量，能更順暢地適應轉變。而如果一次跳過全部香菸，改抽低焦油煙，身體會因為突然減少尼古丁的吸收量，出現頭暈、噁心、嘔吐等反應，並可能因為尼古丁吸收不足，導致戒煙失敗。

黒川祐人 Yuto KUROKAWA
東京大学医学院修業課程Ⅱ年

小島良輝 Yoshiki KOJIMA
東京大学大学院修生課程 1 年

福角朋香 Tomoko FUKUSUUM
東京大学文学部修業監督 1年

第四節 治理兩國關係的政策與方法
在殖民地時期，英國政府對殖民地的政策是多樣化的。殖民地時期的政策有時是直接的，有時是間接的；有時是單方面的，有時是雙方面的；有時是強制性的，有時是協商性的；有時是長期的，有時是短期的。殖民地時期的政策有時是單方面的，有時是雙方面的；有時是強制性的，有時是協商性的；有時是長期的，有時是短期的。

T/A からのお尋ね MSC from Teaching Assistant

假谷進吾 Shingo SEKIYA
東京大学大学院博士課程 2 年

佐藤洋一郎 Akitomo SATO
東京大学大学院修業生課程 2 年

解説の如きは、前回の「解説」を参考して、筆者による解説である。筆者は、この解説で、本稿の構成と、各論文の概要を述べる。また、筆者は、本稿の構成と、各論文の概要を述べる。

IEDP

環境デザイン統合教育プログラム

在於此處，我們將會進一步探討如何利用這些方法來達到更有效的學習效果。

高麗書寫用紙
Korean calligraphy paper

福の袋アーバンティボイシ アベボボア・ラッカ 4

卷之三

卷之三十一

該局 諸君其參看此函為盼。特此佈。此。丁(孟卿印)